Osaka University Knowledge Archive

Title	茶道と恋歌（一）：「恋歌ハいむべし？」
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本研究. 2004, 28, p. 209-297
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23283
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

茶道と恋歌(一)

――「恋歌ハいむべし」?

岩井茂樹

はじめに

ある時、谷崎潤一郎の「恋愛及び色情」(『谷崎潤一郎随筆集』岩波文庫、昭和六十年八月)という随筆を何げなく読んでいたところ、次のような一節が出てきて驚いたことがある。それは、「日本の茶道では、昔から茶席へ掛ける軸物は書でも絵でも差支えないが、『恋』を主題にしたものは禁ぜられていた。ということはつまり、『恋は茶道の精神に反する』とされたからである。」というものである。この随筆はその後東洋恋愛文学論を展開するのであるが、この一節は強く印象に残ったと同時に、何故「恋」がいけないのかという事がその時の私にははっきりとわからなかった。

なるほど茶道は禅と結びつき、時に「茶禅一味」などといった言葉が使われ、その精神性が強調される。かといって何故「恋」だけが排除されなければならないのか、といった疑問はいつまでも残ったままであった。

茶道(「茶の湯」とよぶことも多いが、本論稿では以下茶道とする)において「恋」が問題となるのは、恋歌である。例えば床の間に飾る掛物がその最も代表的な例であろう。茶道と和歌について関係が深いことは今までも何人かの研究者によって指摘されている[1]。にもかかわらず、茶道と恋歌についての論稿は皆無である。それ故、茶道でいつ頃から、そしてどのような経緯で、どんな時に恋歌が問題になるのか、未だ明らかにされていないのが現状である。

そこで本論稿では、茶道書(以下、茶書とする)における恋歌への言及を通し、どのような人達が恋歌を忌避しているのかを解明する事、そして種々の茶会記や茶器の銘などに恋歌が用いられた場合を取り上げ、恋歌の効果について考察を行う。

ところで、熊倉功夫氏は『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、昭和五十五年二月）において茶道史研究を次の三つのタイプに分けている（三頁）。

① 茶人自身の自己学習の成果を著したもの

② 茶の世界の外から、茶道批判のために行われた茶道研究

③ 日本文化研究を志向する研究者が、その素材として茶道を取り上げた研究

本論稿はこの分類では③に属する。つまり、恋歌を通して茶道を見ればどうなるか、といった観点で茶道を論じたものである。

ここで、本論稿の構成を簡単に記しておこう。

まず、一では茶書における恋歌についての記述を紹介する。そしてそこから恋歌忌避についての歴史と実状を明らかにする。

二では、茶会記をもとに歌が使われた茶会について調べる。そしてその中から恋歌が茶会の掛物として使用されたケースを取り上げ、恋歌を用いた理由などについて考察を行う。

三では、ある和歌を本歌として名付けられた銘（いわゆる歌銘）を持つ茶道具に恋歌がどれくらい使用されているか、を調べる。そしてそれらが茶会に何らかの影響を与えているかどうか、を検討する。

そして最後に、茶道における恋歌の役割について総括を行おうと思う。

尚、引用文における、漢字については現在一般に使用されている漢字に直した。以上の他は、清濁なども改めず原書通りに引用を行った。また読み易さを考慮して適宜句読点を補った。そして引用文中に明らかな間違いがあった場合もそれを改めずに記すことにする。

一　茶書に見られる恋歌忌避

茶道において恋歌がどのように扱われてきたかについて、これまでの茶道研究の中ではほとんど問題視されてこなかった。ましてやその原因について述べたものは皆無に等しい。わずかに、古筆研究の立場からこの問題について触れているものがあるのでここに挙げておこう。増田孝氏は『日本近世書跡成立史の研究』（文献出版、平成八年十一月）の中で次のように述べている。

> 今日では、古筆を茶席に掛けるときに、いつ、どのようなものを掛けてもよい、ということにはなっていないらしい。そこには、大きな二つの制約が設けられている。
>
> 一、恋の歌は、いついかなる場合でも不可
>
> 二、季節に相応した歌を用いるのがよい
>
> この二つであるが、一についての茶書における初見は、山田宗偏の『茶道便蒙鈔』のようである。
>
> 「掛物に禁好あり。絵の類はかけず。墨跡或は道人の号。

……歌は道歌の外は悪し。恋歌は猶更不用」

といい、恋歌を全面禁止としている。本書の刊行は延宝八年（一六八〇）であり、十七世紀の末には、既に、このような考え方が生れていることがわかる。（四三九頁）

氏はこの後、

こうした制約が何故に提唱されたかは、詳らかではない。おそらくこの頃既に、古筆切が世に流布し、場合によっては、あれこれ選んで茶会に使ったり、いろいろ所持したりすることが可能となっていたのだろう。こうした状況の中で、権威主義的な茶の宗匠が、思いつくままに、このような禁忌を創作したものにちがいない。規則を多くすることが家元制度の存続維持に有効だったからなのである。（四三九～四四〇頁）

と、恋歌が掛物に用いられない原因を推察されている。つまり、権威主義的な宗匠が思いつくままに、そして家元制度の存続の為に恋歌を禁止したというのである。しかし、この説明には、二つの疑問が残る。一つは、本当にある宗匠が思いつくままに恋歌を禁止したのか。何か特別な目的があったのではないか、という疑問。

そしてもう一つは、家元制度の存続の為に行ったことなのか、という疑問である。その他の原因は考えられないのだろうか。いや考えなくてもよいだろうか。

そこで、増田氏が挙げた以外に恋歌に関する言説がないかを調べ、事の真偽を明らかにしようと思う。

増田氏も言っておられるように、茶道では掛物に恋歌を使用する事が問題になるので、掛物に関する言説を『茶道古典全集』（淡交新社、以下『古典全集』とする）、『茶道全集』（創元社、以下単に『全集』とした場合これを指す）、『新修　茶道全集』（春秋社、以下『新修』とする）などを中心に探ってみた。その中で恋歌にふれた箇所のあるものを、以下年代の早い順に列記する。

1　『江岑夏書』の記事

この書は、江岑宗左（元和五年～寛文十二年）の筆録である。江岑は、元伯宗旦の三男で、不審庵（表千家）の祖である。『江岑夏書』は、江岑が江戸に滞在していた寛文三年（一六六三）の記事が主な内容である。『角川茶道大事典』（林屋辰三郎他編、角川書店、平成二年五月、以下『茶道事典』という時はこれを指す）によると、この書は「江岑が父宗旦よりの聞書を中心に利休以来の茶のすべてを語ったもので、後継者随流斎（表千家五代）宗巴のために書き留めたが、利休流あるいは千家流茶道の貴重な資料の一つである」という（四六六頁、久田宗也氏執筆担当）。筆録者である江岑について少

し述べておくと、彼は一説に後水尾院の落胤であるという（磯野風船子「茶の湯同好会七周年記念茶会」『茶道雑誌』第四十一巻第二号、河原書店、昭和五十二年二月、八九頁）が、この真偽は明らかではない。

ところでこの書には恋歌について、次のような記述が見られる。

一　恋の歌ハかけ候事、休不被成候、定家にも三幅在之、
○わたのはらふりさき見れはかすかなる三笠の山に雪ハふりつゝ
○八重もくらしけれるやとのさび（ママ）しきに
○こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ
（『古典全集』第十巻、九三頁）

これは、寛文三年七月七日の記事である。[2] この短い記述に関しては少し説明が必要だろう。まず、恋の歌を掛ける際の注意点を述べていることはわかる。その後の「休不被成候」は、「利休居士は行われなかった」という意味と解釈できる。その後が問題であるが、これは次のように考えるのが適当と思われる。つまり、「定家の色紙にも三幅あるが、これらはわびの心にかなっているため掛けてもよい」と。ここに挙げられた三首は、いずれも『小倉百人一首』（以下『百人一首』とする）の歌である。この内、恋の歌は三首目の「こぬ人を……」だけである。何故この三首が特別扱いされるかという理由についてはもう少し説明がいるだろう。なぜならこの三首（恋歌一首含む）を使ってもよいという具体的な記述がないからである。宗旦、あるいは江岑は何故、これ等の色紙だけを使用してよいと判断したのだろうか。その理由は思うに三つある。

一つは、これらが歌掛物の起源として考えられていたこと。例えば、近衛家熙『槐記』（『古典全集』第五巻）の享保十三年三月二十二日の条には、利休が〈やへむぐら〉の歌が床に掛けられていたのに感じ入り、それが歌の掛物を掛ける始まりであったという話と、利休が秀吉を招いた際に〈あまのはら〉の掛物を用い、これを大燈国師の物にも劣らないといったことから、歌掛物を使用するようになったという二つの歌掛物起源譚が掲載されている（一七四～一七五頁）。これら二つの話に共通するのは、利休が歌掛物の起源に深く関与していることである。現在では、歌掛物を最初に用いたのは武野紹鷗であることになっている。新井白石『白石先生紳書』や、松浦静山『甲子夜話』では、紹鷗が招かれた茶会に〈やへむぐら〉の歌掛物を用いたのが最初だという。事の真相はわからないが、少なくともこれらの歌が歌掛物の起源譚と結びついていることは注目しておいてよいのではないだろうか。

二つ目は、これらの歌が茶道の精神にかなった掛物であるとされたことである。例えば、茶道を裏千家の又玄斎宗室に学んだ速水宗

達の『喫茶指掌編』（神原邦男『速水宗達著作選集』II、就実女子大学文学部史学科内　神原研究室、平成三年十月、原書は文政八年刊）には、「小倉色紙も、天の原と八重葎との二首ハ、数寄に善、其余ハ不好と云り。」（二二一頁）という記述があることから〈あまのはら〉の歌と、〈やへむぐら〉の歌が「数寄に善」とされたことが確認できる。さらに、元文三年（一七三八）成立の土門元亮世明甫編『茶湯秘抄』（『茶の湯文化学』第六号、茶の湯文化学会、平成十一年三月）には、次のような記述が見られる。

一、小倉山荘色紙数寄ニ可掛ハあまの原、只此一軸也、是天下一也、紹鷗云、日本ノ唐物トハ此事也

一、八重むぐら、数寄ニ可掛ハ此一軸也、是天下一と利休云、右二首ノ外ハ数寄ニ不出候、自然時刻ニヨリ掛モスルトハ古ハ云タゾ（一五八頁）

残りの定家の歌である〈こぬ人を〉に関して言えば、後に紹介する川上不白著『不白筆記』（宝暦七年頃成立）に同内容の記事が見られる。〈こぬ人を〉の歌が茶道の精神に反しないと考えるのは何も江岑や川上不白だけではなく、近代にはなるが後に紹介する高橋龍雄氏や、西堀一三氏もそのように解釈した人であった。高橋氏は『茶道』（大岡山書店、昭和四年八月）において、〈こぬ人を〉の歌色紙について次のように述べている。

この色紙は、「来ぬ人を待つほの浦の」であるから、茶を恋ふ意味に取れば、却って茶会に親しみを増すことになり、茶掛としても差障りなく、おまけに伝来もよく、表装も立派に出来てゐるので、まづ定家色紙中の白眉であらう。（三二一頁）

三つ目に考えられるのは、江岑宗左と紀州藩の関係である。江岑は寛永十九年（一六四二）に紀州徳川家に出仕することになり、その関係は彼の没するまで続く。万治三年（一六六〇）刊の『玩貨名物記』にも明らかなように、この色紙は紀州徳川家の所持品であった。彼の茶会記である「午ノ二月御茶湯之覚」（千宗左監修、千宗員編『江岑宗左茶書』主婦の友社、平成十一年十月）には、〈こぬ人を〉の色紙を掛けた記事が見える。例えば、承応三年（一六五四）五月十八日昼の茶会や、同年八月二日の茶会などである（寛永十九年五月八日晩、同年七月二十六日晩の茶会もこの色紙を掛けたと思われる）。これらの記事はいずれも江岑が紀州徳川家に出仕した後に藩主徳川頼宣の主催した茶会である。もし、江岑が〈こぬ人を〉の歌を恋歌であるから掛けてはいけないと言えば、紀州徳川家ではこの色紙を茶席に掛けられなくなる可能性がある。しかし、この色紙は紀州徳川家の家宝の一つであった。そこで江岑はそれを回避するために、

この歌は恋歌であるけれども茶席に掛けてもよい掛物として例外にいれたという可能性も考えてみるべきであろう。先述したように『江岑夏書』の該当記事は、寛文三年七月七日の記事であるから、彼が紀州徳川家に出仕してから約二十年後に書かれたものである。それまでには、紀州藩で行われた多くの茶会に〈こぬ人を〉の色紙掛物が登場したはずである。江岑はこれまでの茶会を正当化するためにも、あえて例外を書き留めておく必要があったと言えないだろうか。

当然のことながら、これら三つの中でどれが真実であるかはこの短い文章だけではわからない。しかし、ともかく以上のような考察から、増田氏も言うように寛文のころには既に恋歌が問題になっていること、そしてそこには例外（小倉色紙の〈こぬ人を〉の歌）も明記されていることが確認できるのである。

2 『茶道要録』、『茶道便蒙鈔』の記事

これらは、いずれも山田宗偏（寛永四年～宝永五年）によって書かれたものである。『茶道要録』は、本編二巻三冊と付録一冊からなり、元禄四年（一六九一）に刊行された書物である。ただし、本編のみは延宝三年（一六七五）に刊行されており、後で述べる『茶道便蒙鈔』板行に次いで、付冊の利休伝を追加して出版されたものである。『茶道事典』の中で筒井紘一氏はこの書について「千家茶道の根本資料として大きな反響を呼んだものと考えられる」（八九九頁）と述べている。

『茶道要録』には次のような記述がある。

一　掛物之事、尤墨蹟ヲ用ュ。名僧ノ要文要語ト云共茶主ノ帰依ニ因テ用捨アリ。（中略）又古名将ノ詩歌名僧ノ歌、色紙、短冊、公家門跡ノ詩歌殊ニ震筆（ママ）ヲ用ル事各了簡有ベシ。別シテ道歌ヲ好ム。恋ノ歌ハ必ズ不用。茶主ノ肝要トスル所ハ掛物ニ有リ。（山田宗偏全集頒布会編『山田宗偏全集』第二巻、昭和四十三年二月、一六～一七頁）

また、『茶道便蒙鈔』の方は、延宝八年（一六八〇）に完成していたものを、利休百年忌を迎えた元禄三年（一六九〇）に刊行したものである（この書の恋歌に関する記述は先に引用）。『茶道事典』によると、この書は、「千家作法の入門書」であり、「茶道人口の増大に伴う初心者の要望にこたえて出版されたもの」という（八九八頁、筒井紘一氏執筆担当）。また山田宗偏は、寛永四年（一六二七）から宝永五年（一七〇八）まで生きた人で、「茶は初め小堀遠州に学んでいたが、正保初年（一六四四）頃から千宗旦に師事した」と伝えられる（一三七六頁、谷端昭夫氏執筆担当）。この書には、先述した増田氏の指摘の通り「恋歌を用いてはならない」との記載がある。

『全集』巻の十二には、この書に杉木普斎が異見を朱で書き入れたいわゆる『普斎書入便蒙鈔』が記載されている。『古典全集』第十巻「杉木普斎伝書　解題」によると、普斎が朱入れを行ったのは、元禄六年（一六九三）のことであり、門弟の福井未純に与えたものであるという（一八九頁）。増田氏が引用した上述の箇所には、次のような朱書きがなされている。

此ケ条尤佳〇也。茶湯ハ面白キ事也。花ナクトモ懸物ナクトモ当日朝暮ノ風景ヲヨクシルヲ上手ト云ヘキ恋ノ和歌トテサノミ嫌フヘカラス（『全集』三七七頁）

杉木普斎は、恋の歌でもそれほどまでに嫌うものではないと言っている。杉木普斎（寛永五年～宝永三年）は、山田宗偏と共に宗旦四天王と呼ばれるものであるが、同じ宗旦門下でも意見を異にしていた。しかし、彼もさすがに恋歌は嫌うべきではないが、積極的に用いてもよいとは言っていない。いずれにしても恋歌が問題となっていることに変りはない。

ところで時代はかなり下がって、明治時代の話になるのであるが、この条項に批判を加えた人物がいる。花道去風流七世家元であった西川一草亭である。彼の「読書日記」（熊倉功夫ほか『西川一草亭風流一生涯』淡交社、平成五年三月所収）には次のような記述がある。

三日　夜

茶道要録（ケフ千家ノ茶事ニ行キタルヨリ俄ニ取出シテ読ム）

（中略）

〇　歌ハ道歌ヲ好ム、恋歌ハ必ズ不用ト云モ、小説ヲ勧善懲悪ノ具ナレバ勧善懲悪ノ意ナキ小説ハ無用ナリト云ト同シ筆法ナリ、茶ヲ悟道ノ一法トシテハ認メズ、美術ノ一種トシテ其存在ヲ認メ、是ガ発達ヲモ促サントスルナリ、故ニ掛物ノ取捨ノ如キモ、道歌ト恋歌トノ区別ニ非ズ茶趣味ノ有無ニアルナリ、趣味ニシテ存セシカ恋歌モ可ナリ、絵画モ可ナリ、筆者ノ禅坊主ナルト門徒坊主ナルトニ関セズ、画家ノ狩野派ナルト土佐派ナルトニ関セズ、場合ニ依テハ大雅モ可ナリ、謝蕪村モ可ナリ、応挙蘆雪ナルモ可ナリ、（一六二頁）

これは明治三十六年（一九〇三）七月三日の記事である。彼は父一葉が表千家の茶を学んでいたこともあり、父からもその教えを受けるとともに、父が所蔵していた『茶道要録』を千家の茶事に及んで読んだものと考えられる。しかし、この「読書日記」中の彼の主張はすこぶる明快である。恋歌を総て排除するのはおかしいのではないか。恋歌を掛けるか否かは「茶趣味」の有無に依るのであって、それは道歌も同じであろう。そして彼の言う「茶趣味」があるもの

ならば恋歌のみならず、宗教も美術の分野も人物さえも超越可能であると、彼はいうのである。当時二十五歳であった彼は表千家流茶書の一つである『茶道要録』の恋歌に関する条項に疑問を抱いた。それは彼が生涯抱き続けた考えであると思われる。

彼はその著作物からも知られるように「風流」という生活スタイルを一生涯追い求めた人物である。[3] 彼にとって茶道は「風流を実現するもの」でなければならなかった。このような考え方は、千家などが強調するような精神的悟道としての茶道でもなければ、当時高橋義雄（箒庵）や益田孝（鈍翁）などの数寄者達が行っていた趣味としての茶道でもない。彼はそのどちらからも自由でありえる唯一の人であったかもしれない。

彼の掛物に対する自由な考え方は、わずかに残された茶会記からも読み取ることができる。例えば、昭和七年（一九三二）四月二十四日日曜日に催した茶会に彼は漱石の書を掛けている（「去風洞日抄」『瓶史』昭和七年緑蔭号、去風洞、八〇頁）。その掛物に書かれた文字は「春草生新夢、山花満旧蘆」というものであった。ちなみに、招かれた客は九名。長谷川如是閑、野上豊一郎、茅野蕭々、後藤朝太郎、堀口捨己、板垣鷹穂、外狩素心庵、津田青楓、谷川徹三といったメンバーである。漱石の字を茶会に掛けるといった試みはいまだかつてなかった新しい茶会のあり方を提示している。さらに、彼は昭和十二年（一九三七）九月十八日に行われた流祖去風の百七十四回忌にも池大雅の一行物を掛けている（「去風忌」『瓶史』第八巻秋の号、昭和十二年十月、去風洞、七五頁）。その文句は「垂釣月初めて上る放歌風正に軽し」であった。

彼の掛物に対する自由な考え方は、はなはだ魅力的である。がしかし、残念なことにこれを継承する人達に彼は恵まれなかった。茶道界にほとんど影響を与えなかったにしても、彼がこのような試みを行ったことは特筆すべきことであり、茶室の掛物に対する一つの新しい形を提起しているといえよう。

3 『茶道望月集』の記事

この書は庸軒流の茶法書である。庸軒流とは藤村庸軒（慶長十八年～宝暦五年）を祖とする流派である。庸軒も山田宗徧、杉木普斎と共に宗旦四天王の一人とされる人物である。

『茶道望月集』は、風後庵又夢久保可季が師の鳩庵横井等甫から伝授された「庸軒流茶法」四十巻百八十段と、「七ヶ条極秘切紙」三巻より成り、茶事を中心に庸軒流茶法を詳述したものであるという（『茶道事典』八九八頁、山田哲也氏執筆担当）。また、この書の成立は享保八年（一七二三）とされる。編者である又夢は千宗旦、藤村庸軒に茶を学んだという。この書にも次のような記述が見られる。

一、小座敷にて掛物を用る禁好とは第一諸の祖師の墨跡詩文、

仏祖の法語は勿論好む、其次は絵讃又は歌の物、然れども恋歌は不好、其内に小倉色紙等の名物は各別なり。撰者筆者の徳に対してゆるすべし。(西堀一三「掛物古語拾遺」『掛物と日本生活』所収、河原書店、昭和十六年七月、四五頁)

ここには、歌の掛物は好ましいが恋の歌は好まないということが述べられているとともに、小倉色紙などの名物の類は恋歌であっても「撰者筆者の徳」によって許されるといった趣旨のことが書かれている。小倉色紙の特別視という意味では1で示した『江岑夏書』に一脈通じるものがある。

4 『南方録』の記事

『南方録』は茶書の中でも聖典とさえ言われる茶書である。この書については、偽書説も含め多くの議論がなされている。ここでその研究史を述べる余裕はないので、その一端を紹介しておくにとどめる。例えば西山松之助氏は、『家元の研究』(『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、平成二年八月第二刷)において次のように述べている。

すでに『南方録』の成立については、田中仙樵氏の南坊宗啓の筆録そのものであるとする説と、後世かなりの加筆があるとする桑田忠親説とがあり、一般にも、この書をすべて南坊の筆録とは考えない向きが多いようであるが、私もまたそのように考える者の一人である。(三四八頁)

西山氏が言うように南坊宗啓なる人物がすべてを筆録したと考えるのは、南坊宗啓の存在自体が確認できない事からしても難しい。やはりこの書の発見者であり、この書物を世に送り出した立花実山により何らかの改変、整理が行われたのではなかろうか。しかしいずれにせよこの書物は元禄三年(一六九〇)に刊行されてから、利休の茶の精神を伝えるものとして聖典視されてきた。熊倉功夫氏は『茶道事典』の中で、「『南方録』の主張は茶湯の本質を草庵小座敷の侘茶に求め、仏道修行と一致する修行性と禁欲的な粗相の美意識を茶の根本に置こうとした点にある」といっている(一〇五〇頁)。

ところで、『南方録』にはいくつかの写本があるが、その中に次のような書込みがあるものがある。

勅筆、道歌にあらすとも情ふかき歌物さび(濁ママ)たる体の歌なとハ名ある歌人の書たるを用ひ四畳半にハ猶更心得ちかひ有わひていにあらすともよしといへり恋歌ハいむへし(『全集』巻の九、九〜一〇頁)

仏祖の法語は勿論好む、其次は絵讃又は歌の物、然れども恋歌は不好、其内に小倉色紙等の名物は各別なり。撰者筆者の徳に対してゆるすべし。(西堀一三「掛物古語拾遺」『掛物と日本生活』所収、河原書店、昭和十六年七月、四五頁)

ここには、歌の掛物は好ましいが恋の歌は好まないということが述べられているとともに、小倉色紙などの名物の類は恋歌であっても「撰者筆者の徳」によって許されるといった趣旨のことが書かれている。小倉色紙の特別視という意味では1で示した『江岑夏書』に一脈通じるものがある。

4 『南方録』の記事

『南方録』は茶書の中でも聖典とさえ言われる茶書である。この書については、偽書説も含め多くの議論がなされている。ここでその研究史を述べる余裕はないので、その一端を紹介しておくにとどめる。例えば西山松之助氏は、『家元の研究』(『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、平成二年八月第二刷)において次のように述べている。

すでに『南方録』の成立については、田中仙樵氏の南坊宗啓の筆録そのものであるとする説と、後世かなりの加筆があるとする桑田忠親説とがあり、一般にも、この書をすべて南坊の筆録とは考えない向きが多いようであるが、私もまたそのように考える者の一人である。(三四八頁)

西山氏が言うように南坊宗啓なる人物がすべてを筆録したと考えるのは、南坊宗啓の存在自体が確認できない事からしても難しい。やはりこの書の発見者であり、この書物を世に送り出した立花実山により何らかの改変、整理が行われたのではなかろうか。しかしいずれにせよこの書物は元禄三年(一六九〇)に刊行されてから、利休の茶の精神を伝えるものとして聖典視されてきた。熊倉功夫氏は『茶道事典』の中で、「『南方録』の主張は茶湯の本質を草庵小座敷の侘茶に求め、仏道修行と一致する修行性と禁欲的な粗相の美意識を茶の根本に置こうとした点にある」といっている(一〇五〇頁)。

ところで、『南方録』にはいくつかの写本があるが、その中に次のような書込みがあるものがある。

勅筆、道歌にあらすとも情ふかき歌物さび(濁ママ)たる体の歌なとハ名ある歌人の書たるを用ひ四畳半にハ猶更心得ちかひ有わひていにあらすともよしといへり恋歌ハいむへし(『全集』巻の九、九〜一〇頁)

6 『不白筆記』の記事

これは江戸千家の流祖である川上不白（享保元年～文化四年）によって書かれたものである。この書の成立年代は確定できないが、『茶道事典』には、「早くとも不白が如心斎の没後上京し、その後江戸下向をした宝暦七年（一七五七）以降のことになろう」と書かれている。この書は、表千家七世如心斎の高弟として励んだ不白が、如心斎より学んだ茶道の奥義や自己の修行・体験に基づく茶道論を加味したもの」であるという（一一九六頁、島村芳宏氏執筆担当）。この書は、江戸千家茶の湯研究室編『不白筆記』（非売品、昭和五十四年十二月）に翻刻されている。そこには次のような記述が見られる。

一　歌ハ恋歌ヲ重ニ嫌ふ也

一　利休ノ御申候成候ハ百人一首ノ内ニテ八重むくらとあまのはらと来ぬ人ヲトノ三首かよしとて常ニ御申被成候　尤来ヌ人ヲとの歌ハ恋歌なれトモ是ハ又一向恋の情深くうえもなき心故利休モ面白キトテ百人集の内ニテモ此三首ヲ取分御用被成候（五七頁）

ここで注意しなければならないのは、この記述が1で示した『江岑夏書』とほぼ同内容であることである。表千家の教えとして恋歌は好まないが、小倉色紙の〈こぬ人を〉の歌は認めるといった事が伝承されているのがわかる。

7 『（利休流）喫茶敲門瓦子』の記事

この書は、玄々斎千宗室述、藤井維石編著なる書であり、天保十四年（一八四三）に成立した裏千家茶道の入門書である。玄々斎宗室は、裏千家十一代家元である。彼の生涯を簡単に見ておくと、まず文化七年（一八一〇）に三河国奥殿の領主松平縫殿頭乗友の子として出生。幼名を栄五郎といい、田代太又を当主とする田代家の養子になる。その後、文政二年（一八一九）十歳の時に裏千家十代認得斎に望まれて裏千家の養子となった人である。『喫茶敲門瓦子』が成立したのは彼が三十四歳の頃になる。この書は納屋嘉治『玄々斎精中宗室居士』（淡交社、昭和五十一年九月）に抄録されているが[4]、そこには次のような一節がある。

床一　掛物、墨蹟絵讃もの、画斗の物は不好、歌の物、道歌を好む、恋歌ハ不好（一九六頁）

これまで紹介した記述は十七世紀から十八世紀のものであったが、これは十九世紀江戸時代末期の記述である。このころにもやはり、恋歌を好まないという記述が見られる点で貴重な史料と言える。

8 『表千家茶湯流伝書』の記事

これは、西堀一三『掛物と日本生活』（河原書店、昭和十六年七月）所収の「掛物古語拾遺」において紹介されているものである。しかし、ここには解題など一切の説明がなく、したがってこの書がどのようなものであり、現存するのかどうかも全く不明である。しかしその文体や、ここで紹介されている茶書がいずれも江戸期のものである事を考え合わせると、この書もおそらく江戸期に成立した茶書と考えられる。

この書はその書名に「表千家」と名がついていることから表千家の教則本であるということは容易にわかる。ここには、次のような記述がある。

一、和歌は恋歌を重に婦ふ也。

一、利休御申しなされしは、百人一首の内にて八重葎と天原と来ぬ人をとの三首がよしとて常に御申しなされ候。（四四頁）

最初の条項で「婦ふ」とあるのは「嫌ふ」の誤りであると思われる。つまり、掛物に歌を用いる場合、恋歌は専ら嫌われるのである。そして百人一首の内では、「八重葎しげれる宿の……」と「天の原ふりさけみれば……」の歌と「来ぬ人をまつほの浦の……」の歌はいいという。これは、これまでに紹介した『江岑夏書』や『不白筆記』と同内容のものである。

ここまでは、江戸時代に成立したと思われる茶書の中から、掛物に恋歌を使うことを禁じた記述について見てきた。その結果、三つのことがわかった。

一つは、掛物に恋歌を使うことについての記述がある茶書は、いずれも千家流あるいはその影響を色濃く受けている流派の茶書であること。このような記述は例えば遠州流や石州流などの大名系の茶書には決して見られないものである。そして、恋歌を掛物に掛けてはいけないといった教えは寛永頃にはすでに成立していたと見てよい。それが利休百回忌を受けて次々に刊行された「利休の茶を伝える」といった趣旨のもとに作られた茶書に受け継がれていったと考えてよいと思う。

二つ目は、恋歌を禁止あるいは好まないといった記述は千宗旦の弟子たちの時代に彼等によって記述されたこと。つまり、千宗旦が恋歌を茶室に掛けるということに関してあまり好ましくないという考え方を持っていたのではないか。彼の教えを正確に伝える茶書がないので推測の域を出ないが、宗旦が大きな影響を及ぼしたのはほぼ間違いないといえよう。[3]

三つ目は、小倉色紙に対する考え方についてであるが、表千家の

茶書を除いては、定家の〈こぬ人を〉の歌についての言及はない。反対に表千家の系統を引く茶書には、恋歌はいけないが、小倉色紙の〈こぬ人を〉の歌だけは、利休がよいとした、という伝承が連綿と引き継がれている。具体的に言えば、『江岑夏書』『不白筆記』『表千家茶湯流伝書』がそれにあたる。このような例外は他の茶書には見られず、したがって表千家の茶書の特徴の一つということが言えるのである。

周知のように茶道界は、明治維新以降大きな変革をとげる。西洋文明を取り入れるのに必死であったから、日本の伝統的なものはことごとく顧みられない時代になってしまった。特に能や茶は深刻な打撃を受けた。主に都市の町人階級を門弟としていた千家流の茶家が、また武士階級を主な門弟としていた大名茶を受継ぐ茶家もことごとく糟糠を舐めることになったのである。明治初頭の茶道に関して石黒忠悳が「況翁茶話」(『伝記叢書一六一　石黒忠悳懐旧九十年』大空社、平成六年十一月所収)の中で「明治十年頃は茶会などは殆ど全廃と言ってよい位で、茶道具なども値段がなくなりました。」(付録四頁)と振り返っているが、このように明治初頭には茶道界は全くもって奮わなかったのである。それ故明治以降の茶書には、また異なった様相があるように予想される。明治以降恋歌に対する考え方は果たしてかわったのであろうか。それとも現在も江戸時代のごとく恋歌に関する禁止事項などが存在し続けているのであろうか。それらについて、以後明治以降に刊行された茶書について見ていきたいと思う。

9 『茶の湯と生花』の記事

これは、編集者あるいは小説家として有名な大橋又太郎(乙羽)が編集したもので明治二十八年(一八九五)六月に博文館から出版されたものである。これは、当時博文館から出ていた『日用百科全書』の第二編として出版された。坪内善四郎『博文館五十年史』(博文館、昭和十二年六月)によると、この全書は明治二十八年から「全五十冊、毎月二冊づゝ発行し」、「定価一冊金二十銭」であったという。その中でも『茶の湯と生花』はよく読まれたと思われ、明治三十三年六月には第十四刷が出ている。この書物の「床の事」という項には次のような記述がある。

一　掛物に禁好あり。絵の類はかけず。墨蹟或は道人の歌、或は祖師筆の画賛を用ゆ。歌は道歌の外は悪し。恋歌は猶更不用。(二七頁)

彼の事跡については、「大橋乙羽」(昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第五巻、昭和三十二年二月)や坪内祐三「編集者大橋乙羽」(鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』思文閣出版、

平成十三年七月）などに詳しいが、彼が茶道をしていたという記述は見当たらない。むしろ彼は編集者として何らかの書物に基づいてこの書物を書いたのではないだろうか。では、彼はどのような書物からこの記述を拾ってきたのだろうか。それは、上述した『茶道便蒙鈔』である。『茶の湯と生花』の「床の事」は『茶道便蒙鈔』のそれと全く一致する。小川菊松『復刻版　出版興亡五十年』（誠文堂新光社、平成四年十一月）によると「成程昔は（彼が指す昔とは明治のどの時期を指すかは定かではない―筆者注）、論集とか文集とか、または文範だの詩歌俳句集だのと称して、他人の著作を少量ずつ無断で寄せ集めて、編集発行しても誰も咎めなかつた」という（一三頁）。彼も『茶道便蒙鈔』からこの項を引用し、そのまま用いたのである。とはいうものの、この書は『茶道便蒙鈔』にはない特徴を一つ備えている。それは挿絵が使用されていることである。彼が挿絵や写真を多く用いた（当時は画期的なことであった）ことは坪内祐三氏の上記論稿でも屢々述べられているところである。要するに彼は茶道の事はほとんどといっていいほど知らず、文章は『茶道便蒙鈔』をそのまま用いたが、そこに丁寧な挿絵を入れることで新味を出しているのである。

上述したように『茶道便蒙鈔』は山田宗徧の著作物である。すなわち千家流の茶道書である。この書物が主に家庭で読まれたことを思うと「掛物に恋歌を用いてはならない」といった事項を、一般家庭に常識として普及させた可能性は十分にある。

10 『鉄中茶話』の記事

佐々木三味編著『鉄中茶話』（茶道月報社、大正十五年十月初版）は、裏千家十三世家元円能斎宗室の口述を筆記したものである。この書は、元来「鉄中夜話」として大正十一年六月号から同十三年十月号まで『茶道月報』誌上に連載されたものを一冊にまとめたものである。そこには、次のような記述がある。

一　恋歌の類は茶には用ひぬがよろしい（四頁）

この書物について末宗廣氏は「茶人のバイブルとして座右に一書を必ず備へ置くべきであると断言してよい」と評している[6]。この書物は昭和十四年一月に第七版を発行しているのでその当時茶の教則本としてわりとよく読まれたものと思われる。

11 『茶道』の記事

高橋龍雄（梅園）の『茶道』（大岡山書店、昭和四年八月）に恋歌についての言及がある。次のような記述である。

人間味を忘れようとする茶席には、人物や華やかな花鳥などの

画幅はよろしくない。俳句では芭蕉ならいゝが、それ以下のものは、まだ寂びの境涯に入らぬ。和歌も恋歌などは、いかに古筆でもおもしろくない。茶事は脱俗超世の心持を味ふのだから、四季風流の和歌ならよろしいが、恋愛人情に渉るのを嫌ふ。漢詩の悲憤慷慨などの句は、茶掛物にならない。(一五八頁)

彼は、この他にも同書の中で、定家の色紙(小倉色紙)の事に触れている。例えば、「和歌俳句のどんなのが茶掛物になるか」(二八〇〜二八六頁)という一節では、

禅僧の墨蹟の次に、和歌と俳句が茶掛物として使はれるが、唯単に和歌俳句といつても、それが悉く御茶に適するわけにはいかぬ。やかましい定家の小倉色紙でも、恋歌などはあまり感服しない。(二八〇頁)

そして、彼はその理由を、「恋の歌になると、茶掛としての価値が薄らぐ。それは世事人情を思はせるからだ。」(同書三二〇頁)としている。

原田伴彦編『茶道人物辞典』によると、彼は「慶応大学の教授として国語・国文学を教えるかたわら、茶道の研究に打ちこみ、『大正名器鑑』作製事業の推進役を果たした」という。彼が何流の茶道を習得していたのか、あるいは何流をもって茶道一般としているのかは今のところわからない。しかし、彼が島根県の出身であり、その著書に『松平不昧伝』『茶禅不昧公』などがあることから推察すると不昧流(雲州流)かもしれない。

実際、彼は「名物陶器の史的研究」(『國學院雑誌』第三十巻第八号、大正十三年八月、一〜二九頁)において、不昧流の作法を教わったと書いている。しかし、それは深いものではなく、彼が本格的に茶道と取り組むのは、後年になって東京にきてからである。それは次のような文章から明らかである。

私は出雲に生れ、松平不昧公の茶道に就て僅にその平手前と懐石の稽古をしたのが、明治二十四五年私の二十一二歳の頃雲州平田町に居つた時のことであります。(中略)明治三十一年國學院卒業の後或は駄著の濫作に追はれ、私の茶趣味は殆ど破壊されて了つた。大正二年の頃から三年間、松平直亮伯からの御話で不昧公百年忌の為、公の伝記の編纂をすることになつて、茶趣味は再び勃然として湧き出しました。(一頁)

彼が不昧流の茶道に接し、手前を教わったのはまだ若い頃でそんなに真剣に深くまで不昧流の茶道にのめりこんだわけではない。むしろ彼の本当の茶道というものは、東京で培われたものであった。

現在も事情は同じであるが、当時の東京で不昧流を習うことは非常に困難であったと思われる。なぜなら、「武家茶道の系譜」（『歴史読本』臨時増刊号第二十三巻第十二号、昭和五十三年九月）の不昧流について「ただ、大名茶であるので一般にはこの不昧流（雲州流）は行われていない。」（小村元太郎氏執筆担当、二七二頁）といった記載や、井口海仙、久田宗也、中村昌生編『日本の茶家』（河原書店、昭和五十八年十二月）における「当流（不昧流―筆者注）は職業茶に対して素人茶といえよう。それだけに、この流をうけついだ人達も、求めて弟子をつくるのでもなく、したがって、皆伝までの執心者も少なく、伝授者の数も限られて、流儀は一向に広がってゆかない。或はそれが当流の特徴の一つでもあり、当然の結果かもしれない。」（手銭白三郎氏執筆担当、四九六頁）といった記述が見られるからである。不昧流は全国的に見てもあまり盛んではなく、したがって高橋氏の茶道観が不昧流によっているとは思えない。むしろ、東京で学んだ茶道（おそらく千家流の流れを汲むものではないか）に大きく影響を受けたと考えられる。

いずれにせよ、彼も茶掛に恋歌は好ましくないという立場をとっていることは動かしがたい事実である。

この書物が出版されたのは昭和四年（一九二九）八月のことである。この書について熊倉功夫氏は『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、昭和五十五年二月）において、「茶道史的研究が、本書によって本格的に研究として始ま」ったと本書に高い評価を与えている（二三頁）。

ところで、最初に紹介した谷崎潤一郎の「恋愛及び色情」という随筆は、初め『婦人公論』昭和六年四月から六月号にかけて「恋愛と色情」として連載されたものであった。この随筆はその後『倚松庵随筆』（創元社、昭和七年四月）に収められることになるのだが、谷崎は直接この書を読んだか、この書を読んだ人から「恋は茶道の精神に反する」といった知識を得たのではなかろうか。それともこのころには少しでも茶道に興味のある人なら当然の如く知っていた常識であったのであろうか。今後の検討を俟ちたい。

12 『掛物と日本生活』の記事

この書物は、西堀一三によって書かれ昭和十六年七月に河原書店より発売されたものである。『淡交別冊愛蔵版　近代の数寄者―続茶人伝』（淡交社、平成九年八月）によると、彼は「数寄者ではなく、茶道・花道における学匠であ」り、「茶や花を一度も稽古した様子など皆無。茶を点てることは苦手、鋏などは使いこなせない不器用の人」（一〇二～一〇三頁、岡田幸三氏執筆担当）であったという。彼はこの書の中で、日本における掛物の変遷やその精神性に触れ、日本文化において掛物がいかに重要かを説こうとしている。彼はこの書の第七章「掛物と日本的自覚」という文章の中で小倉色紙が茶会

で用いられるようになった経緯について説明した後、次のように述べている。

> 然し、この様な和歌の色紙が用ひられるに至つたことについて述べておかねばならなりませぬ事は、恋歌の類は当時掛物として用ひなかつた事であります。これは「侘」の格とは離れるものであつたからでありまして、和歌として如何によく出来ているものでありましても、この種のものは掛物とならないと考へたのであります。(二〇九頁)

さらに氏は、利休が小倉色紙の中でも「天の原」と「八重葎」そして「こぬ人を」の三首をよしとした理由に就いて次のように解釈している。

> この様な恋の歌の類と考へられるものであり乍ら「来ぬ人の」の歌を利休がよしとして居ますのは、そこに特別の理由があつたのでありまして、この歌の様に、よし恋の歌であつても「待ち侘びたる」様の歌は又格別なものであると考へたのであります。(二一〇頁)

彼は学究一筋の人だっただけに流派にこだわらず、ひたすら先人の残した茶書により彼の茶道観を作り上げていったと思われる。その中でも上記引用部分は、明らかに先に挙げた『江岑夏書』の記事を基にしている。

13 『茶道入門―作法と心得』の記事

この書は井口海仙氏の著書であり、昭和四十四年三月に初版が現代教養文庫の中の一冊として社会思想社より刊行されたものである。この書はかなり版を重ねたもので私の所有しているものは第十一版(昭和五十二年五月)である。戦後の茶道入門書としてかなり広く読まれたものと思われる。

この書の中にも恋歌についての言説がある。彼は、「掛物」に関する説明の中で次のように述べている。

> よく懐紙や歌切れ等の掛物も使用するが、恋歌の類は用いないようにするのがよいとされている。(八二頁)

氏は恋歌の掛物は絶対に悪いとは言っていないが、用いないのが一般的な常識であるという意味のことをここで述べている。ちなみに彼は、裏千家十三代家元円能斎宗室の三男であり(兄は十四代家元淡々斎)、茶道ジャーナリスト、茶道研究家として千家流の茶道の発展に多いに功績があった人である。彼が恋歌について「用いな

いようにするのがよい」としているのも千家流茶道の伝統的な教えに則ったものであるといえよう。

14 『茶の湯　掛物の四季』の記事

これは、昭和五十四年十月に光芸出版より刊行されたものであり、著者は粟田添星氏である。そこには次のような記述が見られる。

古筆ものでは、四季風流の和歌なら最高であるが、恋歌となるといかに古筆でも一考を要する。当今では古筆ものといっても次第に数量に限りがあるため、恋歌も、ほんのりと匂う程度のものならば使用する様になった。（三一頁）

粟田氏は明治三十八年石川県の生まれの茶道史家である。巻末の著者略歴によると、彼は「武者小路千家の茶道を修得」したという。この書物もやはり千家流の茶道を学んだ茶人の書であった。

ただし、この書物が重要なのは武者小路千家の掛物に対する教えの一端が知られることである。武者小路千家についての茶書や茶会記は江戸期以来非常に少なく、その考え方や独自性を知ることは現在のところ困難である。その意味において、この記述は重要な意味を持ちうると言える。

15 『お茶の作法入門』の記事

ごく最近のものを紹介しよう。この書は茶の湯文化普及研究会によって平成十四年九月に西東社より刊行されたものである。ここにも掛物に恋歌を禁止する以下のような言説が見られる。

掛物は最も大事な道具とされてきました。客が頭を下げて拝見するわけですからそれなりの内容が要求されるわけです。

掛物の内容で、その日の茶会のテーマが示されます。（中略）

単に美的な鑑賞を目的とするだけではなく、言葉の精神性を理解し、筆者の人格を尊ぶことを目的としていますので、いかに達者といっても書家の字をかけることはありません。

また、いかに歴史的偉人であっても、下世話な内容、飲食をする席にふさわしくない内容、色恋の内容のものは避けます。（七一頁）

この本は基本的に女性を対象とした茶道入門書で、点前などを見ると千家流の点前を基本として解説している。出版社に茶の湯文化普及研究会という会がどのような性格のものかを尋ねたところ、この会は、この本を作るためだけに作られた会であり、現在特別な活動などはしていないという。また、この本を作るにあたっては、裏千家の茶道を基本として解説したという。

以上見てきたように、現在においても一部の茶道入門書には、はっきりと恋の歌は茶の掛物としてふさわしくないといった趣旨の言説が見られる。つまり、江戸初期に形成されたであろう恋歌忌避の考え方がいまだに続いているといってよいだろう。むしろ現在では茶道の常識と化しているといってもよい状態である。

ただし、先程から述べているように、この恋歌忌避の考え方は千家流の茶書にのみ見られるものであり、大名系の茶書には全く見られないものである。[7] 現にある遠州流の宗匠に、恋歌を掛物にしないかという問いをしたところ、遠州流では特に禁止していないし、そのような内容のものも掛けると言う。したがって千家流と大名系の茶道では恋歌に対する考え方が異なるのではあるまいか。そしてそれは、宗旦の次の時代、つまり三千家成立時期に確立され固定化したのではないか、と考えられるのである。

ちなみに、本論稿でいう千家流の茶は三千家（表千家、裏千家、武者小路千家）とそこから派生した諸流派（江戸千家流、宗偏流など）の茶道のことをいい、大名茶とは大名・将軍らによって行われた茶道（遠州流、石州流など）のことをさす。

次章では、恋歌の掛物を用いた茶会について考察し、それらの特徴や使用した意味などを考察する。

二　恋歌を茶掛に用いた茶会

前章で現代に至るまで恋歌を忌避する考え方が千家流の茶を中心に存在していることが明らかになった。それでは、恋歌を用いた茶会は存在しないのであろうか。茶会は亭主の茶道観の実践の場といってもよい。恋歌を特別視しているならばその茶会にはきっと何らかの特別な理由があるはずである。特に千家流の茶道において用いられることがあるならば、その意味は誠に深いことになる。しかし、前章でも述べたように、既に寛文年間には恋歌を掛けないといった考え方が明文化されている（『江岑夏書』など）ことから、その前後には恋歌に関する是非が千家流、大名茶の系統を問わず問題になっていた可能性がある。ましてや三千家成立以後は千家も大名家の茶の師範として雇われる事例も多いので、当然恋歌が問題になったことは想像に難くない。いいかえると、もし茶会に恋歌が用いられているならば何らかの特別な事情が考えられるのである。

そこで、茶会において恋歌を掛物として用いた事例があるか否かを調べるため、茶会記に歌が使用された事例を挙げたのが表1である。ここでは、歌が掛けられたことがはっきりとしている場合のみを取り上げた。また、絵の掛物に付された賛に和歌が用いられている場合も取り上げてある。[8]

恋歌を用いた茶会について述べる前に、歌が付された掛物（以下

歌掛物とする）を使用した茶会の特徴についていくつか述べておきたい。

まず、表1を見てわかるのは、初期の頃の茶会において歌掛物が掛けられるのは、そのほとんどが小倉色紙であることである。特に寛永頃までは、茶会が行われた季節などに全く関係なく使用していることが特徴的である。つまり、茶会において季節感を出すことよりも、いかに名物を出すかということに重点が置かれているのである。

具体的な例をいくつか挙げると、例えば『宗達自会記』や『宗及自会記』では、恵慶法師の「八重葎しげれるやどのさびしきに人こそみえね秋はきにけり」の歌が頻繁に掛けられているが、これは本来歌の意味からすると明らかに秋の歌である。季節を考慮に入れるなら、この掛物は本来初秋（六月下旬か七月初旬）に掛けられるべき掛物である。しかし、例えば弘治三年三月二十九日、天正六年五月二十四日など、全く季節に関係なくこの色紙和歌を掛けている。

これらの事実から、永禄・元亀・天正ごろの茶会では、名物であるということが最も重要な掛物の価値観であり、季節感などは全く考慮されていなかった事がわかる。つまり、歌の内容はどうでもよいのである。

しかし、寛永ごろになると、歌掛物にも季節感や、その会の趣旨などに応じて歌掛物が選ばれていることがわかる。例えば『小堀遠州茶会記』では、小倉色紙は用いられておらず、定家筆の歌が多く掛けられるようになり、その内容も季節を詠んだ歌には、その季節にふさわしい時期を選んで掛けているのがわかる。

具体例を挙げて説明しよう。紫式部の歌「降ればかくうさのみまさる世をしらで荒れたる庭に積る初雪」は『新古今和歌集』冬部に収載されている歌である。定家筆のこの歌の掛物を遠州は、寛永二年九月十三日、同五年九月二十六日、同年九月二十八日、同十四年十二月二日にのみ使用している。この内十二月に掛けられた茶会以外は晩秋から初冬にあたり、この歌の意味にふさわしい時期に掛けている。十二月になぜこの掛物を掛けたかは今のところ不明である。

寛永年間は歌の意味を吟味して掛けるという意識が生れる過渡期であると思われる。というのも『久重茶会記』には、寛永年間の茶会の様子も収められているが、相変わらず名物意識が強く、季節も考慮されていない。例を挙げると、寛永七年一月十二日晩に行われた茶会には、清原深養父の歌「夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづくに月やどるらん」の歌が掛けられた。これは、藤原良経筆のもので小倉色紙ではない。しかし、良経は有名な歌人でもあり、この歌も百人一首の中の歌であるから名物視されたことは想像に難くない。この歌の意味からもこの歌が夏の歌であることは誰の眼にも明らかである。しかしこれをこの茶会の主催者であった千貫屋良以は掛けているのである。つまり、小堀遠州らによって季節感が考

慮された掛物を用いる茶会が開催される一方で、まだ名物を最も尊重するような茶会が行われていたことがわかる。

ただし、『久重茶会記』の寛永十七年四月十七日の記事は注意しておくべきかもしれない。それは、京都の吉田で行われた茶会の後の記事である。掛物の講釈がこの時行われたが、次の一首が恋歌かどうかで議論がなされた。その歌は「鳥」という題で詠まれたもので、「やとになくやこゑのとりハしらしかしおきてかひなきあか月のつゆ」というもの。これは『拾遺愚草』に収載の藤原定家の歌である。またこの歌は、正治二年（一二〇〇）八月二十五日に行われた百首詠において、「鳥」五首として詠まれた歌の内の一首である。これを「ユウコ」というものが恋歌と判断したのに対し、細川幽斎が恋歌ではなく述懐の歌であるとした。何気ない記事であるがこの記事は二つの点で重要である。一つは掛物の意味が問われていること。恋歌ではなく述懐の歌であるとしていること。つまりこの時点では、しっかりと歌の意味がとられ、それに恋歌であるかどうかが問題になっている可能性がある。上述したように寛永七年には新春に夏の歌が掛けられていたので、大体この頃に京都では歌を解して掛けるようになったのかもしれない。『久重茶会記』中の歌は、ほとんど不明なのでこの点については他の史料も検討して今後の課題としたい。(9)

しかし、江戸を含めた地方では歌を解して季節に応じた掛物を掛けるといったことは行われていなかったらしい。それは『伊達綱村茶会記』によってわかる。この茶会記は仙台と江戸での茶会を記したものであるが、ここには名物意識が強くあらわれている。また、夜会が多いのもこの茶会記の大きな特徴である。

享保年間の茶会を記した『槐記』や嘉永から安政を中心とした茶会を記した『井伊直弼茶会記』では季節感を無視せず、歌にふさわしい季節を選んで掛物を選んでいる。実際『槐記』には、次のような一節がある（享保十二年正月九日の条）。

> 墨蹟ナドハ、文ガラ或ハ月日ナドノアラバ、時節相応ニスベシ、書画ハ、夏ハ冬ノ画ヲ掛ケ、冬ハ夏ノ画ヲ掛ルコトナリト仰ラル（『古典全集』第五巻、一〇六頁）

もうこの頃以前に、掛物において季節感を考慮していることは明らかである。そしてそれは寛永以降に徐々に地方にも広がっていったと思われる。

掛物についての特徴をもう一つ指摘しておきたい。まずは、井伊直弼が『茶湯一会集』（『新修』第九巻）において述べる掛物に関する記事を見ていただきたい。

> 一、懸物は、体の道具にして最も重んずる事なれば、時に協ふ

を第一とし、高位高官の筆は論ずるに不及。得道大徳の墨蹟を尊み、俗人の筆は、たとへ侘びたりとも、決して用ひず。懸物は大切に心得、必ず粗略の取捌有るべからず。（四三〇頁）

掛物は最も重んじるべき茶の道具であり、時節にかなうようなものを第一とする旨を井伊直弼はここで述べている。ただし、それとともに名物であろうがなかろうが、それを書いた人が重要な要素である、とも言っている。これは今まで見てきたように、初期の頃から幕末まで変らない茶道における一つの考え方である。初期の頃には定家の小倉色紙が圧倒的な人気を博すが、これも定家撰あるいは定家筆ということがかなり重要な要素となっている。また、時代が下ると小倉色紙はもはや『玩貨名物記』に明らかなように[10]大名か豪商の持つところとなってなかなか茶会には出されなくなるが、小倉色紙に代わって掛けられる歌掛物は定家筆か、高貴な人物の歌、あるいはその筆になるものばかりとなる。

このような人物重視の思想はもともと墨蹟において禅宗の高僧のものしか用いないという思想の継続発展である。つまり、道を極めた人、悟りを開いた人などのものが尊ばれるのが特徴的である。要するに名歌はいらないのである。名歌でなくともその歌を書いた人物が誰であるかということが最も重要になっている。

この染筆者第一主義とでもいうべき考え方は、和歌の世界からすれば違和感のある考え方である。つまり、少なくとも中世までは和歌というのは名歌を必要としていたのである。それは、『今昔物語集』などの説話に見られる一連の「歌徳説話[11]」や、それをもとに作られた能の演目などに顕著に見られるもので、歌がよければいかに賤しい身分のものでも何らかの得をするのである。このような歌徳説話的な物語が出来、伝承されてきた背景には、人物よりも歌の意味が重要である事が何よりも重要であるという考えがあった。

しかし、茶道ではこのような意識は見られない。染筆者第一の考え方は、恐らく禅宗にその源を発すると思われる。禅宗においては、書は染筆者の人徳をあらわすものであると考えられ非常に大切にされた。茶道でも禅の掛物をよく使用しているから、この考え方を受継いだものと思われる。

茶道における染筆者重視の考え方を最も端的にあらわしている例としては、『古田織部正殿聞書』（市野千鶴子校訂『古田織部茶書』一、思文閣出版、昭和五十一年五月）の次のような箇所がある。

一　定家之筆、昔ハ不用。五、六十年以前ヨリ用掛ル也。道迄達ル歌人成故也。

一　家隆・為家・為相・為政何も古不用候得共是も道迄達ル歌人成とて近代用掛ル也。

一　西行之手跡用出へく候也。

一　宗祇之手跡出ス也。連歌師にて用掛候は、宗祇斗也。万ニ達ル名人成故也。

（中略）

一　近代之歌人之手跡何も不用不可出也。

一　道僧之書たる歌尤出ル也。是道之心を籠て読物成故也。

（一五九～一六〇頁）

ここでは、一貫して道に達した人なら掛けてもよいということが述べられている。それに加え、古人を尊重する意識も見られる。しかし、この古人に関する条は、幕末にはあまり守られなくなる。井伊直弼などは自詠の歌を含め、当代の人物の歌や歌を書いたものを掛物として使用しているのは、『井伊直弼茶会記』に明らかである。ただし、先に引用した『茶湯一会集』に見られるように、俗人の筆によるものは使用していない。

さて、本来の目的である恋歌が掛物として使用されている茶会について以下述べようと思う。

1　小倉色紙を用いた初期の茶会について

恋歌を使用した茶会は少ないが、いくつかの例が茶会記に見られる。例えば、『宗及他会記』の元亀三年十二月五日には、小倉色紙の定家の歌「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ」が掛けられているし、『久政茶会記』の天正十四年十月二十日には、曾根好忠の「ゆらのとをわたる舟人かぢをたえ行方もしらぬ恋の道かな」が掛けられている。同じく『久政茶会記』天正十六年十月十六日には、大中臣能宣の「みかきもり衛士のたく火のよるはもえてひるはきえつつものをこそ思へ」が掛けられている。これら初期の掛物は先にも述べたように名物として見ていた可能性が高いので恋歌としての意識がどれほど行きわたっていたかどうか、甚だ疑わしい。むしろ歌の意味など考えていなかったと判断する方が適当かもしれない。また、『久重茶会記』においても寛永十四年三月七日に源俊頼の歌で小倉色紙である「うかりけるひとをはつせのやまおろしはげしかれとは祈らぬものを」が掛けられているが、これも上述したような理由から恋歌の掛物として使用したというよりも、むしろ名物として見ていた可能性が強い。したがってこれらの事例は恋歌を意識的に用いた茶会の対象から外し、これ以上の考察はしない。

2　小堀遠州の茶会

はっきりと恋歌を意識して催した茶会は、おそらく小堀遠州（以下遠州とする）の茶会であったのではなかろうか。それは、寛永二年（一六二五）九月二十一日から二十三日まで行われた四回の茶会

と、同十八年一月二十二日に行われた茶会においてである。ここには、「定家あはぬよの歌」、「定家　あはぬ夜ノ歌」などと床の記載がある。小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』（主婦の友社、平成八年九月）の注（三二頁）によると、これは、「『遠州蔵帳』に『あはぬよの文』とあるので、歌入消息かと思われる」と書いてある。勅撰集や定家の歌集（『拾遺愚草』など）には「あはぬよの」ではじまる歌はないので、現存しないか、あるいは他の人の歌を定家が書いたものであるのかもしれない。いずれにせよ「あはぬよの」といえば、ほとんどが恋の歌に使われるフレーズであるので、この掛物は恋の歌であったと見なしてよいのではなかろうか。念のため勅撰集を用いてそれを確認しておく。

勅撰集の中に「あはぬよの」で始まる歌は三首ある。『古今和歌集』恋三に「あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを（六二一）」、『新後撰和歌集』恋四に「あはぬ夜のつもるつらさはしきたへのまくらのちりぞまづしらせける（一一〇四）」、『新拾遺和歌集』恋一に「あはぬよのつらさかさなるさ筵にかたしく物は涙なりけり（一〇〇三）」である（カッコ内は『新編国歌大観』の番号）。また、「あはぬよの」が三句目にくるものが一首あるが、それは『新拾遺和歌集』恋三の「さ筵のちりははらはじ逢はぬ夜のつもれる数も思ひしれとて（一一七六）」である。いずれも恋の歌である。

念のためこれ以外にも「あはぬよ」が歌中に詠み込まれている歌を勅撰集で探してみると三首ある。『拾遺和歌集』恋三に「衣だになかに有りしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな（七九八）」、『金葉和歌集（三奏本）』恋下に「あはぬ夜はまどろむことのあらばこそ夢にもみきと人にかたらめ（四七六）」、『新勅撰和歌集』恋三に「あかでのみふればなりけりあはぬ夜もあふ夜も人をあはれとぞ思ふ（八二二）」である。いずれも恋の歌であり、遠州の茶会で用いられた歌も恋歌である可能性が非常に強いと思われる。

寛永十八年の茶会については、客組がわからないのでこれ以上のことは言えない。しかし、寛永二年の茶会については、もう少し詳しく見てみる必要があるように思える。特に、ここでは、九月二十二日の茶会について考えてみたい。なぜなら、この日は遠州と特に関係の深い藤堂高虎（以下高虎とする）が参会しているからである。高虎は、遠州の義理の父にあたる人である。そして高虎は遠州の父と大和郡山城で共に豊臣秀長に仕える同僚であった。したがって幼い頃から高虎と遠州は親しかった。「あはぬよの……」の掛物は高虎との久しぶりの再会を喜んだものではなかったか。さらに言えばこの月の十三日後水尾天皇の后である東福門院和子（まさこ）に第二子が誕生し、続いて「産養（うぶやしない）」が行われている。高虎は和子入内に関して奔走した人であったからこの祝に京都に赴いていたのではないか。それに、小堀宗慶氏によると、元和九年（一六二三）に伏見奉行になっ

た遠州は直ちに新奉行屋敷の建築にとりかかり（寛永元年初め着工）、翌二年七月に竣工し、八月二十六日に朝を初回として二十六回、招待客延べ百四名を迎えているという。[12] さらにこの頃、遠州や高虎は寛永三年九月に行われることになる後水尾天皇の二条城行幸に向け準備をしていた時期である。この茶会においても二条城行幸について話が及んだかもしれず、打ち合わせ的な意味合いもこの茶会にはあったのかもしれない。これらの事柄が重なって高虎は京都に来ており、その際に遠州の茶会に出席したのではないだろうか。

この日は、正客に近衛信尋を迎え、そしてもう一人の客として三宅亡羊が参会している。近衛信尋（以下信尋とする）も和子入内に際し、遠州と親密な関係になったと思われる。高虎とは、新井白石『白石先生紳書』に「応山公（近衛信尋―筆者注）御幼少の時に、無双の美少年成し故、政宗幷藤堂泉州（伊達政宗と藤堂高虎―筆者注）、柳生但馬等、つねに上洛の時は、御心安く出入有し。（中略）藤堂此前の亭を造営してまいらせられしなり。近来の火事にてかけぬ。それ程の御事也。殊に藤堂家は、歳暮に禁中へ黄金と雁とを献ず。近衛殿より御取次也。[13]」とあるように、信尋のことは彼の幼少のころから知っていて、禁中と徳川家の取次ぎ役としてこの二人は重要な働きをしていたようである。彼は寛永三年九月の後水尾天皇二条城行幸の禁裏側の中心的役割を担った人物でもあった。

もう一人の喜斎とあるのは、恐らく三宅亡羊（以下亡羊とする）であろう。彼は『松屋会記』に何度か登場する。寛永四年三月三十日朝の関九兵衛の席に寿斎とあるのが初見であろうか。そして以後寛永九年九月九日晩に藤堂大学の会に参会し、同年十月五日には自らが亭主をつとめ、松屋久重一人を招いて茶会をひらいている。注目すべきは、九月九日晩の茶会である。重陽の節句に行われたこの茶会は藤堂大学すなわち、高虎の子である高次が津城で開いたものである。この会には床に虚堂の墨蹟が掛けられ、前に盆石の中でも特に有名な名物「末の松山」を飾っている。同じく寛永十一年七月六日朝にも亡羊は、高次主催の茶会に参加している。今度は京都の堀川にあった藤堂家屋敷における茶会である。これらの事例は亡羊と藤堂家との間に深い関係があったことを示している。

このように寛永二年九月二十二日の茶会は、高虎と関係の深い二人が参加していることから高虎を中心とした会ではなかったかと推測されるのである。この前後の参会者についても高虎と縁の深い人達であると仮定すれば、その人物をある程度推測する事ができるのであるが、それは本論稿の趣旨ではないので後日論じようと思う。

ところで、熊倉功夫氏は『小堀遠州の茶友たち』（大綱社、昭和六十二年十月）でこの日の茶会を取り上げ、「掛物に定家の色紙を出して、当代の能筆をもてなしたともいえるが、この一連の茶会では、遠州は定家を使用していて、のちの墨蹟中心の遠州茶会とはちょっと印象が異なる。何か定家に趣向があったのかもしれない。」と指

述懐の歌群に属する。御製とあるのは明らかに誤りである。さて、先程も述べたように、この歌は『新古今和歌集』と『山家集』では配される位置が違う。それだけいろいろな意味にとることが出来る歌であるといえよう。ちなみに、『新古今和歌集』の詞書は「題しらず」であり、『山家集』では、「遥かなる所に籠りて、都なる人の許へ、月の頃つかはしける」となっている。

この場合は利休二百五十回忌追善を目的としているから、述懐の意味をこめてこの歌の掛物を掛けたと思われる。それに、典拠とした『古今茶湯集』の頭注には、この掛物は利休が堺に追放になった時に下し置かれたものであるとする。つまり、玄々斎には恋歌であるという意識はなく、ひたすら利休追慕の意識を前面に出した利休ゆかりの掛物であるという意識の方が断然強かったのではなかろうか。[15] この会は利休の追善茶会なので当然といえば当然であるが、他の茶道具を見ても、利休を偲ぶものばかりである。例えば、花入は利休より伝来した金紫銅経筒であるし、灰器は長次郎作のものを用い、茶碗は利休百五十年忌の時に松山侯から裏千家八代又玄斎千宗室に贈られた六閑斎手造の赤茶碗である。この追善茶会は『茶道事典』によると、天保九年九月八日から「翌年の二月二十七日までの半年たらずの間に約八十回催され、四百人ほどの客を招いて追善とした」という（一四二九頁）。ここに挙げた茶会もその一つである。この掛物は少なくとも天保九年九月八日、翌十年九月十二日にも掛けられた記録がある。[16] 利休二百五十回忌にはたびたび掛けられた掛物であると思われる。

5　井伊直弼の茶会

歌の原典となる歌集などからは判断できないが、井伊直弼の茶会において掛けられた恋歌ではないかと思われるものについて述べる。この茶会は、安政二年（一八五六）五月十日に行われたものである。客には弥千代、志津、中村久以という名がみえる。弥千代は直弼の息女であり、この時わずか九歳である。また志津は女中である。そして中村久以は側近の一人ではないかと思われる。もちろん男性である。つまりこの茶会は男女同席の会である。掛けられた掛物は一休和尚の「吉のなる音なし川にわたさはやしのふの里のさゝやきの橋」というものである。解釈のしかたによっては恋を感じさせる歌である。この歌は『夫木和歌集』巻二十一にある「くまのなるおとなし川にわたさばやささやきのはししのびしのびに（九四九二）」というよみ人知らずの歌の本歌取りである。『夫木和歌集』ではこの歌は雑部に入れられており、単に越後にある「ささやきのはし」を詠んだ歌になっている。したがって一休和尚の歌も恋歌ではないかもしれないが、ここでは可能性のあるものは考察の対象にしているので、恋歌と解釈したと仮定して話を進める。

ところで、この掛物がかけられた際に行われたような男女同席の

摘されている（三一四頁）。熊倉氏が指摘された「趣向」とは、実は恋歌を掛けたことではなかったか。上述したようにこの掛物を掛けることで遠州は、逢いたかったという気持ちを高虎に伝えたかったと私は推測する。

3　紀州徳川家における茶会

時代は随分と下るが、文化七年（一八一〇）二月十五日に紀州徳川家で行われた茶会に恋歌が掛けられている。これは、小倉色紙の定家の歌「来ぬ人を……」を用いた茶会であった。この色紙は銭屋宗訥が初め所持していたが、その後紀州徳川家に伝来しているものである。ちなみに小松茂美氏によると、昭和二年四月四日に東京美術倶楽部において行われた「紀伊徳川家所蔵品入札会」でこの色紙は定家自詠自筆の色紙として当時最高価格である三万五千円で落札されたという。[14] ここには、やはり定家の自筆自詠であることと、それが古来名物として扱われてきた小倉色紙の中の一枚であるということが大きく影響している。

さて、この茶会の性格について述べたいと思うが、典拠とした『古今茶湯集』には、客などの記載がほとんどない（客五名とだけある）ので、詳しく分析する事は不可能である。しかし、この会の亭主は当時紀伊藩主であった徳川治宝（明和八年～嘉永六年）であると推測する事ができる。なぜ二月十五日にこのような名物茶会が行われたのかは現在のところわからない。紀伊家は本来『江岑夏書』の著者である江岑宗左以来表千家とのつながりが強い。実際、治宝も表千家九代了々庵宗左について茶を学び皆伝をうけた人である。その上、天保七年（一八三六）四月二十六日には表千家十代吸江斎宗左に台子真手前の伝授を行った。つまり、表千家流はこの人を通して受け継がれたのである。前章で見たように表千家では本来恋歌を用いてはいけないことになっていた。しかし、『江岑夏書』には、小倉色紙でも〈こぬ人を〉の歌はよいと記しているのでこの色紙だけは例外だったと思われる。したがって、意味を解して恋歌とわかっていても例外として掛けたのではなかろうか。そして歌の意味を解していたとすると、長い間待ちわびた人がやっときてくれたという意をこめて亭主が掛けたものと思われる。

4　利休居士二百五十回忌追善茶会

次に恋歌が用いられた茶会は、天保十年（一八三九）十月七日に催された茶会である。この茶会は裏千家十一代玄々斎千宗室が亭主となって行った利休居士二百五十回忌追善茶会である。ここには、武藤武兵衛ら五名を客とし、床には「後陽成院御宸翰及御製」として「月のみやうはの空なるかたみにて思ひも出は心かよはん」が掛けられた。御製とあるが、これは西行の歌である。『新古今和歌集』恋の部にある。しかし、この歌は『山家集』では雑の部の、それも

茶会について谷村玲子氏は『井伊直弼　修養としての茶の湯』（創文社、平成十三年十一月）において直弼の茶の湯を分析し、次のように述べている。

直弼の茶の湯の理想は草庵茶の湯にあり「賓主歴然の茶の湯」にあったが、そうした直弼の理想は、自派茶の湯グループの茶の湯のみならず、直弼の関わった女性の茶の湯にも見られると言ってよい。「賓主歴然の茶の湯」とは、主客の差を歴然と区別しつつ互いの役割を全うし尊重しあい、その結果主客は一つの茶の湯へと到達する、と理解される。男女同席の茶会における男女の性差は、男性のみの茶会における差異よりもさらに明確な違いである。しかしたといその差は厳然としたものであっても、直弼の会に同席の男女は、一つの茶会をまっとうすべく誠心誠意茶の湯に専念する。その結果男女同席の茶会であろうとも、歴然とした性差の上に、ただ一つの茶の湯「賓主歴然の茶の湯」が成立する。「賓主歴然の茶の湯」の成立を目的とするという意味で、直弼の茶の湯にとって男女同席の茶会はなんら不思議なことではなかったのである。（二〇三～二〇四頁）

さらに氏は、このような男女同席の茶の湯が直弼の茶会に見られるのは、「直弼の茶の湯にはっきりとした理念があればこそであり、またその茶の湯を理解し稽古に参加しようとする者に限られていればこそであった」とする。

直弼の茶の湯に精神的な要素を見出すのは容易であり、これまでも幾度となく論じられてきた。そして谷村氏はそれを「修養としての茶の湯」としたのである。江戸時代には婦女子の教育にも恋歌が使われているから[17]客の教育、つまりは息女弥千代の教育のために恋歌を用いたのかもしれない。前述したように弥千代はこの時まだ九歳であるが、この三年後にはわずか十二歳で高松藩松平頼聡に嫁ぐことになるから、この時直弼の頭の中には、何らかの教育的指導をしようという「もくろみ」があったのかもしれない。歌の意味からそれをただちに導くことは困難であるが、歌の解釈とともに、男女の仲とは何かということを説いて聞かせたのかもしれない。

しかしそもそも武士道と恋歌は相容れないものであるのだろうか。例えば、有名な一節であるが田代又左衛門陣基筆録・山本神右衛門常朝口述『葉隠』（享保元年脱稿）には次のような言説がある（「聞書第二」）。

又この前、寄り合ひ申す衆に咄し申し候は、恋の至極は忍恋と見立て候、逢ひてからは恋のたけが低し、一生忍んで思ひ死する事こそ恋の本意なれ。歌に

恋死なん後の煙にそれと知れつひにもらさぬ中の思ひは

これこそ高き恋なれと申し候へば、感心の衆四五人ありて、煙仲間と申され候。

（和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』（上）岩波文庫、平成九年九月第二十六刷、九一頁）

ここには、恋を排除しようとする思想は微塵も感じ取れない。ちなみに、この歌は中院通村の『後十輪院内府集』（成立年等不明）に収められた歌で、元和三年（一六一七）七月八日内裏月次歌会で寄煙恋という題に対して詠まれた歌である。ただし、三句目が些か違っている。『葉隠』では三句目が「それと知れ」となっていたが、『後十輪院内府集』では「それと見よ」になっている。

この一例をもって論ずるのは危険であることは承知の上で言うのであるが、武士道と恋は相容れない関係ではないのではないか。これは早急に解明する事のできない問題であり、今後詳しく研究したいと思っているが、武士道とは武士が武士らしく生きる道ということであろう。では、武士とは何か。これに答えることは非常に難しい。それは時代によって様々に異なるからである。しかし、近世、特に寛永年間以後の武士は少なからず貴族化することを目指した。そして当然モデルとなるのは公家の社会である。その公家の文化的なシンボルは何かというと和歌であった。そこには四季と恋の世界がある。それ故近世の武士にとって恋は当然排除すべきものではない。当然恋を歌った恋歌も排除されるはずがない。したがって、直弼が恋歌を茶席に掛けても何ら問題はなかったのである。

本来なら明治以降の茶会についても言及しなければならないが、第一章でも述べたように、明治以降の茶道は前時代のそれとはかなり性格が異なる。例えば、明治以降の茶道の表舞台に立ちリードしていったのは、いわゆる「近代数寄者」であること。彼等は必ずしも特定の流派に拘泥せず、自身の審美眼、あるいは好みにより茶会を開いていることが多い。つまり、残された彼等の膨大な茶会記だけを追うのみでは不十分と思われる。したがって、明治以降の茶会に就いては稿を改め後日論じる予定である。

以上いくつかの例を出して恋歌が使われた茶会について述べた。まとめると、初期の茶会では名物意識が強く、歌の内容は関係ない。したがって意図的に恋歌を用いた茶会であったとは言いがたい。それが小堀遠州の時代になってくると歌の内容まで吟味して掛物を選ぶようになった。それは四季に応じた掛物を使用していることからも明らかである。当然恋歌かどうかといった問題も出てくることになる。その後は第一章で見たように千家流（特に表千家）では一部の小倉色紙の例外[18]を除いて恋歌は全面的に禁止となった。一方大名系の茶会には恋歌が掛けられることがあった。小堀遠州や井伊直弼の茶会がその例である。表1からもわかるように歌掛物を用いてもその歌まで記載してあるケースはむしろ稀であり、ここに見出すこ

とが出来なかった茶会にも恋歌が使用された可能性は否定できない。これからも事例を増やし恋歌が用いられたと思われる茶会についてそれがどのような意図あるいは事情で用いられたのかを考察していく予定である。

ともかくこの章で、茶書で見たような、恋歌に関する決め事がその実践である茶会記でも守られていることが確認できた。

三　茶器の歌銘について

茶道具に銘がついていることを知っている人は多いが、それが何によっているかを知る人は少ない。また、茶道具に銘がつけられ始めた時期や、何から銘をつけるといった発想が生れたかに関する研究はこれまでほとんど行われてこなかった。

わずかに、徳川義宣氏の「茶器の銘と名物の成立について」（『金鯱叢書』第九輯、思文閣出版、昭和五十七年六月）や、『茶の湯の名器―由来と銘』（茶道資料館、昭和六十三年十月）に収められた諸論文、そして名児耶明氏の「遠州の箱書と歌銘」（『遠州の観た茶入』五島美術館、平成八年五月）がある。[19] また、雑誌では『淡交』第二十八巻第二号（淡交社、昭和四十九年二月）に「『銘』の世界」という特集があり、源豊宗「銘の文化的価値」、満岡忠成「茶道具に見る銘の変遷」、高原杓庵「茶杓銘と茶人」、それに「銘一覧（花入・茶入・茶杓・茶碗）」がある。これらの論稿の中には、歌銘について既に明らかにされている事も少なからずあるので、これらの論文中歌銘に触れたものを取り上げそれらについて簡単にまとめておこうと思う。

まず、徳川氏の論文では、物質に固有名詞がつけられた古い例（例えば楽器など）から説き起こし、銘、名物の成立を歴史的に探っておられる。そして、氏は「九重」という名茶壺の由来に注目され、これを歌銘であるとし、[20] 銘および名物の成立を「永享六年以前、若しくは応永年間にも溯るもの」（四六四頁）とされた。氏も言われるようにこの論稿は、銘の成立自体がこれまで漠然と文明年間以降に足利義政によって始められたのではないかといった認識を改める画期的なものであった。

次に『茶の湯の名器―由来と銘』に収載された論文について述べる。まず、筒井紘一氏は「茶器―銘とその由来―」において、銘の由来から分類を行っている（あくまでも私見によるもので普遍性をもつものではないとしながらであるが）。それは次のようなものである。

I　見立て銘〈イメージ銘〉

II　事象銘

a　物語銘

b　謡曲銘

c　歌銘

表1　歌を用いた茶会

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
今井宗久茶湯書抜	天文	24	1555	10	2	不明	紹鷗老御会	定家色紙	あまのはら	羇旅	
	天正	8	1580	1	8	朝	惟任日向守・坂本	小倉色紙	あはちしま	冬	
	慶長	9	1604	5	4	昼	古田織部	定家色紙	いにしへの	春	
宗達他会記	永禄	2	1559	3	25	朝	道叱	定家色紙	不明		
	永禄	3	1560	1	13	朝	宗湛（住吉屋宗端か）・仮屋にて	定家色紙	不明		
	永禄	6	1563	3	27	昼	道叱	定家色紙	不明		
宗達自会記	弘治	3	1557	3	29	朝	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	弘治	4	1558	3	3	朝	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	弘治	4	1558	12	18	昼	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	弘治	4	1558	12	21	昼	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	3	1560	2	3	不明	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	3	1560	5	27	朝	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	5	1562	9	18	昼	宗達	小倉色紙	やへむくら	秋	
宗及他会記	永禄	9	1566	11	15	朝	竹蔵紹有	住吉三詠	不明		
	永禄	11	1568	1	1	昼	千紹安	不明	不明		
	永禄	11	1568	4	26	朝	紹二（紹安の誤か）	定家色紙	不明		
	永禄	12	1568	11	10	朝	若佐屋宗圭	定家の歌	不明		
	元亀	3	1572	12	5	朝	銭屋宗訥	小倉色紙	こぬひとを	恋	◎
	天正	1	1573	12	29	朝	（重）宗甫	定家色紙	不明		
	天正	2	1574	12	21	昼	納屋宗久	定家色紙	不明		
	天正	5	1577	10	8	朝	荒木摂津守	定家色紙	不明		
	天正	7	1579	1	8	朝	惟任日向殿	小倉色紙	あはちしま	冬	
	天正	7	1579	6	18	朝	道叱	定家色紙	不明		
	天正	8	1580	9	18	昼	宮内法院（松井友閑）、安土	小倉色紙	あらしふく	秋	
	天正	8	1580	11	27	昼	宮内法院、不時	定家色紙	不明		
	天正	8	1580	12	25	朝	松江隆仙	逍遥院色紙	不明		
	天正	9	1581	1	8	朝	宮内法院（松井友閑）、安土	小倉色紙	あらしふく	秋	
	天正	9	1581	1	10	朝	惟任日向殿	小倉色紙	あはちしま	冬	
	天正	10	1582	1	25	朝	惟任日向殿	定家色紙	不明		
宗及自会記	永禄	11	1568	3	19	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	11	1568	11	16	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	12	1569	5	10	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	永禄	12	1569	9	24	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	永禄	12	1569	11	14	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	2	1571	3	19	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	2	1571	4	16	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	3	1572	1	6	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	3	1572	4	6	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	3	1572	7	7	卯刻	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	4	1573	1	25	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	元亀	4	1573	11	29	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	2	1574	1	15	昼	宗及	夢庵の歌	不明		
	天正	2	1574	7	1	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	2	1574	12	20	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	3	1575	1	14	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	3	1575	6	27	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	3	1575	8	20	終日	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	3	1575	12	22	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	4	1576	3	6	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	4	1576	7	1	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	4	1576	7	22	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	5	1577	1	16	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	5	1577	7	25	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	1	28	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	3	4	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	5	24	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	6	7	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	7	5	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	7	25	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	8	5	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	11	5	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	11	10	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	11	28	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	6	1578	12	9	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	7	1579	1	18	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	7	1579	3	15	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	7	1579	6	14	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	

	天正	7	1579	6	19	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	8	1580	1	20	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	8	1580	4	1	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	8	1580	5	26	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	8	1580	8	19	晩	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	8	1580	11	17	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	9	1581	6	29	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	9	1581	7	1	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	9	1581	12	9	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	9	1581	12	19	晩	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	10	1582	8	5	晩	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	10	1582	8	15	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	10	1582	8	16	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	10	1582	12	5	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	11	1583	1	24	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	11	1583	10	18	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	6	21	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	7	22	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	8	5	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	8	25	昼	宗及、茶屋にて	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	6	朝	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	6	晩	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	13	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	14	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	22	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	26	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	9	30	不明	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	12	1584	10	5	昼	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	13	1585	5	12	昼	宗及、茶屋にて薄茶を	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	15	1587	3	6	朝	宗及、茶屋にて	小倉色紙	やへむくら	秋	
	天正	15	1587	3	8	晩	宗及	小倉色紙	やへむくら	秋	
久政茶会記	天正	14	1586	10	20	四ッ時	大納言秀長、郡山城	定家色紙	(ゆらのとを)	(恋)	(◎)
	天正	16	1588	10	16	朝	清水宗仙	小倉色紙	みかきもり	恋	◎
宗湛日記	天正	15	1587	1	7	朝	(大和屋) 立左	小倉色紙	不明		
	天正	15	1587	1	9	朝	宗及　大坂	小倉色紙	やへむくら	秋	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	天正	15	1587	3	11	朝	道叱老、堺	小倉色紙	不明		
	天正	15	1587	6	13	朝	宗及、箱崎	小倉色紙	（やへむくら）	秋	
	天正	15	1587	10	9	朝	宗及、聚楽第	小倉色紙	よのなかよ	雑	
	天正	20	1592	11	10	朝	石田正澄、名古屋	不明	ゆふされに		
	天正	20	1592	11	15	昼	前田利家、名古屋	小倉色紙	うかりける	恋	◎
	天正	20	1592	11	17	朝	豊臣秀吉、名古屋	不明	ゆふされに		
	天正	20	1592	12	25	朝	宗凡、名古屋	小倉色紙	（やへむくら）	秋	
	文禄	2	1593	1	22	朝	石田正澄、名古屋	不明	ゆふされに		
	文禄	2	1593	1	27	朝	宗凡、名古屋	小倉色紙	やへむくら	秋	
	慶長	2	1597	1	24	朝	豊臣秀吉	小倉色紙	あまのはら	羇旅	
	慶長	2	1597	2	25	朝	納屋宗薫	小倉色紙	おほゑやま	雑	
	慶長	2	1597	3	8	昼	宗凡	小倉色紙	やへむくら	秋	
	慶長	10	1605	6	15	昼	宗凡	小倉色紙	やへむくら	秋	
久好茶会記	天正	17	1589	11	18	朝	清水宗仙	小倉色紙	みかきもり	恋	◎
	天正	18	1590	12	23	朝	薬屋宗方	定家後撰切	不明		
	元和	4	1618	1	13	晩	中坊左近	定家の詩歌	不明		
	元和	4	1618	4	13	晩	中坊左近	定家朗詠切	不明		
有楽亭茶湯日記	慶長	16	1611	9	3	昼	織田有楽	定家筆	こしたもと	雑	
	慶長	17	1612	5	23	昼	織田有楽	定家筆か	不明		
	慶長	17	1612	6	11	昼	織田有楽	定家筆か	不明		
	慶長	18	1613	4	9	朝	織田有楽	定家筆か	不明		
	慶長	19	1614	5	5	朝	織田有楽	定家筆か	不明		
	慶長	19	1614	7	26	昼	織田有楽	定家筆か	不明		
	慶長	19	1614	8	16	朝	織田有楽	定家色紙	不明		
久重茶会記	元和	4	1618	1	16	朝	服部甚助	貫之色紙	不明		
	元和	8	1622	12	8	朝	中筋道也	沢庵文歌	不明		
	寛永	3	1626	12	6	晩	中坊左近	西行歌書	不明		
	寛永	6	1629	6	5	日中	京都誓願寺隠居安楽庵	定家懐紙	たらちねの		
	寛永	6	1629	11	13	昼	京都医者以策・一条戻橋	定家歌抄切	不明		
	寛永	6	1629	12	25	晩	中坊左近	定家筆か	不明		
	寛永	7	1630	1	7	朝	石井宗有	定家後撰切	不明		
	寛永	7	1630	1	12	晩	千貫屋良以	不明	なつのよは	夏	
	寛永	7	1630	4	1	晩	大仏師侍従（仏師屋与太郎か）	定家後撰切	不明		
	寛永	8	1631	2	10	晩	中坊左近	西行歌書	不明		

	寛永	8	1631	2	15	朝	大（大蔵か）長次郎へ	西行歌抄	不明		
	寛永	8	1631	3	7	晩	高畠小三郎	歌抄切	不明		
	寛永	9	1632	10	5	朝	三宅寿斎（三宅亡羊）	定家色紙	やまもりよ		
	寛永	13	1636	10	26	晩	中沼左京	不明	いのちほと		
	寛永	14	1637	3	7	朝	柳生但馬守	小倉色紙	うかりける	恋	◎
	寛永	14	1637	10	23	朝	中坊飛騨守	貫之歌書	不明		
	正保	4	1647	3	3	朝	平野權平	沢庵歌	不明		
	明暦	2	1656	9	23	朝	金森宗和	不明	不明		
金森宗和茶会記	明暦	2	1656	9	25	朝	金森宗和	不明	不明		
	明暦	2	1656	9	26	朝	金森宗和	不明	不明		
小堀遠州茶会記	寛永	2	1625	8	26	朝	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	
	寛永	2	1625	9	13	晩	小堀遠州	定家筆	ふれはかく	冬	
	寛永	2	1625	9	21	晩	小堀遠州	定家の歌	あはぬよの	恋	◎
	寛永	2	1625	9	22	朝	小堀遠州	定家の歌	あはぬよの	恋	◎
	寛永	2	1625	9	22	晩	小堀遠州	定家の歌	あはぬよの	恋	◎
	寛永	2	1625	9	23	朝	小堀遠州	定家の歌	あはぬよの	恋	◎
	寛永	5	1628	4	23	晩	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	4	26	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	5	1	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	6	5	晩	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	9	14	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	9	16	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	9	17	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	5	1628	9	19	朝	小堀遠州	一休小色紙	あきはなほ	秋	
	寛永	5	1628	9	26	朝	小堀遠州	定家筆	ふれはかく	冬	
	寛永	5	1628	9	28	晩	小堀遠州	定家筆	ふれはかく	冬	
	寛永	5	1628	10	2	朝	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	14	1637	12	2	夜	小堀遠州	定家筆	ふれはかく	冬	
	寛永	16	1639	11	21	朝	小堀遠州	定家筆	不明	冬か雑	
	寛永	16	1639	12	16	朝	小堀遠州	定家筆色紙	あふさかの	雑	
	寛永	16	1639	12	17	朝	小堀遠州	定家色紙	不明		
	寛永	17	1640	12	7	昼	小堀遠州	定家筆色紙	あふさかの	雑	
	寛永	17	1640	12	17	晩	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	18	1641	1	5	朝	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	
	寛永	18	1641	1	19	朝	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	寛永	18	1641	1	22	朝	小堀遠州	定家の歌	あはぬよの	恋	◎
	寛永	18	1641	3	1	朝	小堀遠州	定家筆文	さくらちる	春	
	寛永	19	1642	4	13	晩	小堀遠州	定家草枕色紙	くさまくら	雑	
	寛永	21	1644	1	1	晩	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	
	寛永	21	1644	1	3	晩	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	
	寛永	21	1644	1	5	晩	小堀遠州	定家の歌	かめやまの	雑	
江岑宗左茶会記	寛永	19	1642	5	4	晩	徳川頼宣・江岑	定家筆か	不明		
	寛永	19	1642	5	8	極晩	徳川頼宣・江岑	定家色紙	不明		
	寛永	19	1642	7	26	晩	徳川頼宣・江岑	定家色紙	不明		
	寛永	19	1642	8	2	昼	徳川頼宣・江岑	一休祝歌	不明	賀	
	寛永	19	1642	閏9	13	晩	徳川頼宣・江岑	定家詩歌	不明		
	寛永	20	1643	2	24	晩	三輪大学	沢庵狂歌	不明		
	寛永	21	1644	7	4	不明	河内屋惣兵衛	紹巴の歌	不明		
	寛永	21	1644	7	21	昼	壷屋長兵衛	歌書	不明		
	寛永	21	1644	7	22	昼	慮南	光悦筆か	不明		
	正保	2	1645	3	10	朝	渡辺一学	貫之	不明		
	正保	2	1645	4	26	昼	慮南	光悦筆か	不明		
	正保	2	1645	5	1	昼	石川宗玄	定家切	不明		
	正保	2	1645	5	3	朝	知存	後陽成院詩歌	不明		
	正保	2	1645	閏5	2	朝	近藤道務	後京極殿詩歌	不明		
	正保	2	1645	8	12	昼	小堀や久徳	沢庵の歌	不明		
	正保	3	1646	6	7	朝	三輪大学・江戸	沢庵の歌	不明		
	正保	3	1646	12	5	朝	三輪大学	沢庵の歌	不明		
	正保	5	1647	2	26	昼	慮南	利休歌	不明		
	正保	5	1647	7	23	昼	石川宗玄	定家切	不明		
	正保	5	1647	9	8	昼	知存	後陽成院詩歌	不明		
	慶安	4	1651	2	9	朝	千宗旦	小町	不明		
	慶安	4	1651	3	12	朝	宗印	歌	不明		
	慶安	4	1651	3	29	昼	知存	後陽成院詩歌	不明		
	承応	2	1653	9	24	朝	板三郎右	長嘯子歌	不明		
	承応	2	1653	10	21	昼	綿屋十右衛門	沢庵の歌	不明		
	承応	3	1654	3	13	昼	岌渕	伏見院殿歌	不明		
	承応	3	1654	5	18	昼	徳川頼宣・江岑	小倉色紙	こぬひとを	恋	◎
	承応	3	1654	8	2	不明	徳川頼宣・江岑	小倉色紙	こぬひとを	恋	◎

	承応	3	1654	9	26	不明	徳川頼宣・江岑	定家拾遺切	不明		
	承応	4	1655	2	24	昼	万屋宗伴	定家色紙	不明		
	承応	4	1655	3	23	朝	喜兵	利休狂歌	不明	狂歌	
	明暦	3	1657	4	28	昼	知存	歌勅筆	不明		
	明暦	3	1657	5	6	昼	八文徳兵衛	紹巴の歌	不明		
	明暦	3	1657	6	28	昼	瀬尾治兵	後奈良院歌	不明		
	明暦	3	1657	10	26	昼	徳倉道室	清輔歌切	不明		
	明暦	3	1657	11	6	朝	二徳	利休狂歌	不明	狂歌	
	万治	2	1659	4	21	朝	大源庵	行成色紙	ほのぼのと		
	万治	2	1659	4	22	昼	岸勘兵	宗旦辞世	こくうめが		
	万治	2	1659	9	26	朝	大孫右	行幸和歌	不明		
	万治	3	1660	5	8	昼	井戸志摩	為重和歌	不明		
	寛文	1	1661	閏8	5	朝	二徳	利休歌	不明		
	寛文	1	1661	10	11	昼	文阿弥	定家色紙	不明		
	寛文	1	1661	10	21	昼	二徳	利休歌	不明		
	寛文	1	1661	10	30	昼	道珠	沢庵の歌	不明		
	寛文	1	1661	11	7	昼	京極寺	三藐院歌	不明		
	寛文	1	1661	11	12	昼	糸七郎右	一休歌	不明		
	寛文	8	1668	9	15	不明	林弥四郎	宗旦の歌	不明		
	寛文	8	1668	11	10	昼	さかへ日比宗権	定家一枚紙	不明		
後西院御茶之湯記	延宝	6	1678	12	9	不明	後西院・御小座敷	家隆懐紙	不明	春	
	延宝	7	1679	11	14	不明	後西院・御小座敷・四畳半	慈鎮懐紙	不明	釈教	
	延宝	8	1680	8	25	不明	後西院・御小座敷・三畳台目	俊頼筆	不明		
	天和	2	1682	8	28	不明	後西院・御小座敷・三畳台目	明釈懐紙	不明		
	天和	2	1682	9	27	不明	後西院・御小座敷・三畳台目	為家八代集切	不明		
	天和	3	1683	2	3	不明	後西院・三畳台目	行成敷書	不明		
	貞享	1	1684	6	6	不明	後西院	為家詠草切	不明		
藤村庸軒茶会記	天和	3	1683	12	5	昼	藤村庸軒	後鳥羽院絵賛	不明		
	貞享	2	1685	12	3	不明	藤村庸軒	利休色紙	さしきをは	道歌	
	元禄	2	1689	11	16	昼	藤村庸軒	利休文	はなつつの	狂歌	
	元禄	3	1690	2	15	昼	藤村庸軒	利休文	はなつつの	狂歌	
	元禄	3	1690	2	24	昼	藤村庸軒	利休文	はなつつの	狂歌	
	元禄	3	1690	4	24	昼	藤村庸軒	不明	よのなかに	春	
伊達綱村茶会記	元禄	12	1699	1	21	朝	伊達綱村・江戸邸・囲かき四畳	定家小色紙	不明		
	元禄	12	1699	5	27	朝	伊達綱村・江戸邸	定家亀山色紙	不明		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	元禄	13	1700	4	1	晩	伊達綱村・江戸邸	定家亀山色紙	不明		
	元禄	14	1701	8	12	晩	伊達綱村・江戸邸	貫之色紙	あきかせの	秋	
	元禄	14	1701	4	5	朝	伊達綱村・江戸邸	転法輪筆	わかのうら		
	元禄	14	1701	5	20	晩	伊達綱村・江戸邸	烏丸光宣詠草	不明		
	元禄	14	1701	5	21	朝	伊達綱村・江戸邸	烏丸光宣詠草	不明		
	元禄	14	1701	6	20	晩	伊達綱村・江戸邸	烏丸光宣詠草	不明		
	元禄	14	1701	7	17	夜	伊達綱村・江戸邸	頓阿法師切	不明		
	元禄	14	1701	8	12	晩	伊達綱村・江戸邸	貫之色紙	あきかせの	秋	
	元禄	14	1701	8	13	朝	伊達綱村・江戸邸	吉野山の絵	不明		
	元禄	14	1701	9	21	朝	伊達綱村・江戸邸	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	14	1701	11	29	晩	伊達綱村・江戸邸	定家筆か	てならひの		
	元禄	15	1702	2	9	朝	竿舟点前・江戸邸	一休小色紙	はるたつと	春	
	元禄	15	1702	2	10	晩	伊達綱村・江戸邸	定家後撰切	やまひとの	賀	
	元禄	15	1702	3	20	晩	伊達綱村・江戸邸	定家筆か	てならひの		
	元禄	15	1702	3	30	晩	伊達綱村・江戸邸	定家筆か	てならひの		
	元禄	15	1702	4	23	晩	伊達綱村・江戸邸	定家筆か	てならひの		
	元禄	15	1702	5	16	朝	伊達綱村・江戸邸	烏丸光宣詠草	不明		
	元禄	15	1702	6	23	晩	伊達綱村・仙台城	一休小色紙	はるたつと	春	
	元禄	15	1702	7	15	晩	道白点前・仙台城	定家歌切	不明		
	元禄	15	1702	7	26	朝	道白点前・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	15	1702	7	26	夜	半左衛門点前・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	15	1702	7	27	朝	伊達綱村・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	15	1702	7	28	朝	伊達綱村・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	15	1702	7	28	夜	伊達綱村・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	15	1702	8	5	朝	伊達綱村・仙台城	定家歌切	不明		
	元禄	15	1702	閏8	6	晩	伊達綱村・仙台城	一休小色紙	はるたつと	春	
	元禄	15	1702	11	1	晩	伊達綱村・仙台城	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	16	1703	1	1	夜	伊達綱村・仙台城	吉野山の絵	不明		
	元禄	16	1703	1	2	夜	伊達綱村・仙台城	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	1	14	朝	伊達綱村・御宮町下屋敷	明正院歌物	はるあきも		
	元禄	16	1703	4	16	晩	伊達綱村・江戸邸	近衛基熙歌	不明		
	元禄	16	1703	4	28	夜	伊達綱村・江戸邸	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	5	7	晩	清水道竿点前・江戸邸	烏丸光宣詠草	不明		
	元禄	16	1703	5	14	夜	伊達綱村・江戸邸	近衛基熙歌	不明		

	元禄	16	1703	6	6	朝	伊達綱村・江戸邸	定家詩歌切	不明		
	元禄	16	1703	6	21	晩	伊達綱村・江戸邸	定家詩歌切	不明		
	元禄	16	1703	7	18	朝	伊達綱村・江戸邸	定家詩歌切	不明		
	元禄	16	1703	10	1	晩	伊達綱村・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	5	晩	草斎点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	7	晩	安達雲斎点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	9	晩	安達雲斎点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	9	夜	伊達綱村・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	10	晩	悦阿弥点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	11	晩	安達雲斎点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	12	晩	安達雲斎点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	13	晩	悦阿弥点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	13	夜	悦阿弥点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	14	晩	道白点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	15	晩	悦阿弥点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	16	晩	道白点前・愛宕下屋敷	定家筆か	てならひの		
	元禄	16	1703	10	17	晩	伊達綱村・愛宕下屋敷	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	16	1703	10	18	不明	伊達綱村・愛宕下屋敷	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	16	1703	10	19	晩	安達雲斎点前・愛宕下屋敷	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	元禄	16	1703	10	26	晩	伊達綱村・愛宕下屋敷	一休小色紙	かすかのに		
	元禄	16	1703	10	26	夜	道白点前・愛宕下屋敷	一休小色紙	かすかのに		
	元禄	16	1703	10	29	晩	伊達綱村・愛宕下屋敷	飛鳥井雅親懐紙	不明		
	元禄	17	1704	1	11	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	明正院短冊	不明		
	元禄	17	1704	1	27	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	烏丸光宣詠草	不明		
	宝永	1	1704	5	20	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	定家詩歌切	不明		
	宝永	1	1704	6	15	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	烏丸光宣詠草	不明		
	宝永	1	1704	8	3	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	行成歌物	不明		
	宝永	1	1704	9	1	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	定家詩歌切	不明		
	宝永	1	1704	9	18	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	定家歌合	不明		
	宝永	1	1704	9	26	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	一休小色紙	はるたつと	春	
	宝永	1	1704	10	4	夜	伊達綱村・江戸麻布邸	頓阿法師切	不明	春	
	宝永	1	1704	11	14	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	明正院短冊	不明		
	宝永	2	1705	1	1	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	明正院短冊	不明		
	宝永	2	1705	1	2	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	明正院短冊	不明		
	宝永	2	1705	1	3	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	明正院短冊	不明		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	宝永	2	1705	2	18	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	仙洞様懐紙	不明	賀	
	宝永	2	1705	4	27	夜	伊達綱村・江戸麻布邸	後花園院小色紙	しのひわひ		
	宝永	2	1705	4	29	夜	伊達綱村・江戸麻布邸	定家詩歌切	不明		
	宝永	2	1705	閏4	19	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後奈良院詠草	不明		
	宝永	2	1705	閏4	24	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後奈良院詠草	不明		
	宝永	2	1705	閏4	25	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後西院勅書	おなしくは		
	宝永	2	1705	5	2	夜	伊達綱村・江戸麻布邸	烏丸光宣詠草	不明		
	宝永	2	1705	5	11	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	近衛政家詠草	不明		
	宝永	2	1705	5	20	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後土御門院歌	たましきの		
	宝永	2	1705	5	26	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	烏丸光宣詠草	不明		
	宝永	2	1705	5	28	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後円融院歌	不明		
	宝永	2	1705	5	30	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後土御門院歌	たましきの		
	宝永	2	1705	6	5	晩	伊達綱村・江戸麻布邸	後柏原院勅筆	ふゆのひの	冬	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	頓阿法師切	ひさかたの	春	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	後小松院勅筆切	不明	秋	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	転法輪筆	わかのうら		
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	後西院勅書	おなしくは		
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	陽光院詩歌	不明		
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	一休小色紙	はるたつと	春	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	知忠親王詠草	不明		
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	定家後撰切	やまひとの	賀	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	仙洞様懐紙	不明	賀	
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	近衛政家詠草	不明		
	宝永	2	1705	不明	不明	不明	不明	明正院短冊	不明		
槐記	享保	9	1724	10	23	午刻	深諦院・奥三畳敷	定家の文	不明		
	享保	9	1724	11	6	午刻	上田養安	定家詠草	をはつせの	冬	
	享保	9	1724	12	18	午時	進藤刑部大輔	宗甫消息	すくならむ	冬	
	享保	11	1726	4	13	午過	御薗意斎	烏丸光広詠草	不明		
	享保	11	1726	5	1	午半	進藤一葉・表の三畳台目	利休文	不明		
	享保	11	1726	11	4	午過	深諦院	後西院宸翰	みのうち茶		
	享保	13	1728	3	24	午半	進藤左典	三藐院歌	不明		
	享保	13	1728	4	29	午半	御所	飛鳥井雅経色紙	かへるやま	離別	
	享保	13	1728	12	21	正午	鷹司内府公・三畳	定家の歌	不明		
	享保	14	1729	1	7	午半	近衛予楽院	後小松院宸翰	とめわひぬ	春	

	享保	14	1729	閏9	13	午半	内府公	良恕親王の文	不明		
	享保	15	1730	1	7	不明	不明・御居間続の囲	尚通・桃華詠草	不明		
	享保	16	1731	1	7	不明	不明	不明	はることに	春	
	享保	16	1731	4	29	不明	道正庵	寂蓮色紙	さつきやみ	夏	
	享保	19	1734	1	7	不明	不明	正親町院詠草	とめわひぬ	春	
	享保	19	1734	2	22	不明	不明	後西院宸翰	みのうち茶		
茶器名物図彙	不明	不明	不明	6	3	不明	千利休	定家色紙	よのなかに	雑	
	享保	6	1721	12	19	不明	如心斎千宗員	覚々斎狂歌	不明	狂歌	
	享保	7	1722	8	29	昼	如心斎千宗員	沢庵の文	不明		
	不明	不明	不明	不明	不明	不明	如心斎千宗員	不明	とにかくに	狂歌	
	寛延	1	1748	11	16	昼半	如心斎千宗員	利休半切文	不明		
	元和	1	1615	10	22	朝	不明	定家筆か	不明		
	元和	1	1615	10	24	昼	不明	定家筆か	不明		
	元和	1	1615	10	27	昼	不明	定家筆か	不明		
	元和	1	1615	12	9	朝	不明	定家筆か	不明		
	元和	1	1615	12	20	昼	不明	定家筆か	不明		
	天和	2	1682	2	28	昼	不明	定家筆か	不明		
	貞享	5	1688	1	25	朝	不明	信尋・宗旦狂歌	不明	狂歌	
	元文	4	1739	9	7	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	10	3	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	10	4	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	10	5	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	10	6	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	11	4	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	11	5	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	2	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	3	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	4	朝	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	4	昼	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	5	不明	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	元文	4	1739	12	6	朝	如心斎千宗員	利休文	むさしあふみ		
	天明	2	1782	4	28	飯後	不明	利休文	不明		
	天明	2	1782	11	17	暁、冬至	不明	東福門院押絵賛	はるたつと		
酒井宗雅茶会記	天明	7	1787	1	3	正午	酒井宗雅・逾好庵	片桐石州歌	不明		
	天明	7	1787	2	21	不明	酒井宗雅	定家の歌	不明		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	天明	7	1787	5	4	正午	酒井宗雅・幽竹庵・藤堂和泉守亭	尊朝親王和歌	たかはあし		
	天明	7	1787	8	17	昼	酒井宗雅	三藐院狂歌	よのひとに	狂歌	
	天明	8	1788	11	5	夜	酒井宗雅・逾好庵	宗旦歌	こくうめが		
	天明	8	1788	12	9	正午	酒井宗雅・牧野佐渡守亭	沢庵の文	こそもまた		
	天明	8	1788	12	15	正午	酒井宗雅・酒井是三亭・雪	中院通茂懐紙	こゑたたす	冬	
	天明	8	1788	12	21	正午	酒井宗雅・又隠写・内藤半左衛門亭	三筆歌切	不明		
	天明	9	1789	1	10	夜	酒井宗雅・三省亭出茶	宗甫文	ことしけき	春	
	天明	9	1789	1	15	夜月	酒井宗雅・逾好庵	烏丸光広詠草	不明		
	寛政	1	1789	2	2	正午	酒井宗雅・堀本一甫亭	持明院家胤懐紙	よよこめて	春	
	寛政	1	1789	2	7	正午	酒井宗雅・三省亭出茶	沢庵詩歌	まつたてる	春	
	寛政	1	1789	2	26	正午	酒井宗雅・小笠原佐渡守亭	近衛信尹懐紙	ふるとしの	春	
	寛政	1	1789	3	16	正午	酒井宗雅・逾好庵	定家の歌	不明		
	寛政	1	1789	3	17	正午	酒井宗雅・逾好庵	定家の歌	不明		
	寛政	1	1789	3	25	正午	酒井宗雅・松平相模守亭	家隆歌切	不明		
	寛政	1	1789	3	26	正午	酒井宗雅・扇橋	宗旦文	不明	狂歌	
	寛政	1	1789	4	6	昼前	酒井宗雅・不審庵写	細川玄旨文	ほのほのと	狂歌	
	寛政	1	1789	4	6	正午	酒井宗雅・扇橋	宗旦文	不明	狂歌	
	寛政	1	1789	5	9	夕	酒井宗雅・逾好庵	沢庵の歌	うけてみの	夏	
	寛政	1	1789	5	10	正午	酒井宗雅・逾好庵	沢庵の歌	うけてみの	夏	
不昧公茶会記抄	享和	2	1802	2	22	不明	松平不昧・大坂屋敷	定家慶賀文	たちのほり	賀	
	文化	4	1807	1	1	不明	皇服・四畳半	肖柏文	不明		
	文化	6	1809	10	7	不明	松平不昧・独楽庵	西行落葉切	しきみつむ		
	文化	8	1811	8	26	不明	松平不昧・独楽庵	兼好懐紙	をはなちる	秋	
	文化	9	1812	1	7	不明	松平不昧・三畳台目	定家慶賀文	たちのほり	賀	
鐘奇斎日々雑記	天保	12	1841	5	28	八ッ時	黒川・快晴	元政詠草懐紙	不明	夏	
	天保	12	1841	8	14	午時前	加島屋作二郎・快晴	紹巴文	不明	秋	
	天保	12	1841	8	20	不明	明石屋庄右衛門・晴	光広短冊	不明	秋	
	天保	12	1841	9	25	不明	藤井富三郎・晴	景樹の歌	不明		
	天保	12	1841	9	30	不明	加庄・晴	三藐院古歌	不明		
	天保	12	1841	12	3	不明	木津・晴少し風強く、昼過より曇	大綱手紙	いくとしを	冬	
	天保	14	1843	3	10	不明	藤井氏・晴	景樹の歌	不明		
	天保	14	1843	閏9	11	不明	井坂氏・雨夜晴	貞徳の歌	不明	秋	
	天保	14	1843	12	13	不明	道勝・朝晴八ッ後曇・少し雪降る	紹巴懐紙	不明		
	天保	15	1844	7	1	不明	藤井庄右衛門・晴天残炎強	沢庵の歌	不明	秋	

井伊直弼茶会記	嘉永	5	1854	3	13	夕	不明、中嶋亭にて	不明	不明		
	安政	2	1855	2	25	正午	不明	不明	不明	春	
	安政	2	1855	3	13	不明	不明、新野亭にて	不明	やまかはの		
	安政	2	1855	3	19	不明	不明、北野寺亭にて	不明	すなほなる		
	安政	2	1855	4	25	不明	不明、仙琳寺亭にて	不明	不明		
	安政	2	1855	4	25	不明	後段	不明	ひとこゑを	夏	
	安政	2	1855	5	10	夕	不明、小縣亭、不侍庵数奇屋	不明	よしのなる	恋	◎
	安政	3	1856	1	9	晩	中嶋宗達亭、一露軒御席	不明	なにしおふ	春	
	安政	3	1856	1	13	不明	臼居安之丞亭、一露軒御席	不明	あらめてて	賀	
	安政	3	1856	2	5	不明	三浦五郎右衛門	不明	ねのひする	春	
	安政	3	1856	2	26	不明	椋原主馬	不明	そよとふく	春	
	安政	3	1856	3	13	不明	小縣亭、一露軒御席	不明	おもかけの	冬	
	安政	3	1856	3	13	不明	中嶋宗達亭	不明	なにはつの	春	
	安政	3	1856	3	16	夕	宗三（飯島三太夫）亭、一露軒	不明	とかへりの	賀	
	安政	3	1856	3	18	不明	柏原亭、一露軒御席	不明	はなかつら	春	
	安政	3	1856	4	26	正午	村山丹宮亭、一露軒御席	不明	てふなれへ		
	安政	3	1856	8	22	午の下刻	天寧寺亭、茶席にて	不明	不明		
	安政	3	1856	8	27	夕	青山宗白亭、天光御席	不明	をるひとの	秋	
	安政	3	1856	9	10	夕	村田大助亭、天光御室	不明	みとりなる		
	安政	3	1856	9	30	夕	奥野藤兵衛亭、天光室御席	不明	不明		
	安政	3	1856	10	15	正午	脇五左衛門亭、六畳敷	不明	まつたけの	冬	
	安政	3	1856	11	3	正午	不明、六畳敷	頓阿の歌	不明		
	安政	4	1857	1	13	夕	宇津木六之丞亭、天光室御席	不明	そよとふく	春	
	安政	4	1857	2	2	不明	宇津木乾之進、天光室御席	不明	はるあさみ	春	
	安政	4	1857	2	9	不明	飯嶋亭	不明	いつはとは	春	
	安政	4	1857	2	18	不明	宇津木大炊亭、座忘亭席	不明	なみかぜの	春	
	安政	4	1857	3	15	不明	松居主計、天光室御席	不明	ひかりある		
	安政	4	1857	3	23	不明	杉原惣左衛門亭、天光室御席	不明	そてのかも	春	
	安政	4	1857	3	24	夕	村田亭、天光室御席	不明	とくわれも	春	
	安政	4	1857	3	26	正午	新野亭、寿鼓庵	不明	くれかたき	賀	
	安政	4	1857	4	11	不明	三浦義太郎、天光室御席	不明	まとかなる		
	安政	4	1857	4	19	不明	宇津木又之進、天光室御席	不明	めさますな		
	安政	4	1857	4	27	不明	中居久之進、天光室御席	不明	すみにこる		
	安政	4	1857	5	10	不明	椋原杢、天光室御席	不明	かくにこそ		
	安政	4	1857	8	10	夜	奥野藤兵衛、献茶	不明	つるかめも	賀	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	安政	4	1857	12	3	夕	杉原惣左衛門	不明	すみにこる		
	安政	4	1857	12	27	夕	柏原徳之進、一露亭にて	不明	たつのこの	賀	
	安政	5	1858	1	5	正午	椋原宗収	不明	うらうらと	春	
	安政	5	1858	1	26	朝	柏原宗量	不明	あくるよの	春	
	安政	5	1858	2	15	夕	宇津木宗志	不明	あかつきの	春	
	安政	5	1858	2	18	夕	今村他門治、四畳半御席	不明	なをかなる	春	
	安政	5	1858	2	21	夕	西郷銀之進、一露軒御席	不明	あけわたる		
	安政	5	1858	4	10	夕	宇津木宗洗	不明	すみわたる		
	安政	5	1858	4	13	夕	三浦義太郎	不明	しらいとを	夏	
	安政	5	1858	12	16	夕	宇津木宗洗	不明	からの？		
	安政	6	1859	2	13	夕	椋原宗収	不明	このころは	春	
	安政	6	1859	9？	27	夕	牧尾亭	不明	あさゆふに		
	安政	6	1859	2	19	夕七時	青山亭、四畳半御席	不明	いつしかと	春	
	安政	6	1859	9	30	夕七時	椋原宗収亭、一露軒御席	不明	あきくるる	秋	
	安政	6	1859	10	10	夕七時	高岡亭、四畳半御席	不明	しつかなる		
	安政	7	1860	2	10	夕七時	青山亭、四畳半御席	不明	ちよふへき	賀	
古今茶湯集	享保	10	1725	11	13	不明	松平左近将監	利休文	不明		
	享保	11	1726	11	4	不明	近衛予楽院	後西院宸翰	みのうち茶		
	享保	12	1727	12	6	不明	久田宗也	不明	ちゃのゆとは	狂歌	
	享保	14	1729	1	7	午半	近衛予楽院	後小松院宸翰	とめわひぬ	春	
	宝暦	12	1762	1	24	不明	時習軒神谷松見	今日庵の歌	不明		
	宝暦	13	1763	9	12	不明	神谷松見・故時習軒追善	新枕茶入の歌	不明		
	安永	4	1775	5	18	午時	狩野宗朴	宗旦狂歌写	不明	狂歌	
	安永	9	1780	4	2	不明	小堀宗友	定家歌切	不明		
	安永	9	1780	4	8	不明	小堀宗友・伏見にて	定家歌切	不明		
	寛政	5	1793	11	19	正午	酒井牛眠	東山義政筆詩歌	不明		
	文化	1	1804	9	26	不明	三井三郎助	為明歌	おもひきや		
	文化	3	1806	8	19	名残	松平不昧・三畳台目	兼好和歌	不明		
	文化	7	1810	2	15	不明	紀州徳川家・数奇屋道安好	小倉色紙	こぬひとを	恋	◎
	文化	8	1811	8	26	名残	松平不昧・独楽庵	兼好和歌	不明	秋	
	文化	9	1812	10	8	不明	松平不昧・三畳台目	利休文	むさしあふみ		
	文化	11	1814	9	11	名残	松平不昧・清水茶屋閑雲	西山翁詠歌	不明	秋	
	文化	14	1817	2	9	不明	三井策兵衛	頓阿懐紙	不明	春	
	文政	5	1822	2	1	不明	土井利以	烏丸光広短冊	不明	春	

	文政	5	1822	3	21	不明	松平渓山	烏丸光広短冊	不明	春	
	文政	5	1822	8	2	不明	土井利以	細川玄旨短冊	不明	秋	
	文政	12	1829	5	8	不明	小堀梅之助・深川邸にて	良経筆	われみても	雑	
	文政	12	1829	9	18	不明	小堀梅之助・深川邸にて	細川玄旨懐紙	不明		
	文政	13	1830	2	26	不明	岡部四郎三郎	沢庵文	不明		
	天保	2	1831	10	14	不明	仙波太郎兵衛	利休半切文	不明		
	天保	5	1834	11	9	午時	野村宗阿	西行の絵賛	やまさとに	雑	
	天保	5	1834	11	13	午時	川合隼之助	基秋短冊	不明		
	天保	6	1835	2	16	午時	仙波太郎兵衛	烏丸光広連歌	はなをさし	春	
	天保	6	1835	11	2	不明	小堀梅之助・深川富吉町邸	富士の絵賛	やまはなし		
	天保	8	1837	5	3	午時	野村宗阿	季吟詠草	不明		
	天保	9	1838	9	4	午時	古筆了伴	元政短冊	不明	秋	
	天保	9	1838	9	8	午時	河合寸翁・真崎邸にて	兼好短冊	みのあきを	秋	
	天保	10	1839	10	7	正午	玄々斎千宗室	後陽成宸翰	つきのみや	恋	◎
	天保	13	1842	9	20	正午	野村宗阿	権十郎画賛	このしまも	秋	
	弘化	4	1847	4	25	正午	中田宗閑	中院通為詠草	不明		
	弘化	4	1847	8	14	正午	溝口直諒	佐川田昌俊短冊	不明	秋	
	弘化	5	1848	2	19	不明	脇坂安宅	定家歌切	不明		
	弘化	5	1848	2	26	不明	脇坂安宅	定家歌切	不明		
	嘉永	1	1848	5	1	午時	脇坂安宅・孤峯庵にて	冷泉為村自詠	不明		
	嘉永	2	1849	10	14～16	不明	溝口直諒・南囲	宗牧文	不明		
	嘉永	3	1850	3	20	不明	小堀隼人	宗甫色紙	不明		
	嘉永	3	1850	4	20	不明	脇坂安宅	太田道灌短冊	不明	夏	
	嘉永	3	1850	4	22	不明	竹腰蓬月	和歌三首懐紙	あけわたる	夏	
	嘉永	5	1852	1	13	不明	菅沼織部正	光広古歌色紙	不明		
	元治	2	1865	2	7	不明	山本宗雄	光広古歌色紙	不明		
	安政	2	1855	2	14	正午	福田謙斎・雲花堂	紹億筆竹の絵賛	くれたけの	雑	
	安政	2	1855	3	6	正午	前田玄庵・雲花堂	四辻公小色紙	きみかへん	賀	
	安政	4	1857	9	24	不明	吸江斎千宗左・不審庵	宗旦辞世	こくうめが		
	安政	5	1858	4	2	午半	菅沼遊鷗	沢庵文	不明		
	安政	6	1859	2	29	午後	菅沼遊鷗	沢庵文	不明		
	万延	1	1860	10	5	不明	久田宗与・半床庵	両筆和歌	うかうかと	狂歌	
	文久	1	1861	5	25	朝	深沢不晋	細川玄旨短冊	うえをくる		
	文久	3	1863	9	18	正午	山本宗雄・三畳	沢庵文	不明	狂歌	
	文久	3	1863	11	14	正午	前田竹涇・松滴軒	寂蓮懐紙	いはたかは		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
	慶応	1	1865	8	不明	不明	井上吉左衛門・四畳半の内床有三畳	遠州和歌	くれたけの	秋	
	慶応	2	1866	4	19	不明	上田誓一・六畳敷	沢庵懐紙	不明		
	慶応	2	1866	12	14	正午	前田竹涇・雲翠室	遠州贈答歌	不明		
	慶応	3	1867	12	8	晡時	前田竹涇・雲翠室	寂蓮懐紙	いはたかは		

d　句銘

e　中国故事銘

f　出所・季節銘

III　洒落銘、機智銘

IV　呼称銘

a　所持者による銘

b　墨跡・消息などに与えられた銘

氏は続いてそれぞれの銘の例を挙げつつ銘の特徴を述べ、分類を行っている。

歌銘については、「器物の景をイメージに抱きながら歌を典拠にしたものと、景とは関係なく伝来地や季節感などから和歌を根底におきながら命銘したものとがある[21]」という。そして歌銘は「小堀遠州によって飛躍的な展開をみせ、茶入をはじめ茶杓や茶碗などにも歌銘の世界を楽しむようになっ」たという[22]。

八木意知男氏の「歌銘の世界―茶歌道交渉史の一齣―」で氏は、「和歌文学が形骸化し、その精神を失うとされる近世期に、積極的にこれと交渉をもったのが歌銘の世界である。ここには生きた和歌文学受容の姿がある[23]」という。氏は歌を典拠とした茶道具を歌とともに示し、それについて解析を行っている。まず、歌の出典であるが、「古今・新古今等の集の歌が多いことは当然として、勅撰二十一代集の中から満遍なく採歌されていることが知れる」が、それは「茶人の和歌に対する深く幅広い教養を物語っている[24]」結果だという。そして掲出した一七七首の内、少なくとも三九首は恋歌であることを指摘している。さらに氏は、恋歌が多いことから次のような意見を述べている。

今日我々は茶道に対して、「わび」「さび」なる語と共通に、例の

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮（定家）

という歌によって、枯れたさびさびとした禅味ばかりが先行したイメージを抱きがちになる。しかしながら、こと歌銘の世界に見る限り、これは一部修正されなければならない。（九九頁）

また「歌銘は、感性を中心とする美意識に基づく場合と、出所伝来を伝えようとする歴史意識に基づく場合と、二通りの方法によって成立している[25]」ともいう。つまり、「見立て」による命銘意識と、出所伝来と結びつきそれを記録説明する歴史的命銘意識の二通りがあるというのである。そして、それらにふさわしい古歌がない場合は、新たに詠出されるが、それらの歌は「単に新しい歌ではなく、古歌を本歌取りしたものであり、典拠となり得る歌の性格がよく知られる[26]」という指摘を行っている。

次に名児耶明氏の「遠州の箱書と歌銘」について見てみよう。氏はここで小堀遠州が古歌から命銘したとされる三十四の茶道具を選び、その出典と傾向をさぐっている。そこで氏は、二つのことを指摘している。一つは、八木氏と同様に古今集と新古今集から歌が採られる事が多いが、他の勅撰集からも満遍なく採られていること。そして二つ目は部立において恋歌が多いということである。二点目の指摘について氏は次のように述べている。

> 茶道具と恋の歌とは縁遠いものという通説とは異なり、茶入の銘に関しては、意外と恋歌が多い。これが、遠州好みかどうかは知らないが、歌の選択に恋歌が例外となっていないのが事実である。(一五七頁)

これらの記述から、八木氏にしても名児耶氏にしても恋歌が茶道に縁遠いという先入観を持っておられたようであることがわかる。そしてそれは「通説」であるともいう。しかし、これは現在の我々が抱く茶道への先入観であって当時の人々には何ら不思議なことではなかったのではなかろうか。

念のため『茶道事典』と『図解茶道具事典』(雄山閣、平成八年一月)をもとに、歌銘が使われた茶道具を挙げたのが表2である。その結果、次のようなことがわかった。

(1) 歌の部立について

原典となった歌集においてどの部に属する歌かを探った結果、春:二一首、夏:一二首、秋:一七首、冬:九首、恋:四一首、雑:二五首、その他:二一首、不明:三〇首(計一七六首)であった。この内、不明のものを除いた一四六首の中に四季歌が四〇・四%、恋歌が実に二八・一%を占めている。『古今和歌集』で四季歌が占める割合が、三三・〇%、恋歌は三二・七%である。また『新古今和歌集』では四季歌が三五・六%、恋歌が二二・五%を占めている。これらの歌集と比較すると、四季歌が非常に多いこと、そして恋歌も『古今和歌集』には及ばないが、『新古今和歌集』よりはかなり多い割合であることがわかる。つまり、茶道具の銘は、四季と恋に重点がおかれていると言ってよい。

表 2　歌にちなんだ銘を持つ茶道具一覧

番号	銘	種類	本歌	出典	部立							命銘者
					春	夏	秋	冬	恋	雑	他	
1	青苔	茶杓	あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ	伊勢物語(七十八段)					●			小堀遠州
2	秋夜	中興名物	秋の夜の千代を一夜になぞらへて八千代し寝ばや飽く時のあらむ	伊勢物語(二十二段)					●			小堀遠州
3	浅茅肩衝	大名物	色かはる野辺の浅茅におく露を末葉にかけて秋風ぞふく	新後撰集			○					小堀遠州
4	朝寝髪	名物	朝寝髪吾はけづらじ美しき君が手枕触れてしものを	万葉集					●			小堀遠州
5	浅野肩衝	中興名物	いかにせむしのぶとすれど名にたてて浅野の雉子がかくれなき身を	新葉集					●			小堀遠州
6	朝日影	名物	千早ぶる神路の山の朝日かげ猶君が代にくもりあらすな	新千載集							○	小堀遠州
7	飛鳥川	中興名物	昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり	古今集				○				小堀遠州
8	荒籬	名物	故郷のしのゝ荒垣野分してむぐらのとぢめほころびにけり	不明								長田新月
9	雨宿芋の子	中興名物	何方へ秋のゆくらむわが宿に今宵ばかりはあま宿りせよ	詞花集			○					小堀遠州
10	有明	不明	又たぐひあらしの山のふもと寺すぎのいほりに有明の月	玉葉集			○					不明
11	池水伊羅保	名物	池水は天の川にやかよふらむ空なる月の底に見ゆるは	後拾遺集					●			不明
12	市場	不明	世の中は市のかりばのひとさわぎむらむらと見し跡方もなし	不明								小堀遠州
13	妹背山	名物	浅みどり霞わたれる絶間よりみれどもあかぬ妹背山かな	新勅撰集						○		小堀遠州
14	伊予簾	中興名物	逢ふ事はまばらに編める伊予簾いよいよ我を侘びさするかな	詞花集					●			小堀遠州
15	岩橋	花入	明けぬ間をたのむ一夜の契だに尚かけわぶる久米の岩橋	新続古今集					●			小堀遠州
16	岩浪	名物	きぶね川玉ちる瀬々の岩浪に氷をくだく秋の夜の月	千載集							○	不明
17	磐余野	中興名物	萩が花たれにか見せむ鶉なく磐余野のべの秋の夕ぐれ	続拾遺集			○					小堀遠州
18	埋火①	名物	契りあれば知らぬ深山のふし柴もたき木となりぬ閨の埋火	不明								不明
19	埋火②	茶杓	年暮るる有明の空の月影にほのかに残る夜半の埋火	壬二集				○				小堀遠州
20	泡沫	中興名物	思川たえず流るる水の泡のうたかた人にあはで消えめや	後撰集					●			大覚寺門跡
21	宇禰野	名物	あふみよりあさ立ちくればうねののに田鶴ぞ鳴くなる明けぬこの夜は	古今集							○	長田新月
22	卯花	名物	卯の花のさかりならねば山賤のかきねに誰かこころとめまし	続後拾遺集		○						小堀遠州
23	卯花墻	国宝	やまざとのうのはながきのなかつみちゆきふみわけしここちこそすれ	題林愚抄		○						片桐石州
24	相坂	中興名物	相坂の嵐の風は寒けれどゆくへしらねば侘びつつぞぬる	古今集						○		小堀遠州
25	岡辺	中興名物	松たてる岡辺に向ふ達磨との暮れ行く空をあはれとや見む	不明								小堀遠州
26	翁	中興名物	増かがみそこなる影に向ひゐて見る時にこそしらぬ翁にあふ心地すれ	拾遺集						○		小堀遠州
27	翁さび	不明	翁さび人なとがめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる	後撰集						○		不明
28	小塩井戸	名物	二葉より神をぞ頼むをしほ山我もあひおひの松の行く末	続千載集							○	小堀遠州
29	遅桜肩衝	大名物	夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしき哉	金葉集		○						足利義政
30	落穂	不明	打侘びて落穂ひろふと聞かませば我も田面に行かましものを	伊勢物語(五十八段)					●			不明
31	音羽山	中興名物	音羽山おとにききつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな	古今集					●			小堀遠州
32	女郎花①	朝鮮茶碗	女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたるやどに独りたてれば	古今集				○				小堀権十郎

33	女郎花②	朝鮮茶碗	女郎花今朝はすがたもまさるかな露の結べる玉かづらして	和歌一字抄				○				松平不昧公
34	思河①	中興名物	山吹の花にせかるる思河いろの千しほはしたに染めつつ	続後撰集	○							小堀遠州
35	思河②	中興名物	思河まれなる中に流るなりこれにもわたせ鵲の橋	壬二集					●			小堀遠州
36	面影①	中興名物	人はいさ思ひやすらむ玉かつら面影にのみいとど見えつつ	伊勢物語(二十一段)					●			小堀遠州
37	面影②	茶杓	おもかげのかはりざりせばいかばかりかはりてだにもをしき命を	不明								小堀篷露
38	鏡河	中興名物	鏡河かげ見る月に底澄みて沈むみくづのはづかしきかな	夫木集						○		小堀遠州
39	鏡山	名物	立帰り又こそ見つれ鏡山つれなき老のかげをのこして	新続古今集						○		小堀遠州
40	垣根	中興名物	咲きてこそ人に訪はれる夕顔の花はいやしき垣根なれども	題林愚抄		○						不明
41	香具山	名物	春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山	新古今集		○						不明
42	筧	中興名物	すまば又住まれこそせめ山里はかけひの水のあるにまかせて	新後撰集						○		小堀遠州
43	亀尾	中興名物	亀の尾の山の岩根をとめて落つる滝のしら玉千代の数かも	古今集							○	不明
44	唐琴	名物	なみの音けさ唐琴にきこゆるは春のしらべやあらたまるらむ	古今集							○	不明
45	蛙肩衝	名物	折にあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕ぐれのこゑ	新古今集						○		小堀遠州
46	河菜草	名物	うばたまの夢になにかはなぐさまむうつつにだにもあかぬ心を	古今集							○	不明
47	寒月	名物	山のはにそれとも見へず埋れて雪にかたぶく有明の月	続拾遺集				○				不明
48	雁取	不明	思ひきや大鷹よりも上なれややき茶碗めが雁取らんとは	不明								千利休
49	雲井	中興名物	いはねども我が限りなき心をば雲ゐに遠き人も知らなむ	後撰集					●			小堀遠州
50	呉竹	中興名物	風ならでとふ人もなき友なれや身をかくしすむ谷のくれたけ	壬二集						○		松平雅良
51	黄河肩衝	名物	千代のあきのなかはにすめる河の名ようすきもみちの色をかるらん	不明								不明
52	木枯	中興名物	飛鳥川瀬々に浪よるくれなゐやかつらぎ山のこがらしのかぜ	新古今集			○					小堀遠州
53	国師文琳	名物	薄く濃き野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え	新古今集	○							後陽成天皇
54	苔清水	名物	とくとくと落つる岩間の苔清水くみほす程もなきすまいかな	不明								不明
55	児手柏	名物	奈良山の児手柏のふたおもにかにもかくにもこびひとがとも	万葉集							○	不明
56	木の本①	中興名物	花の春紅葉の秋にあらぬまもただには見えぬ木の本ぞこれ	長秋詠草						○		小堀遠州
57	木の本②	中興名物	山桜花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむら消え	新古今集	○							小堀遠州
58	此世香炉	名物	あらざらむこのよのほかの思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな	後拾遺集					●			不明
59	笹枕	名物	ささ枕いく野の末に結びきぬひとよばかりの露のちぎりを	続千載集							○	不明
60	五月雨	茶杓	星ひとつ見つけたるよのうれしさは月にもまさる五月雨の空	不明								不明
61	猿若	中興名物	とどめざるわかれよ君が袖のうちに我がたましひを入れてこそやれ	不明								小堀遠州
62	三夕	茶杓	寂蓮の槇立山、西行の鴫立沢、定家の浦苫屋のいわゆる「三夕の歌」	新古今集			○					不明
63	志賀	中興名物	見せばやな志賀の唐崎ふもとなるながらの山の春のけしきを	新古今集						○		小堀遠州
64	時雨	名物	長き夜のねざめの窓におとづるるしぐれは老の友にぞありける	玉葉集				○				小堀政之
65	下枝	名物	すみよしの松のしづえの藤のはないくとせ浪をかけて咲くらむ	続拾遺集	○							不明
66	柴の戸	名物	柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるる山辺なるらむ	新古今集				○				小堀遠州
67	清水	中興名物	道の辺に清水ながるる柳かげしばしとてこそ立止まりつれ	新古今集		○						小堀遠州

番号	銘	種類	本歌	出典	部立							命銘者
					春	夏	秋	冬	恋	雑	他	
68	霜夜文琳	中興名物	さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる	古今集							○	小堀遠州
69	白菊①	名物	類ありと誰かはいはむ末匂ふ秋よりのちの白菊の花	和歌一字抄			○					不明
70	白菊②	茶杓	心あてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花	古今集			○					不明
71	白雲	中興名物	よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山のみねの白雲	新古今集					●			小堀遠州
72	白露	中興名物	よそへてぞ見るべかりける白露の契りか置きし朝顔の花	源氏物語					●			不明
73	白浪	中興名物	興津風みぎはによせぬ白浪やかげをひたせる空のうきくも	不明								不明
74	白山	茶杓	ふりにけん友とやこれをながむらん雪つもりしにこしのしら山	不明								金森宗和
75	鈴鹿山	不明	えぞ過ぎぬこれや鈴鹿の関ならむふり捨て難き花之陰かな	新後撰集	○							不明
76	雪似白雲	茶杓	峯の雪さらにふもとのここちしてくもをかさぬるこしの山々	秋篠月清集				○				金森宗和
77	染川	中興名物	染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ	伊勢物語(六十一段)					●			小堀遠州
78	即色	中興名物	空しきか色なき色は誰かみむよし見む人も見ぬ世ならずは	新明題和歌集						○		遠州・江月和尚
79	田面	不明	打侘びて落穂ひろふと聞かませば我も田面に行かましものを	伊勢物語(五十八段)					●			小堀遠州
80	滝川	名物	瀬を早み岩にせかるる滝川の割れても末にあはむとぞ思ふ	詞花集					●			不明
81	滝津	名物	山深み滝津はや川音すみてこころの塵に松風ぞ吹く	不明								不明
82	田子浦	名物	田子の浦なみの底ゐやしろたへの気色は世にも不二とこそ見む	不明								不明
83	谷陰	名物	谷陰のこけの下なる玉柏人に知られぬ年ぞ経にける	隣女集					●			不明
84	谷川	中興名物	流れても浮世に出しときくなればかげもとどめじ谷川の水	不明								小堀遠州
85	玉柏	中興名物	難波江の藻にうづもるる玉柏あらはれてだに人をこひばや	千載集					●			小堀遠州
86	玉川①	名物	駒とめてなほ水かはむ山ぶきの花の露そふ井出の玉川	新古今集	○							松平不昧公
87	玉川②	中興名物	いまぞ見るのちの玉川たづねきていろなる浪の秋の夕ぐれ	碧玉集			○					小堀遠州
88	鐶	不明	それながら昔にもあらぬ秋風にいとどながめをしづのをだまき	新古今集			○					不明
89	玉津島①	名物	和歌の浦に又もひろはば玉津島おなじ光の数にもらすな	続千載集						○		小堀遠州
90	玉津島②	中興名物	過ぎがてにみれども飽かぬ玉津島むべこそ神の恵とめけれ	玉葉集						○		小堀遠州
91	玉緒	茶杓	初春のはつねのけふのたまはばき手にとるからにゆらぐ玉緒	万葉集							○	小堀遠州
92	玉水	名物	つくづくと春のながめの寂しきはしのぶに伝ふ軒の玉水	新古今集	○							小堀遠州
93	玉村	名物	うつろはで庭おもしろき初雪におなじ色なる玉村のさと	夫木集						○		不明
94	玉藻	中興名物	難波江の藻に埋るる玉がしはあらはれてだに人をこひばや	千載集					●			小堀遠州
95	玉柳①	名物	浅みどり露おきみだる春雨にしたさへ光る玉柳かな	拾遺愚草	○							小堀遠州
96	玉柳②	中興名物	たま柳にほふともなき枝なれどみどりの色のなつかしきかな	玉葉集	○							不明
97	千草	名物	ともかくも人にはいはで野辺にきて千草の花をひとり見る哉	不明								松平不昧公
98	筑摩肩衝	大名物	近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の数見む	伊勢物語(百二十段)					●			不明
99	付藻茄子	大名物	百年に一とせ足らぬ九十九髪我を恋ふらしおもかげに見ゆ	伊勢物語(六十三段)					●			不明
100	筒井筒	名物	筒井つつ井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに	伊勢物語(二十三段)					●			不明

101	釣舟	中興名物	わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよあまの釣舟	古今集							○	小堀遠州
102	遠山	名物	晴れ渡る朝けの雲の下毎に初雪白し比良の遠山	夫木集						○		不明
103	常盤	中興名物	常盤なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり	古今集	○							小堀遠州
104	常夏	中興名物	惜しむべき隣も知らぬ庭の面やひとりのための常夏の花	雪玉集		○						小堀遠州
105	鳥羽田	中興名物	友雀ひきいておりぬ山城の鳥羽田の面に落穂ひろふと	夫木集						○		小堀遠州
106	苫屋文琳	大名物	見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮	新古今集			○					小堀遠州
107	ともかくも	茶杓	ともかくも人にまかせてまげられる茶杓もへらもやぶのかき竹	不明								小堀遠州
108	中路大海	不明	いその上ふるのなか道中々に見ずば恋しと思はましやは	古今集					●			不明
109	中山肩衝	大名物	年たけて又越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山	新古今集							○	細川三斎
110	夏山	不明	夏山に青葉交りの遅桜あらはれ見ゆるふたつ三つ四つ	不明								小堀遠州
111	楢柴肩衝	大名物	御狩する狩場の小野の楢柴の汝はまさらず恋こそまされ	万葉集					●			不明
112	布引	中興名物	音にのみききしはことの数ならで名よりも高き布引の滝	千載集						○		不明
113	野中	名物	おもはくば野中にとては植おかじ昔は人の軒のたちばな	慕景集		○						小堀遠州
114	橋姫	中興名物	さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらむ宇治の橋姫	古今集					●			小堀遠州
115	走井芋の子	中興名物	はしり井の程をしらばや相坂の関引きこゆる夕かげの駒	拾遺集			○					小堀遠州
116	初花	大名物	くれなゐの初花染めの色深く思いし心我れ忘れめや	古今集					●			足利義政
117	花摺	名物	露分くる袖にぞ移るむらさきの色濃き野辺の萩が花ずり	新千載集			○					不明
118	花橘	不明	昔をば花橘のなかりせば何につけてか思ひいでまし	後拾遺集		○						小堀遠州
119	春雨	中興名物	広沢の池の堤の柳かげみどりも深く春雨ぞ降る	風雅集	○							小堀遠州
120	常陸肩衝	名物	東路の果なる常陸帯のかごと計りもあはぬとぞ思ふ	新古今集					●			不明
121	一本	中興名物	いかなればこのひともとに時雨けむ山にさきだつ庭の紅葉は	不明								小堀宗慶
122	響の灘	中興名物	憂き事に胸のみさわぐ響にはひびきの灘も障らざりけり	源氏物語					●			不明
123	広沢	中興名物	広沢の池の面に身をなして見る人もなき秋の夜の月	不明								小堀遠州
124	吹上文琳	中興名物	秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか	古今集			○					小堀遠州
125	不二	名物	時知らぬ五月の頃の色を見よ今も昔も山はふじのね	不明								小堀遠州
126	藤浪	中興名物	かくてこそ見まくほしけれ万代をかけて忍べる藤浪の花	新古今集	○							小堀遠州
127	藤袴	名物	同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも	源氏物語					●			不明
128	二見	中興名物	玉くしげ二見の浦の貝しげみまきゑに見ゆる松のむらだち	金葉集						○		小堀遠州
129	故郷肩衝	中興名物	おもひやれ生田の杜の秋風に故郷こふる夜半のねざめを	続古今集							○	小堀遠州
130	蛍	中興名物	たぐひなき恵も道の光をもここにあつめて見る蛍かな	不明								小堀宗中
131	真薦	名物	五月雨に沼の石垣水こえていづれか菖蒲ひきぞわづらふ	源平盛衰記							○	千利休
132	正木	中興名物	深山にはあられふるらし外山なる正木のかつら色づきにけり	古今集							○	小堀遠州
133	増鏡①	中興名物	増鏡手にとりもちて朝な朝なみれども君にあく時ぞなき	拾遺集					●			小堀遠州
134	増鏡②	中興名物	増鏡そこなる影に向ひゐて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心地すれ	拾遺集						○		小堀遠州
135	松島	茶杓	たちかへりまたもきて見む松島やをじまの苫や浪にあらすな	新古今集							○	小堀遠州

番号	銘	種類	本歌	出典	部立							命銘者
					春	夏	秋	冬	恋	雑	他	
136	澪標	中興名物	身をつくし恋ふるしるしにここ迄もめぐり逢ひけるえには深しな	源氏物語					●			小堀遠州
137	澪標茄子	大名物	五月雨はつたの細江の澪標みえぬも深きしるしなりけり	続後撰集		○						不明
138	三笠山	中興名物	三笠山雲居遥かに見ゆれども真如のつきはここにすむかな	風雅集							○	不明
139	皆の川①	中興名物	行く春の流れて早き皆の川霞の淵にくもる月影	拾遺愚草	○							小堀遠州
140	皆の川②	名物	筑波根の峯よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる	後撰集					●			不明
141	蓑虫	名物	ふるさとの板間にかかる蓑虫の漏りける雨を知らせかほなる	秋篠月清集							○	不明
142	御裳濯川	名物	立返り又もみまくのほしきかなみもすそ川の瀬々の白波	新古今集							○	小堀遠州
143	宮城野	中興名物	様々に心ぞとまるみやぎ野の花のいろいろ虫のこゑごゑ	千載集			○					小堀遠州
144	深山木	不明	閑居せば四条五条の橋のうゑ往き来の人を深山木にして	不明								不明
145	深山木花入	花入	深山木のその梢とも見えざりし桜は花にあらはれにけり	詞花集	○							小堀遠州
146	三輪山	中興名物	三輪の山いかに待ちみむ年経とも尋ぬる人もあらじと思へば	古今集					●			小堀遠州
147	葎	名物	とふ人もなき宿なれどくる春はやへ葎にも障らざりけり	新勅撰集	○							不明
148	村雨	中興名物	村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮	新古今集			○					不明
149	藻塩	中興名物	わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ	古今集						○		不明
150	紅葉	不明	嵐吹く大江の山のもみぢ葉は生野に織れる錦なるらむ	夫木集			○					不明
151	藻塩文琳	中興名物	わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ	古今集						○		小堀遠州
152	八重桜大海①	名物	いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな	詞花集	○							不明
153	八重桜大海②	中興名物	いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな	詞花集	○							小堀遠州
154	八雲肩衝	名物	八雲たつ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるその八重垣を	古事記					●			小堀遠州
155	宿の梅	中興名物	我が宿の梅の立枝や見えつらむ思の外の君がきませる	拾遺集	○							不明
156	破衣	不明	やれ衣見くるしけれど是一つあか茶わむとはいふもことはり	不明								松平不昧公
157	破被	中興名物	むらさきやあけの衣もうらめしくやぶれぶすまにまつかぜの音	不明								不明
158	山崔	中興名物	籠のうちもなほうらやまし山がらのみのほどかくす夕がほのやど	玉葉集						○		不明
159	山桜①	中興名物	山高み人もすさめぬ桜花いたくな侘びそ我見はやさむ	古今集	○							小堀遠州
160	山桜②	名物	咲く時は物の数にはあらねども散るにはもれぬ山桜かな	不明								小堀遠州
161	山桜大海	大名物	遅かりし恨も今は山桜花なき頃の花に向ひて	為尹千首		○						不明
162	山里文琳	名物	山里にひとりながめて思ふかな世にある人のこころづよさよ	新古今集						○		加藤風庵
163	山の井肩衝	大名物	あさくともよしやまた汲む人もなし我に事たる山の井の水	不明								不明
164	山端	不明	五月雨は晴れむとやするや山の端にかかれる雲のうすくなりゆく	玉葉集		○						不明
165	夕紅葉	不明	恋しさを訪ふ人もなき山里の錦を語る夕紅葉かな	不明								不明
166	夕端山	花瓶	風かほる雲に宿とふゆふはやま花こそ春のとまりなりけれ	続後拾遺集	○							不明
167	雪の下折	茶杓	明やらぬね覚めの床に聞ゆなるまがきの竹の雪の下折	新古今集				○				千宗旦
168	雪柳春慶	中興名物	かつらぎやはるのみゆきのふる柳よそめはおつる滝の白糸	不明								小堀遠州

169吉野山	名物	春はまづ花かとぞ見る吉野山麓のまより落つる滝津瀬	不明							不明	
170淀肩衝	名物	うちわたす遠方人も春とてや淀の野沢に若菜つむらん	新続古今集		○					不明	
171蓬生	中興名物	尋ねても我こそ訪はめ道もなく深きよもぎのもとのこころを	源氏物語				●			県宗知	
172可中	中興名物	わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ	古今集					○		小堀遠州	
173鷲の山	不明	折知りて見はやす人やまれならむ鷲のみ山の花の一えだ	玉葉集						○	不明	
174忘水①	名物	住吉の浅沢小野の忘水たえだえならで逢ふよしもがな	詞花集				●			不明	
175忘水②	中興名物	人もみなむすぶ身なれどわすれ水我のみあかぬ心地こそすれ	風雅集				●			阿部忠秋	
176忘水③	中興名物	人もみなむすぶ身なれどわすれ水我のみあかぬ心地こそすれ	風雅集				●			不明	

（2） 命銘者について

これは、遠州が約半数の四六・六％を占めている。後に遠州に仮託されたものもあるかもしれないが、ここではそれを問題としているわけではないので一つ一つの道具についての詳細な検討は後日の検討課題としておきたい。ここでは、単に遠州命銘とされる茶道具が約半数を占めている事だけを確認できれば良い。そして、遠州以外の茶道具の命銘者では、千家流の茶人よりも大名系（遠州流、石州流、不昧流）などの茶人が多いことも指摘できる。

次に命銘者として約半数を占めていた遠州命銘の茶道具について見ておく。表2の中から小堀遠州が命銘したとされるものを取り出し、それを表3とした。

表3よりわかったことを以下に示す。

（1） 歌の部立について

原典の歌集での部立は、春：一一首、夏：五首、秋：九首、冬：三首、恋：二〇首、雑一六首、その他：八首、不明：一〇首であった。

部立不明歌一〇首を除いた七二首のうち、四季歌の占める割合は三八・九％、恋歌の占める割合は、二七・八％である。これらを見ても四季歌と恋歌に重点がおかれていることがわかるであろう。

（2） 出典について

原典となった歌集及び物語としては、『古今和歌集』が一三首、『新古今和歌集』が一二首、『伊勢物語』が五首と、この三作品でほぼ半数を占めている（四一・七％）。『古今和歌集』、『新古今和歌集』の重視と、『伊勢物語』への傾倒がここではみられるのである。

（3） 歌枕について

歌枕を詠み込んだ歌は、全部で三三首あるが、これの内訳は大和：九首、近江：八首、山城：五首、摂津：五首、伊勢：二首、陸奥：二首、駿河、筑前、紀伊、常陸：各一首であった。ここでは、大和と近江への傾倒がみられる。彼は天正七年（一五七九）近江国坂

表 3　小堀遠州命銘の茶器一覧

銘	種類	本歌	出典	部立						
				春	夏	秋	冬	恋	雑	他
青苔	茶杓	あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ	伊勢物語（七十八段）					●		
秋夜	中興名物	秋の夜の千代を一夜になぞらへて八千代し寝ばや飽く時のあらむ	伊勢物語（二十二段）					●		
浅茅肩衝	大名物	色かはる野辺の浅茅におく露を末葉にかけて秋風ぞふく	新後撰集			○				
朝寝髪	名物	朝寝髪吾はけづらじ美しき君が手枕触れてしものを	万葉集					●		
浅野肩衝	中興名物	いかにせむしのぶとすれど名にたてて浅野の雉子がかくれなき身を	新葉集					●		
朝日影	名物	千早ぶる神路の山の朝日かげ猶君が代にくもりあらすな	新千載集							○
飛鳥川	中興名物	昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり	古今集				○			
雨宿芋の子	中興名物	何方へ秋のゆくらむわが宿に今宵ばかりはあま宿りせよ	詞花集			○				
市場	不明	世の中は市のかりばのひとさわぎむらむらと見し跡方もなし	不明							
妹背山	名物	浅みどり霞わたれる絶間よりみれどもあかぬ妹背山かな	新勅撰集						○	
伊予簾	中興名物	逢ふ事はまばらに編める伊予簾いよいよ我を侘びさするかな	詞花集					●		
岩橋	花入	明けぬ間をたのむ一夜の契だに尚かけわぶる久米の岩橋	新続古今集					●		
磐余野	中興名物	萩が花たれにか見せむ鶉なく磐余野のべの秋の夕ぐれ	続拾遺集			○				
埋火②	茶杓	年暮るる有明の空の月影にほのかに残る夜半の埋火	壬二集				○			
卯花	名物	卯の花のさかりならねば山賤のかきねに誰かこころとめまし	続後拾遺集		○					
相坂	中興名物	相坂の嵐の風は寒けれどゆくへしらねば侘びつつぞぬる	古今集						○	
岡辺	中興名物	松たてる岡辺に向ふ達磨との暮れ行く空をあはれとや見む	不明							
翁	中興名物	増かがみそこなる影に向ひゐて見る時にこそしらぬ翁にあふ心地すれ	拾遺集						○	
小塩井戸	名物	二葉より神をぞ頼むをしほ山我もあひおひの松の行く末	続千載集							○
音羽山	中興名物	音羽山おとにききつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな	古今集					●		
思河①	中興名物	山吹の花にせかるる思河いろの千しほはしたに染めつつ	続後撰集	○						
思河②	中興名物	思河まれなる中に流るなりこれにもわたせ鵲の橋	壬二集					●		
面影①	中興名物	人はいさ思ひやすらむ玉かつら面影にのみいとど見えつつ	伊勢物語（二十一段）					●		
鏡河	中興名物	鏡河かげ見る月に底澄みて沈むみくづのはづかしきかな	夫木集						○	
鏡山	名物	立帰り又こそ見つれ鏡山つれなき老のかげをのこして	新続古今集						○	
筧	中興名物	すまば又住まれこそせめ山里はかけひの水のあるにまかせて	新後撰集						○	
蛙肩衝	名物	折にあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕ぐれのこゑ	新古今集						○	
雲井	中興名物	いはねども我が限りなき心をば雲ゐに遠き人も知らなむ	後撰集					●		
木枯	中興名物	飛鳥川瀬々に浪よるくれなゐやかつらぎ山のこがらしのかぜ	新古今集			○				
木の本①	中興名物	花の春紅葉の秋にあらぬまもただには見えぬ木の本ぞこれ	長秋詠草						○	
木の本②	中興名物	山桜花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむら消え	新古今集	○						
猿若	中興名物	とどめざるわかれよ君が袖のうちに我がたましひを入れてこそやれ	不明							

志賀	中興名物	見せばやな志賀の唐崎ふもとなるながらの山の春のけしきを	新古今集						○	
柴の戸	名物	柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるる山辺なるらむ	新古今集				○			
清水	中興名物	道の辺に清水ながるる柳かげしばしとてこそ立止まりつれ	新古今集		○					
霜夜文琳	中興名物	さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる	古今集							○
白雲	中興名物	よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山のみねの白雲	新古今集					●		
染川	中興名物	染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ	伊勢物語（六十一段）					●		
即色	中興名物	空しきか色なき色は誰かみむよし見む人も見ぬ世ならずは	新明題和歌集						○	
田面	不明	打侘びて落穂ひろふと聞かませば我も田面に行かましものを	伊勢物語（五十八段）					●		
谷川	中興名物	流れても浮世に出しときくなればかげもとどめじ谷川の水	不明							
玉柏	中興名物	難波江の藻にうづもるる玉柏あらはれてだに人をこひばや	千載集					●		
玉川②	中興名物	いまぞ見るのちの玉川たづねきていろなる浪の秋の夕ぐれ	碧玉集			○				
玉津島①	名物	和歌の浦に又もひろはば玉津島おなじ光の数にもらすな	新千載集						○	
玉津島②	中興名物	過ぎがてにみれども飽かぬ玉津島むべこそ神の恵とめけれ	玉葉集						○	
玉緒	茶杓	初春のはつねのけふのたまはばき手にとるからにゆらぐ玉緒	万葉集							○
玉水	名物	つくづくと春のながめの寂しきはしのぶに伝ふ軒の玉水	新古今集	○						
玉藻	中興名物	難波江の藻に埋るる玉がしはあらはれてだに人をこひばや	千載集					●		
玉柳①	名物	浅みどり露おきみだる春雨にしたさへ光る玉柳かな	拾遺愚草	○						
釣舟	中興名物	わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよあまの釣舟	古今集							○
常盤	中興名物	常盤なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり	古今集	○						
常夏	中興名物	惜しむべき隣も知らぬ庭の面やひとりのための常夏の花	雪玉集		○					
鳥羽田	中興名物	友雀ひきいてをりぬ山城の鳥羽田の面に落穂ひろふと	夫木集						○	
苫屋文琳	大名物	見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮	新古今集			○				
ともかくも	茶杓	ともかくも人にまかせてまげられる茶杓もへらもやぶのかき竹	不明							
夏山	不明	夏山に青葉交りの遅桜あらはれ見ゆるふたつ三つ四つ	不明							
野中	名物	おもはくば野中にとては植おかじ昔は人の軒のたちばな	慕景集		○					
橋姫	中興名物	さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらむ宇治の橋姫	古今集					●		
走井芋の子	中興名物	はしり井の程をしらばや相坂の関引きこゆる夕かげの駒	拾遺集			○				
花橘	不明	昔をば花橘のなかりせば何につけてか思ひいでまし	後拾遺集		○					
春雨	中興名物	広沢の池の堤の柳かげみどりも深く春雨ぞ降る	風雅集	○						
広沢	中興名物	広沢の池の面に身をなして見る人もなき秋の夜の月	不明							
吹上文琳	中興名物	秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか	古今集			○				
不二	名物	時知らぬ五月の頃の色を見よ今も昔も山はふじのね	不明							
藤浪	中興名物	かくてこそ見まくほしけれ万代をかけて忍べる藤浪の花	新古今集	○						
二見	中興名物	玉くしげ二見の浦の貝しげみまきゑに見ゆる松のむらだち	金葉集						○	
故郷肩衝	中興名物	おもひやれ生田の杜の秋風に故郷こふる夜半のねざめを	続古今集							○

銘	種類	本歌	出典	部立						
				春	夏	秋	冬	恋	雑	他
正木	中興名物	深山にはあられふるらし外山なる正木のかつら色づきにけり	古今集							○
増鏡①	中興名物	増鏡手にとりもちて朝な朝なみれども君にあく時ぞなき	拾遺集					●		
増鏡②	中興名物	増鏡そこなる影に向ひゐて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心地すれ	拾遺集						○	
松島	茶杓	たちかへりまたもきて見む松島やをじまの苫や浪にあらすな	新古今集							○
澪標	中興名物	身をつくし恋ふるしるしにここ迄もめぐり逢ひけるえには深しな	源氏物語					●		
皆の川①	中興名物	行く春の流れて早き皆の川霞の淵にくもる月影	拾遺愚草	○						
御裳濯川	名物	立返り又もみまくのほしきかなみもすそ川の瀬々の白波	新古今集							○
宮城野	中興名物	様々に心ぞとまるみやぎ野の花のいろいろ虫のこゑごゑ	千載集			○				
深山木花入	花入	深山木のその梢とも見えざりし桜は花にあらはれにけり	詞花集	○						
三輪山	中興名物	三輪の山いかに待ちみむ年経とも尋ぬる人もあらじと思へば	古今集					●		
藻塩文琳	中興名物	わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ	古今集						○	
八重桜大海②	中興名物	いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな	詞花集	○						
八雲肩衝	名物	八雲たつ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるその八重垣を	古事記					●		
山桜①	中興名物	山高み人もすさめぬ桜花いたくな侘びそ我見はやさむ	古今集	○						
山桜②	名物	咲く時は物の数にはあらねども散るにはもれぬ山桜かな	不明							
雪柳春慶	中興名物	かつらぎやはるのみゆきのふる柳よそめはおつる滝の白糸	不明							
可中	中興名物	わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ	古今集						○	

田郡小堀村で生れ、大和にも度々やってきている。また、彼は元和七年に『遠江守政一紀行』（塙保己一編『続群書類従』第十八輯下所収）において東国への旅をしているが、この紀行文は『伊勢物語』を意識して書かれていることが明白である。つまり、彼は実際に目に浮かぶ風景（歌枕）を思い起こしながら銘をつけたのではないだろうか。勿論すべてではないが、その多くを自分の知っている歌枕が使われている歌を選んでつけた可能性がある。

ここまで見てきたように、歌銘には四季と恋に重点が置かれている事、そしてその大半が遠州によって名付けられたものであること、また使用された歌には遠州が実際に見た歌枕の風景が意識的に取り込まれている可能性があること、などがわかった。

八木氏や名児耶氏の言われるごとく、確かに恋歌が多いことは明白である。しかし、これは小堀遠州によって命銘されたものであり、遠州にとっては何ら不自然な選択ではなかったのである。

では、遠州の茶会において茶道具の銘は何らかの役割を果たしていたのであろうか、といった疑問が残る。約半数の茶道具の銘をつけたとされる彼が、自分の催した茶会で銘のある茶道具を何らかの

意味をもたせて使用した可能性は十分にある。

表4、表5は遠州の茶会記を一覧表にしたものである。[27] 遠州は主に茶入に銘のある道具を用いている。そしてその使用頻度は、後年になるほど高くなる。これは単に初期の記載者が銘を書かなかった可能性もあるが、それよりも後年になるほど掛物ではなく、茶道具の銘により茶会のテーマをほのかに提示するといった方法に思い至ったということも考えられる。表にした三三三回の茶会において、遠州が使用した銘のある茶道具（そのほとんどが茶入なので茶入に限る）とその使用回数を以下に挙げる。

〈銘〉　〈使用回数（回）〉

「在中庵」：　四〇
◎「釣舟」：　四
「大江」：　一
◎「相坂」：　一三
「梓弓」：　一
「生野」：　五
「畠山」：　三
◎「夏山」：　二
「小川」：　四
◎「飛鳥川」：　六三
「さむしろ」：　二
●「伊予簾」：　一
「面壁」：　五
「大野」：　一
●「玉柏」：　三
◎「可中」：　一
「凡」：　一五
「野田」：　二一

この内、歌銘には◎を、そしてその本歌が恋歌のものを●とした。この内、歌銘の茶入を使用した茶会だけを挙げると、「釣舟」四回、「相坂」一三回、「夏山」二回、「飛鳥川」六三回、「伊予簾」一回、「玉柏」三回、「可中」一回、である。圧倒的に「飛鳥川」の使用頻度が高いことがわかる。このことから遠州が如何にこの茶入を気に入っていたかがわかる。

ところで、これらの歌銘茶入の内、「夏山」を用いた茶会について宮嶋幸子氏は「テクストとしての茶会―銘のはたらき」（「美学・芸術学」第十三号、同志社大学文学部美学・芸術学研究所、平成十年三月）によって銘のもつ意味の解読を試みている。氏は寛永十年（一六三三）五月二十六日朝の茶会において、「夏山」が使用された意味について、夏の季節を味わうことを読み取るのも可能であるが、それよりも「器物を賞玩すること」がテーマであったのではないかと述べている。なぜならこの「夏山」という茶入が「夏山に青葉交

表 4　小堀遠州茶会記（客組）

元号	年	西暦	月	日	時刻	客 1	客 2	客 3	客 4	客 5	客 6	客 7	客 8
慶長	4	1599	2	24	朝	大かや道か	こや宗有	久好	こおや四郎左衛門				
	6	1601	12	21	朝	最福院	久好	関才次					
寛永	2	1625	8	26	朝	松平筑前	寿広	村井不及					
	2	1625	8	26	晩	横山式部	浅野将監	桜井段助	八幡牛斎				
	2	1625	8	28	朝	横山山城	松平伯耆	神屋信濃	横山右近				
	2	1625	8	29	朝	土井大炊頭利勝	松平衛門	伊丹喜之介	正（笑）雲				
	2	1625	9	2	朝	青山大蔵少輔(幸成)	板倉周防守重宗	岡田兵部	永井信濃守尚政	茶屋四郎次郎			
	2	1625	9	3	朝	酒井雅楽	安藤対馬守重信	永井右近大夫尚征	北見五郎左衛門				
	2	1625	9	3	晩	本多安房守重政	坂井寿庵	橘屋宗玄					
	2	1625	9	4	朝	丹波	神尾刑部	加藤伊織	向井将監忠勝	高木九兵衛			
	2	1625	9	5	朝	佐竹右京大夫	森川金右衛門氏信	島田清左衛門	久貝忠三郎				
	2	1625	9	5	昼	久世三左衛門	坂辺三郎兵衛	本多太郎左衛門	加藤喜助				
	2	1625	9	5	晩	水野監物忠善	井上主計頭正就	板倉周防守重宗	休閑				
	2	1625	9	11	朝	大久保六右衛門	佐野主馬	竹村丹後	山川庄兵衛	五味金右衛門豊直			
	2	1625	9	13	朝	浅野采女	松原伯耆	朝香左馬	宇治道二				
	2	1625	9	13	晩	伊丹喜之介	佐野主馬	小野宗左衛門貞則					
	2	1625	9	14	朝	尾張中納言	竹越山城	瀧川豊前	成瀬隼人正正虎				
	2	1625	9	14	晩	有馬出雲	次沼主殿	秋田次郎九郎	松平掃部	神尾宮内少輔守勝			
	2	1625	9	15	朝	北見半三郎	本多下総守俊次	太田采女					
	2	1625	9	15	晩	片桐出雲守孝利	本多大隅守	日根野織部正吉明					
	2	1625	9	16	晩	中山勘解由直定	花井右衛門	牧野清兵衛	日下五郎八	渡辺平四郎			
	2	1625	9	17	晩	九鬼長門	阿部修理	竹中筑後					
	2	1625	9	21	晩	松平下総守忠明	乗光院（浄光院か）	数馬(藤堂・多羅尾光雅か)					
	2	1625	9	22	朝	近衛信尋	藤堂高虎	三宅亡羊					
	2	1625	9	22	晩	竹中采女正正重	花弥左衛門	檜村孫七郎					
	2	1625	9	23	朝	葉山左近	佐久間河内	桑山内匠（桑山宗仙か）	道尤老（山上道七か）				
	3	1626	10	15	朝	江月和尚	堀江後守	堀式部少輔直之					
	3	1626	11	15	朝	近衛信尋	三宅亡羊	金森宗和	木瀬吉十郎	式部卿			
	3	1626	11	21	晩	島田越前（越中）	久貝因幡	北見若狭	末吉孫左衛門				
	4	1627	11	6	朝	薩摩中納言	島津下野	(梨) 原宗顕	池ノ坊				
	4	1627	11	8	朝	江月和尚	瀧本坊	植村出羽守家政	小堀九郎兵衛	伊藤内膳	ぬし道志		
	4	1627	11	17	朝	上林峯順	黒川兵庫	西宗真	星野宗以	タヤ宗勺			
	4	1627	11	19	朝	間宮三郎右衛門	上林味卜	藤村味入	上林吉兵衛	上林竹庵			

	4	1627	11	20	昼	本阿弥二郎三郎	後藤七郎兵衛	後藤勘兵衛	橘屋宗玄				
	4	1627	11	21	昼	村井不及	三条ノ宗白	三条ノ道味	ぬし道志	大塚屋卜斎			
	4	1627	11	22	朝	島田越前	小浜民部少輔光孝	末吉孫左衛門	平野藤四郎	高西夕雲	江月和尚		
	4	1627	11	26	朝	松平下総守忠明	東ノ坊	つるや清兵衛	久弥				
	4	1627	11	27	朝	松平下総守忠明	上柳彦兵衛	五十嵐宗林	墨屋頼馬				
	5	1628	1	21	昼	不休	宗白	清水道閑	道恵	大塚屋卜斎			
	5	1628	2	16	朝	松平周防	宗加	周防殿内衆	周防殿内衆				
	5	1628	2	19	朝	大久保六右衛門	五味金右衛門豊直	杉田九郎兵衛	小川甚右衛門				
	5	1628	2	20	昼	加賀爪民部少輔忠澄	堀式部少輔直之						
	5	1628	3	3	朝	板倉周防守重宗	五味金右衛門豊直	上林峯順					
	5	1628	3	20	朝	松平越中	榊原左衛門佐職直						
	5	1628	4	16	朝	荒尾但馬	思王野道以	？や徳庵	いしや宗宇	しほや道斎			
	5	1628	4	23	晩	大久保六右衛門	杉田九郎兵衛	武藤理兵衛	下島市兵衛				
	5	1628	4	24	朝	板倉内膳重昌	中井和州	意（道）閑					
	5	1628	4	24	昼	五味金右衛門豊直	小野宗左衛門貞則	中井和州	中坊左近秀政	ぬし道志			
	5	1628	4	26	朝	榊原左衛門佐職直	荒尾但州	檜村孫兵衛	小野宗左衛門貞則	中井和州			
	5	1628	5	1	朝	駒井右京	徳山五兵衛	五味金右衛門豊直	岡田将監善政	小野宗左衛門貞則			
	5	1628	5	1	不時	中井和州	檜村孫兵衛	ぬし道志	二郎兵衛	修理			
	5	1628	5	9	朝	江月和尚	瀧本坊	村井不及	中井和州	檜村孫兵衛	清水道閑		
	5	1628	5	17	朝	江月和尚	瀧本坊	孝佐	村井不及	ぬし道志			
	5	1628	6	5	晩	水野河内守守信	末吉孫左衛門	平野藤四郎	檜村孫兵衛	ぬし道志			
	5	1628	6	14	朝	島田越前	久賀因幡						
	5	1628	6	14	晩	小野宗左衛門貞則	檜村孫兵衛	中井和州	松波五郎衛門	山田五郎兵衛			
	5	1628	6	16	朝	小野宗左衛門貞則	長兵衛	二郎兵衛	村井不及	勘兵衛	ぬし道志		
	5	1628	6	18	晩	檜村孫兵衛	中井和州	道玄	徳庵				
	5	1628	9	8	朝	江月和尚	瀧本坊	檜村孫兵衛	中井和州	道味			
	5	1628	9	11	朝	水野河内守守信	檜村孫兵衛	平野藤四郎					
	5	1628	9	14	朝	板倉周防重宗	松平越中	水野河内守守信	板倉備前	後藤縫殿助益勝			
	5	1628	9	14	晩	岡田将監善政	中坊美作守時祐	玄添	玄的	上柳彦兵衛			
	5	1628	9	16	朝	安楽庵	長老	善知	中坊左近秀政	竹林院	国師（茶の時）		
	5	1628	9	17	朝	武田道庵信重	立乗	徳庵	後藤勘兵衛	本阿弥二郎三郎			
	5	1628	9	19	朝	玄治法印	村井不及	大塚屋卜斎	清水道閑	橘屋宗玄	上柳彦兵衛		
	5	1628	9	20	朝	五味金右衛門豊直	豊永宗如老	長谷川左兵衛	金子八郎右衛門				
	5	1628	9	26	朝	菅沼織部正定芳	二村宗林	徳庵	ぬし道志				
	5	1628	9	28	晩	島田越前	久貝因幡	小浜民部少輔光孝	観音寺	中井和州			

元号	年	西暦	月	日	時刻	客 1	客 2	客 3	客 4	客 5	客 6	客 7	客 8
寛永	5	1628	10	2	朝	大久保源三郎	神尾備前守元勝	五味金右衛門豊直					
	5	1628	10	4	晩	加藤肥後守忠広	右馬	ほう庵					
	5	1628	10	9	晩	不明							
	5	1628	12	7	朝	江月和尚	竹中采女	瀧本坊	中村大和	村井不及	ぬし道志		
	7	1630	1	1	不明	志水久古	(斎) 庵	宗仙	徳庵	ぬし道志	道仁		
	7	1630	1	6	朝	松平越前	水野河内守守信	ぬし道志					
	7	1630	9	4	朝	江月和尚	瀧本坊	竹中筑後	上柳彦兵衛	村井不及			
	7	1630	9	21	夕	村井不及	五十嵐宗林	三条道仁	志水久古	ぬし道志	橘屋宗玄		
	7	1630	9	22	晩	平野権十郎	玄治法印	小川甚右衛門	小堀権左衛門				
	7	1630	10	2	朝	竹中筑後	後藤勘兵衛	岡田四郎兵衛	清水道閑	権太夫	正玄		
	7	1630	10	27	朝	不明							
	7	1630	11	3	朝	板倉周防守重宗	仙石大和	小林十郎右衛門	竹中筑後	清水道閑			
	7	1630	11	26	晩	松平右衛門佐正綱	上林峯順	三木了清	(観世新九郎)	(宇左衛門)			
	7	1630	11	28	朝	豊永堅斎	後藤縫殿助益勝	後藤勘兵衛	狩野主馬	末吉孫右衛門	平野藤二郎		
	8	1631	2	25	朝	竹中采女	竹中筑後	竹中源三郎	玄治法印	村井不及			
	8	1631	4	28	朝	中山介六 (助六)	清水道閑						
	8	1631	9	21	夕	村井不及							
	8	1631	10	2	朝	不明							
	8	1631	10	27	朝	不明							
	9	1632	9	3	朝	土井大炊頭利勝	松平右衛門佐正綱	武田道庵信重	山本道白				
	10	1633	5	23	朝	江月和尚	清水道閑	道玄	道甫	ヶ庵			
	10	1633	5	26	朝	松花堂昭乗	伊丹屋宗不	妙古 (妙可)	権太夫	ぬし道志	志水久古		
	10	1633	5	30	朝	江月和尚	清水道閑	伊丹屋宗不	ヶ庵	志水久古			
	10	1633	6	1	朝	豊永堅斎	中村五郎介	八郎右衛門 (八右衛門)	後藤勘兵衛	本阿弥二郎三郎	藤重藤厳 (等言)		
	10	1633	6	17	朝	玄的	道伴	黙々寺	伊丹屋宗不	武田道庵信重			
	10	1633	6	17	不明	久昌院	大寧院	福西堂	森又右衛門				
	10	1633	7	13	朝	武田道庵信重	志水久古	石河宗雲	道白	橘屋宗玄			
	10	1633	7	16	不明	後藤顕乗	宗喝	本阿弥光甫	本阿弥二郎三郎	丸山了阿弥			
	13	1636	5	21	不明	不明(将軍様御茶屋)							
	13	1636	5	21	不明	不明 (遠州御茶屋)							
	14	1637	1	8	朝	永井信濃守尚政							
	14	1637	1	16	朝	末次平蔵政直	五十嵐宗林						
	14	1637	1	21	朝	永井信濃守尚政	石古 (河) 土佐						
	14	1637	2	2	朝	江月和尚							

	14	1637	2	12	朝	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政						
	14	1637	2	13	朝	江月和尚	末次平蔵政直						
	14	1637	10	24	朝	円斎（丹斎）	佐川田喜六	三浦勘右衛門	武田道庵信重	橘屋宗玄			
	14	1637	12	2	夜	江月和尚	瀧本坊	志水久古					
	14	1637	12	13	朝	池田内蔵助重政	小堀九郎兵衛	藤井浄知	山中市之丞	小堀権左衛門			
	15	1638	1	8	不時	江月和尚	了首座	見桜院					
	15	1638	1	14	朝不時	堀市正	永井信濃守尚政	多賀左近常長	堀式部少輔直之	大河善兵衛			
	15	1638	3	29	朝	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政	板倉主水正重矩	松平三十郎	五十嵐宗林			
	15	1638	12	29	朝	堀田加賀守正盛	嶋四郎右衛門	岡宗員					
	15	1638	12	30	朝	松平右衛門佐正綱	加賀爪民部少輔忠澄	堀式部少輔直之	加賀爪甲斐守直澄	上柳彦兵衛			
	16	1639	1	1	晩	佐久間将監実勝	舟越三郎四郎永景	八木勘十郎守直	北見久大夫重勝				
	16	1639	1	3	晩	池田内蔵助重政	小堀左馬助	西尾権之助	小堀大膳	小堀九郎兵衛	橘屋宗玄		
	16	1639	1	4	晩	永井信濃守尚政	島田運也（幽也）	山田宗縁	茶屋長右衛門				
	16	1639	1	5	朝	柳生但馬守宗矩	柳生十兵衛	加藤勘助	長谷川等書				
	16	1639	1	7	晩	松平下総守忠明	秋元但馬守泰朝	上柳久弥（彦兵衛）	山田久弥	山田主水			
	16	1639	1	9	朝	曾我丹波守古祐	石川土佐守勝政	榊原左衛門佐職直	妙道	御茶堂正斎			
	16	1639	1	12	晩	松平筑前	松平飛驒	中根大隈守正成	高木筑後守正次	内藤外記			
	16	1639	1	13	朝	菅沼織部正定芳	酒井織部（因幡か）	菅沼左近定昭	田中主殿頭吉官	本多美作守忠相			
	16	1639	1	16	朝	渡辺一学	蔭山土佐	小笠原久兵衛	いしや了庵	小堀右近			
	16	1639	1	20	晩	神尾備前守元勝	小倉忠右衛門	後藤庄三郎	小堀三郎兵衛	狩野探幽斎法眼			
	16	1639	1	21	朝	松平伊豆守信綱	松平左門	松平甲斐守輝綱	松平三記	松平右京	久志本式部少輔常尹		
	16	1639	1	23	朝	加藤式部少輔明成	松平伊賀守忠晴	石川大隅守政次	枡屋道勺				
	16	1639	1	26	朝	斎藤伊豆守宗利	斎藤摂津守三友	内藤庄兵衛	稲葉権之助	堀三右衛門直影			
	16	1639	1	29	朝	牧野内匠頭信成	牧野織部正成常	花房志摩守幸次	杉浦蔵之亮	吉良若狭守義冬			
	16	1639	1	30	朝	大橋法印式部卿重保	玄悦法印	小幡孫兵衛	大川原源五左衛門	御茶堂宗伝	神谷式部		
	16	1639	2	3	朝	太田備中守資宗	板倉阿波守重卿	板倉主水正重矩	石谷十蔵貞清	津田平左衛門			
	16	1639	2	4	朝	吉良上野介義弼	井上河内守正利	水野監物忠善	松平出雲守勝隆	安藤右京進重長			
	16	1639	2	5	朝	酒井備後守忠朝	酒井壱岐守忠重	酒井民部正	酒井蔵人				
	16	1639	2	7	朝	松平越前	松平万助	織田左衛門佐長政	武田道庵信重				
	16	1639	2	8	朝	朽木民部少輔稙綱	水野右京亮勝忠	神尾若狭守元珍	小出越中守尹貞	大久保宮内少輔正朝			
	16	1639	2	10	朝	立花飛驒守宗茂	永井右近大夫尚征	本多下総守俊次	松平能登守定次	永井大和守尚保			
	16	1639	2	12	朝	小浜民部少輔光孝	堀越中	小浜久太郎嘉隆					
	16	1639	2	13	朝	酒井宮内大輔忠勝	酒井摂津守忠当	酒井長門守忠重	松平主膳忠良	後藤顕乗			
	16	1639	2	14	朝	石川弾正大弼康勝	石川惣十郎	森川金右衛門氏信	上野八郎左衛門	太鼓打左吉			
	16	1639	2	15	朝	小出大和守吉英	小出大隈守三尹	小出木工吉成	戸川土佐	能勢小十郎			

元号	年	西暦	月	日	時刻	客 1	客 2	客 3	客 4	客 5	客 6	客 7	客 8
寛永	16	1639	2	16	朝	伊丹蔵人勝長	櫛半十郎	木原木工允義久	藤重藤厳（等言）	御茶堂宗円			
	16	1639	2	19	朝	阿部四郎五郎	鳥等甫	朽木出雲	物よミ宗春	御茶道了雲			
	16	1639	2	21	朝	渡辺図書	大沢右京亮基重	馬場三郎左衛門利重	青山善四郎	花房勘右衛門正盛			
	16	1639	2	25	朝	植村出羽守家政	本多豊前守正貫	中山勘解由直定	御茶道春貞				
	16	1639	3	2	朝	毛利甲斐守秀元	向井将監忠勝	松平因幡守勝義	本阿弥光伯（光白）				
	16	1639	3	2	晩	観音寺	小野宗左衛門貞則	本住坊	小野長左衛門貞正	平野藤四郎	小野喜左衛門貞久	大津弥三郎	
	16	1639	3	5	朝	市橋下総守長政	市橋兵吉下総守政信	市橋三四郎長吉	岡田将監善政	貝兵衛			
	16	1639	11	13	朝	不明							
	16	1639	11	14	不明	妙賀	志水久古	橘屋宗玄	ぬし道志	伊丹屋宗不	八郎右衛門		
	16	1639	11	16	朝	不明							
	16	1639	11	18	朝	五味金右衛門豊直	小野宗左衛門貞則	あまのや宗入	大津弥三郎				
	16	1639	11	21	朝	甫庵	喜六	个庵（こあん）	宗句	伊丹屋宗不	志水久古		
	16	1639	閏11	14	朝	不明							
	16	1639	閏11	16	朝	不明							
	16	1639	閏11	21	朝	不明							
	16	1639	閏11	22	朝	不明							
	16	1639	12	7	朝	不明							
	16	1639	12	14	朝	小堀権左衛門	村瀬左助	勝田八兵衛	永井一郎左衛門	伊丹屋宗不	志水久古		
	16	1639	12	15	朝	ぬし道志	武田道庵信重	小堀右近	五郎右衛門	伝兵衛	半兵衛	木工	
	16	1639	12	16	朝	不明							
	16	1639	12	17	朝	不明							
	17	1640	5	22	朝	堀田加賀守正盛	北見久大夫重勝	小野宗左衛門貞則					
	17	1640	5	27	朝	浅野因幡守長治	平野遠江長勝	加賀爪民部少輔忠澄	加賀甲斐守直澄	上柳彦兵衛			
	17	1640	5	28	朝	佐久間将監実勝	牧野織部正成常	舟越三郎四郎永景	八木勘十郎守直	狩野探幽斎法眼			
	17	1640	5	29	朝	渡辺一学	菅沼宮内	小堀左近	茶屋四郎次郎	茶屋新四郎			
	17	1640	6	1	朝	稲葉美濃守正則	堀式部少輔直之	北見五郎左衛門	榊原左衛門佐職直				
	17	1640	6	5	朝	堀三左衛門直氏	池田内蔵助重政	小堀九郎兵衛	後藤利（理）兵衛				
	17	1640	6	6	朝	朽木民部少輔稙綱	久世大和守広之	山口出雲	京極左近高勝				
	17	1640	6	10	朝	松平下総守忠明	石川主殿頭忠総	大久保主膳正幸信	大久保右京亮教隆	堀式部少輔直之			
	17	1640	7	2	朝	榊原左衛門佐職直	堀三左衛門直氏	堀五郎右衛門	榊原左馬助	石川土佐守勝政	御茶道正斎		
	17	1640	7	5	朝	玄治法印	堀式部少輔直之	糸屋十右兵衛	茶屋長右衛門				
	17	1640	7	20	朝	酒井備後守忠朝	吉良上野介義彌	安藤右京進重長	松平出雲守勝隆	酒井蔵人			
	17	1640	7	26	朝	松平筑前	高木筑後守正次	内藤外記					
	17	1640	7	27	朝	松平右衛門佐正綱	松平甲斐守輝綱	松平主膳忠良	松平左衛門	加賀爪民部少輔忠澄	菅谷宗勝		

	17	1640	7	28	朝	永井信濃守尚政	柳生但馬守宗矩	神尾備前守元勝	藤重藤厳（等言）				
	17	1640	8	4	（朝）	土屋民部少輔利直	京極主膳正高通	神尾若狭守元珍	土屋兵部少輔之直	安藤次右衛門正珍			
	17	1640	8	7	朝	石川大隅守政次	朝倉仁左衛門	松平伊賀守忠晴	加藤式部少輔明成				
	17	1640	8	8	朝	黒田甲斐守長興	多賀左近常長	桑山修理亮一玄					
	17	1640	8	13	朝	土井遠江守利隆	加賀爪民部少輔忠澄						
	17	1640	10	17	朝	江月和尚	末次平蔵政直						
	17	1640	10	18	朝	江月和尚	末次平蔵政直	伊丹屋宗不	志水久古	ぬし道志	橘屋宗玄		
	17	1640	10	19	朝	上柳彦兵衛	五十嵐宗林	伊丹屋宗不					
	17	1640	10	20	朝	不明							
	17	1640	11	2	不明	板倉周防守重宗	五味金右衛門豊直	菅織部	中坊美作守時祐				
	17	1640	11	4	朝	北見五郎左衛門							
	17	1640	11	7	朝	上林峯順	上林味卜						
	17	1640	11	8	朝	不明							
	17	1640	11	9	朝	不明							
	17	1640	11	12	晩	藤川土佐							
	17	1640	11	13	朝	上林竹庵	上林三入	永井立甫	上林又兵衛	ぬし道志			
	17	1640	11	15	朝	江月和尚	永井日向守直清	平野遠江長勝	芝田道伴	薬師寿閑			
	17	1640	11	23	朝	後藤顕乗	本阿弥光甫	後藤作十郎					
	17	1640	11	26	晩	大塚屋卜斎	清水道閑	志水久古	天野屋市兵衛	帯屋宗知			
	17	1640	11	28	晩	植村出羽守家政	大岡美濃守忠吉	つるや清兵衛					
	17	1640	12	2	朝	大文字屋宗悦	香具屋涌知	亀屋庄平衛	糸屋十兵衛	中井八郎衛門	大文字屋左兵衛		
	17	1640	12	6	朝	片桐石見守貞芳	分部左京亮光信	朽木民部少輔稙綱	長谷川左兵衛	鳥専甫			
	17	1640	12	7	昼	石川大隅守政次	藤堂主馬嘉長	尺八宗鉄	志水久古				
	17	1640	12	14	晩	上柳彦兵衛	志水久古						
	17	1640	12	16	夜	江月和尚	日根野織部正吉明	志水久古	橘屋宗玄	ぬし道志			
	17	1640	12	17	晩	浄光院	加藤風庵	玄的	橘屋宗玄	ぬし道志			
	17	1640	12	18	朝	宗斗	大文字屋長兵衛	三木了清	たやの専悦	はりや庄六			
	17	1640	12	19	朝	金地院	福西堂	武田道庵信重	平賀清兵衛				
	18	1641	1	5	朝	不明							
	18	1641	1	10	朝	片桐石州	豊永（伊丹）堅斎	中村五郎介（助）	藤林介（助）之丞	松屋源三郎			
	18	1641	1	19	朝	不明							
	18	1641	1	22	朝	不明							
	18	1641	3	1	朝	近衛信尋							
	18	1641	3	2	朝	不明							
	18	1641	3	3	晩	不明							

元号	年	西暦	月	日	時刻	客 1	客 2	客 3	客 4	客 5	客 6	客 7	客 8
寛永	18	1641	3	4	朝	不明							
	18	1641	4	9	朝	狩野探幽斎法眼	伊丹屋宗不	志水久古					
	18	1641	4	11	朝	石川弾正大弼廉勝	石川権七郎	茶屋四郎次郎	茶屋新四郎	本阿弥庄兵衛	上柳彦兵衛		
	18	1641	12	11	朝	堺宗真（宗貞）	尾崎屋又兵衛	帯屋宗和	尾崎又十郎				
	18	1641	12	12	朝	小堀屋久徳	千葉屋宗林（宗勺）	久須美常憐	みすや宗印	はりや庄六			
	18	1641	12	14	朝	日根野織部正吉明	ぬし道志	十川志摩（千）之介	竹本四郎右衛門				
	18	1641	12	14	昼	阿知子宗勺	銭屋宗安	両国屋理左衛門	星野宗伴	上林宗斎	上林平入		
	18	1641	12	19	朝	藤本浄知	大文字屋宗活	大文字屋長兵衛	きくや（岸部屋）宗白				
	18	1641	12	25	晩	川口茂左（右）衛門	長谷川三左衛門守勝	松梅院					
	19	1642	1	8	朝	江月和尚	永井信濃守尚政	上林峯順	上林竹庵				
	19	1642	1	9	不明	淀屋ヶ（固）庵	ぬし道志	道可					
	19	1642	1	21	朝	江月和尚	黙々寺	伊丹屋宗不	蜂屋又右衛門				
	19	1642	1	26	夕	青山大蔵少輔(幸成)	曾我丹波守古祐	石川土佐守勝政	尾崎又十郎（又右衛門）				
	19	1642	2	8	朝	明眼院	伊丹屋宗不	茶屋四郎次郎	森道安	橘屋宗玄			
	19	1642	2	22	晩	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政	板倉二郎右衛門	五味備前守				
	19	1642	3	6	晩	松平右衛門佐正綱	江月和尚	上林峯順	観世新九郎				
	19	1642	3	29	晩	江月和尚	天祐紹杲和尚	清岩和尚	安室和尚（宗閑）	清泉寺			
	19	1642	4	6	朝	江月和尚	天祐紹杲和尚	大膳	権十郎	清水道閑			
	19	1642	4	13	晩	中山東市正信政	明眼院	(淀屋个庵)					
	19	1642	4	18	朝	上柳彦兵衛	五十嵐宗林	橘屋宗玄	ぬし道志				
	19	1642	4	26	朝	江月和尚	天祐紹杲和尚	小堀大膳	清水道閑	小堀権左衛門			
	19	1642	8	22	朝	江月和尚	舟越三郎四郎永景	五十嵐宗林	上柳彦兵衛	狩野探幽斎法眼			
	19	1642	閏9	15	朝	酒井讃岐守忠勝	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政					
	20	1643	3	13	朝	内田信濃守正信	斎藤摂津守三友	岡田淡路守					
	20	1643	3	13	晩	松平陸奥守	内藤外記	松平越前守	吉田主膳守（正）				
	20	1643	3	14	晩	牧野内匠頭信成	土岐山城守頼行	高木九郎介	小浜久太郎嘉隆				
	20	1643	3	16	朝	道也（道巴）	今枝式部（民部）	玄団（玄円）	脇田半兵衛				
	20	1643	3	27	朝	沢庵和尚	堀田加賀守正盛	北見久大夫重勝	北見五郎左衛門	上柳彦兵衛（茶の時）			
	20	1643	3	29	朝	不明							
	20	1643	4	1	晩	酒井讃岐守忠勝	酒井信濃守	酒井壱岐守忠重	酒井和泉守忠吉	吉良若狭守義冬			
	20	1643	4	4	朝	日根野織部正吉明	京極主膳正高通	日根野次郎右衛門	京極甚十郎				
	20	1643	4	7	朝	松平式部（民部）	酒井宮内大輔忠勝						
	20	1643	4	8	朝	牧野佐渡守親成	小出越中守尹貞	板倉市正重大	牧野八大夫尹成				
	20	1643	4	9	朝	枡屋道勺	御茶堂休盛	御茶屋利斎	御茶屋休務	御茶屋養古			

	20	1643	4	12	朝	酒井宮内大輔忠勝	酒井長門守忠重						
	20	1643	4	18	朝	松平隠岐守定行	松平美濃守	加藤勘助	柳生但馬守宗矩				
	20	1643	4	22	夜	石川主殿頭忠総	大久保右京亮教隆	石川播磨守	大久保惣三郎	石川阿波守	石川惣十郎		
	20	1643	4	23	夜	堀田加賀守正盛	北見久大夫重勝	水野小左衛門	上柳彦兵衛				
	20	1643	4	25	朝	本阿弥三郎兵衛	本阿弥十兵衛	藤重藤厳（等言）	亀屋庄兵衛	北（喜多）村彦左衛門			
	20	1643	4	26	朝	松平伊豆守信綱	安藤右京進重長	松平佐渡守康尚	松平二左衛門	久志本式部少輔常尹			
	20	1643	4	29	朝	文殊院	見樹院	金地院	正恩	覚恩			
	20	1643	5	23	朝	朽木民部少輔稙綱	平野遠江守長勝	加賀爪甲斐守直澄	狩野探幽斎法眼				
	20	1643	5	26	朝	阿部豊後守忠秋	安藤右京進重長	松平出雲守勝隆	舟越三郎四郎永景				
	20	1643	5	27	朝	久世大和守広之	八木勘十郎守直	牧野織部正成常	木原木工允義久				
	20	1643	5	30	朝	板倉周防守重宗	吉良若狭守義冬	太田左馬之助	徳山五兵衛				
	20	1643	6	3	朝	堀田加賀守正盛	北見五郎左衛門	水野小左衛門					
	20	1643	7	27	朝	井伊靱負	板倉周防守重宗	井伊兵部少輔直勝	森川金右衛門氏信	成瀬隼人正正虎	石谷十蔵貞清		
	20	1643	8	8	朝	松平肥前守	松平安芸守(浅野光晟)	松平飛騨守	高木筑後守正次	内藤外記			
	20	1643	8	26	朝	黒田右衛門佐光之	酒井讃岐守忠勝	北条出羽守氏重	小出対馬守吉親				
	20	1643	9	3	朝	土井大炊頭利勝	松平右衛門佐正綱	武田道庵信重	山本道白	(儒者道春)			
	20	1643	11	9	朝	堀田加賀守正盛	加賀爪甲斐守直澄	舟越三郎四郎永景	北見五郎左衛門	水野小左衛門			
	20	1643	11	11	晩	永井信濃守尚政	内藤志摩守忠重	永井大学	内藤三十郎	御茶堂宗伝			
	20	1643	11	12	朝	榊原左右衛門	堀式部少輔直之	北見久大夫重勝	榊原左衛門佐職直	内藤庄兵衛			
	20	1643	11	16	朝	朽木民部少輔稙綱	小出越中守尹貞	岡田淡路	平野遠江守長勝	狩野探幽斎法眼			
	20	1643	11	17	昼	稲葉美濃守正則	榊原左右衛門	榊原左衛門佐職直					
	20	1643	12	2	朝	阿部豊後守忠秋	安藤右京進重長	安藤次右衛門正珍	御茶堂宗伝				
	20	1643	12	10	朝	毛利長門守秀就	石川大隅守政次	見樹院	完道主	梨羽頼母			
	20	1643	12	14	晩	内田信濃守正信	斎藤摂津守三友	大草主膳正高盛	大久保宮内少輔正朝	町野左近			
	20	1643	12	18	晩	松平伊豆守信綱	松平佐渡守康尚	松平主膳忠良	久志本式部少輔常尹	伯安			
	20	1643	12	21	朝	玉虫八左衛門	大久保平六	大岡忠四郎	遠山十右衛門	長谷川長五郎	大川原源五左衛門		
	20	1643	12	23	朝	久世大和守広之	牧野佐渡守親成	小出越中守尹貞	八木勘十郎守直	牧野織部正成常			
	20	1643	12	23	晩	神尾五助	木原木工允義久	鈴木修理	樽屋藤左衛門	伊阿弥修理	茶屋四郎次郎		
	20	1643	12	26	朝	土屋民部少輔利直	土屋大和守数直	土屋兵部少輔之直	神尾若狭守元珍	星合太郎兵衛	上柳彦兵衛		
	21	1644	1	1	晩	榊原左右衛門	榊原左衛門佐職直	舟越三郎四郎永景	星合太郎兵衛				
	21	1644	1	3	晩	堀田加賀守正盛	花房勘右衛門正盛	水野小左衛門	上柳彦兵衛	御茶堂宗円(お茶の時)			
	21	1644	1	5	晩	加賀爪甲斐守直澄	安藤右京進重長	北見五郎左衛門	北見久大夫重勝	伊丹蔵人勝長	堀式部少輔直之		
	21	1644	1	6	晩	松平新太郎	神尾備前守元勝	能勢小十郎	神尾内膳元清	元春			
	21	1644	1	23	朝	朽木民部少輔稙綱	浅野因幡守長治	平野遠江長勝	岡田淡路	加賀爪甲斐守直澄			
	21	1644	2	4	晩	保科肥後守正之	吉良若狭守義冬	安藤右京進重長					

元号	年	西暦	月	日	時刻	客 1	客 2	客 3	客 4	客 5	客 6	客 7	客 8
寛永	21	1644	2	5	朝	松平阿波守	田中主殿頭吉官	坪内宗兵衛（惣兵衛）					
正保	2	1645	10	11	朝	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政	曾我丹波守古祐	石川土佐守勝政	小浜民部少輔光孝			
	2	1645	10	12	朝	五十嵐宗林	上柳彦兵衛	茶屋四郎次郎	糸屋良亭（良貞）	橘屋宗玄	ぬし道志		
	2	1645	10	13	朝	半井瑞雪	石川宗雲	村井甫庵	清水道閑	三嶋屋吉兵衛			
	2	1645	10	19	朝	松平能登守定次	僧一人	上柳彦兵衛	梶原平助				
	2	1645	10	20	朝	大塚屋卜斎	後藤顕乗	岡庄左衛門	後藤覚乗	平野藤次郎	志水久左衛門		
	2	1645	10	21	朝	三宅亡羊	道乙	藤村庸軒	田屋等意	香具屋播磨			
	2	1645	10	23	朝	多賀左近常長	金森宗和	中沼左京	松屋源三郎				
	2	1645	11	1	朝	日野根織部	ぬし道志	十川志摩助	上柳彦兵衛	茶屋四郎次郎			
	2	1645	11	8	朝	安藤右京進重長	板倉周防守重宗	永井信濃守尚政	ものよみ春斎	五味金右衛門豊直			
	2	1645	11	20	晩	江雪和尚	了首座	丸山了阿弥	才首座	志水市郎右衛門			
	2	1645	11	25	朝	安藤右京進重長	石川土佐守勝政						
	2	1645	12	2	昼	清水道閑	橘屋宗玄	ぬし道志					
	2	1645	12	7	朝	上林峯順	上林竹庵	上林味卜	上林永順	上林春松			
	2	1645	12	8	朝	星野宗以	星野宗仲	上林平入	上林又十郎	長井亭甫	竹田道雲		
	2	1645	12	8	昼	上柳彦兵衛	茶屋四郎次郎	三嶋屋吉兵衛	橘屋宗玄				
	2	1645	12	12	朝	柳生但馬守宗矩	中坊美作守時祐	石屋道寿					
	2	1645	12	14	朝	牧野佐渡守親成	永井信濃守尚政	小浜民部少輔光孝	梅原休閑				
	2	1645	12	18	朝	沢宗也	毛利流雪	小堀権左衛門	三好了庵	村瀬左助	小堀半兵衛	勝田八兵衛	
	2	1645	12	21	朝	小堀五右衛門	谷五郎右衛門	鈴木次大夫	長井十郎左（右）衛門	土屋十兵衛	長井伝兵衛		
	2	1645	12	21	不明	小堀甚之介	宮川権之丞	池原助之進	松山六兵衛（理右衛門）	植木甚之丞	高屋又（介）右衛門	稲留安左(右)衛門	奥村安之丞
	3	1646	1	27	朝	岡部美濃守宣勝	斎藤茂庵	長井宗乙					
	3	1646	1	28	夜	本多内記政勝	志水永甫	亀屋平三郎	(岡庄左衛門)				
	3	1646	2	4	朝	織田左衛門佐長政	上林峯順	清水道閑	上林味卜				
	3	1646	2	11	朝	永井信濃守尚政	板倉周防守重宗	五十嵐宗林	上林峯順	五十嵐太兵衛			
	3	1646	2	23	朝	菅沼左近定昭	ぬし道志	上林三入	御内衆	御内衆			
	3	1646	3	7	朝	蔵南坊	瀧本坊	成身院	半井有庵	高石屋道勺	伊丹屋宗不		
	3	1646	3	25	朝	猪子左大夫	御茶堂宗円	観世新九郎	栄伝	子新九郎	五十嵐宗林		
	3	1646	4	7	朝	中山東市正信政	薬師清庵	野村惣右衛門	茶屋新四郎				
	3	1646	4	15	昼	松平右衛門佐正綱	上林峯順	観世新九郎					
	3	1646	4	17	朝	安室和尚（宗閑）	江雪和尚	了首座	文（斎）阿弥				
	3	1646	4	23	朝	天祐紹杲和尚	清岩和尚	玉舟	笠主座	了首座			
	3	1646	4	26	朝	武田道庵信重	五十嵐宗林	本阿弥三郎兵衛	亀屋庄兵衛	橘屋宗玄			
	3	1646	4	28	昼	石川主殿頭忠総	小野了玄	本阿弥庄兵衛	(岡庄左衛門)				

	3	1646	5	8	朝	松平将監	橘屋宗玄	酒井七（長）兵衛	伊丹屋又右衛門(孫兵衛)				
	3	1646	5	28	朝	多賀左近常長	中沼左京						
	3	1646	6	4	朝	半井驢庵	半井瑞雪	半井寿庵	石河宗雲	ぬし道志			
	3	1646	6	7	昼	松平安芸守(浅野光晟)	武田道庵信重	薬師寿閑	多羅尾左兵衛				
	3	1646	6	8	朝	板倉周防守重宗	青木甲斐守重兼	外科伯庵	五十嵐宗林	禰宜次（治）右衛門			
	3	1646	6	11	朝	建部内匠政長	糸屋良亨（良貞）	糸屋彦太郎	山村栄智				
	3	1646	6	19	朝	吉良若狭守義冬	板倉周防守重宗	有馬玄哲	五十嵐宗林				
	3	1646	6	20	朝	平野遠江長勝	下間民部卿	下間治部卿	善法寺	平野流（立）伯			
	3	1646	7	2	朝	細川肥後守光尚	平野遠江長勝	武田道庵信重	小笠原備前	上柳彦兵衛			
	3	1646	7	4	晩	松平阿波守	小野長左衛門貞正	上林春松	佐野理兵衛				
	3	1646	7	5	朝	黒田甲斐守長興	三木了清	大文字屋左兵衛	星野宗以				
	3	1646	7	6	晩	松平土佐守忠実	井筒屋半右衛門	しかた源兵衛	相間（馬）兵庫	上柳彦兵衛			
	3	1646	7	13	朝	清水道閑	亀屋庄兵衛	村井甫庵	岡庄左衛門	橘屋宗玄	ぬし道志		
	3	1646	7	16	朝	後藤顕乗	後藤覚乗	本阿弥二郎三郎	糸屋寿（良）貞	岸部屋宗府	大槻道伯		
	3	1646	7	19	朝	茶屋四郎次郎	後藤源左衛門	三嶋屋吉兵衛	針屋宗春	大文字屋宗貞	平野九郎右衛門		
	3	1646	7	22	朝	板倉周防守重宗	今川刑部大輔直房	石貝五右衛門	上柳彦兵衛	五十嵐宗林			
	3	1646	7	29	朝	養源院	円徳院	福西堂	塩瀬常仁	平賀清兵衛			
	3	1646	7	30	昼	唐物屋道玄	道玄孫六（孫二人）	清水道閑	狩野探幽斎法眼	五十嵐宗林			
	3	1646	8	2	晩	後藤顕乗	松屋源三郎久重						
	3	1646	8	16	朝	津田平左衛門	内藤甚丞	上柳彦兵衛	三嶋屋吉兵衛				
	3	1646	8	20	朝	伊藤内膳	中沼左京	小堀新十郎	高畠（富）杢	沢宗也			
	3	1646	8	21	朝	石川弾正大弼廉勝	上柳彦兵衛	本阿弥庄兵衛	茶屋四郎次郎	本阿弥九郎左衛門			
	3	1646	12	22	朝	中坊美作守時祐	沢宗也	松屋源三郎久重	大倉源右衛門				
	4	1647	1	22	不明	尾張の妙源院	大槻道伯	松屋源三郎久重					

表 5　小堀遠州茶会記（道具組）

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
慶長	4	1599	2	24	朝	不明	九輪	籠	白玉・木瓜	今焼肩衝	今焼	備前
	6	1601	12	21	朝	石渓心月の墨跡か（手水の間に）	あられ	不明	不明	備前肩衝	今高麗	信楽
寛永	2	1625	8	26	朝	墨跡定家大井川行幸の歌	不明	柑子口	山茶花・朝顔	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	8	26	晩	墨跡徹翁義亨大文字	不明	柑子口	山茶花・桔梗	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	8	28	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	柑子口	山茶花・朝顔	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	8	29	朝	墨跡間極法雲、東碉道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・朝顔	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	2	朝	墨跡間極法雲、東碉道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梔子	瀬戸小	利休ととや	三島

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
寛永	2	1625	9	3	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梔子	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	3	晩	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	六角	山茶花・梔子	瀬戸小（相坂か）	利休ととや	三島
	2	1625	9	4	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梔子	瀬戸小（相坂か）	利休ととや	三島
	2	1625	9	5	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梔子	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	5	昼	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梔子	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	5	晩	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	なし	なし	瀬戸小	雲堂手染付	三島
	2	1625	9	11	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・桜（梅）	瀬戸小（相坂か）	染付	三島
	2	1625	9	13	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	13	晩	墨跡定家初雪の歌	不明	六角	山茶花・梅	瀬戸小（相坂か）	染付	三島
	2	1625	9	14	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	14	晩	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	不明	不明	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	15	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	15	晩	墨跡徹翁義亨大文字	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	16	晩	墨跡徹翁義亨大文字	不明	なし	なし	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	17	晩	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	なし	なし	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	21	晩	定家あはぬよの歌	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸大肩衝	染付	三島
	2	1625	9	22	朝	定家あはぬよの歌	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	利休ととや	三島
	2	1625	9	22	晩	定家あはぬよの歌	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	染付	三島
	2	1625	9	23	朝	定家あはぬよの歌	不明	柑子口	山茶花・梅	瀬戸小	染付	三島
	3	1626	10	15	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	獅子耳	不明	在中庵	高麗	肥後
	3	1626	11	15	朝	墨跡蘭渓道隆	不明	金六角	不明	膳所焼	染付、島物	肥後
	3	1626	11	21	晩	墨跡蘭渓道隆	不明	龍耳	不明	高取焼	染付	肥後
	4	1627	11	6	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	丸獅子耳	水仙まゆ作	道休肩衝	瀬戸貫入	肥後
	4	1627	11	8	朝	墨跡仏光（無学祖元）	不明	丸獅子耳	水仙まゆ作	道休肩衝	瀬戸貫入	信楽
	4	1627	11	17	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	丸龍耳	牡丹・寒菊	釣舟	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	19	朝	墨跡蘭渓道隆	不明	金丸ひやう	山吹・福寿草	信楽肩衝	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	20	昼	松花堂昭乗筆驢馬の絵	不明	金丸ひやう	山吹・福寿草	信楽耳付肩衝	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	21	昼	松花堂昭乗筆驢馬の絵	不明	金ひやう	福寿草	信楽耳付肩衝	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	22	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	金ひやう	牡丹	信楽耳付肩衝	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	26	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	金丸龍耳	梅・椿	信楽耳付肩衝	瀬戸貫入	膳所
	4	1627	11	27	朝	牧渓驢馬の絵	不明	古銅獅子頭耳付	不明	膳所焼	瀬戸貫入	膳所
	5	1628	1	21	昼	牧渓驢馬の絵	不明	金丸ひやう	なし	大江	瀬戸貫入	膳所
	5	1628	2	16	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	古銅獅子頭耳付	椿	膳所焼	瀬戸貫入	膳所
	5	1628	2	19	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	古銅獅子頭耳付	椿・黄梅	膳所焼	瀬戸貫入	膳所

	5	1628	2	20	昼	驢馬の絵	不明	金ひやう	椿三色	信楽耳付肩衝	瀬戸貫入	膳所
	5	1628	3	3	朝	不明	不明	古銅筒	桃・椿	瀬戸小肩衝	島高麗	膳所
	5	1628	3	20	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	金獅子耳	薄・金盞花	信楽耳付肩衝	島高麗	膳所
	5	1628	4	16	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	古銅獅子頭耳付	河骨	信楽肩衝（後飾）	不明	膳所
	5	1628	4	23	晩	定家草枕色紙	不明	金掛	杜若・河骨	古瀬戸尻膨→筑前焼(後飾)	八島茶碗	膳所
	5	1628	4	24	朝	墨跡春屋宗園	不明	金掛	河骨	古瀬戸尻膨	八島茶碗	筑前
	5	1628	4	24	昼	墨跡春屋宗園	不明	金掛	白杜若・まゆ作	古瀬戸尻膨	八島茶碗	筑前
	5	1628	4	26	朝	定家草枕色紙	不明	金掛	菖蒲・まゆ作	瀬戸尻膨	八島茶碗	筑前
	5	1628	5	1	朝	定家草枕色紙	不明	金掛	河骨	相坂	高麗	筑前
	5	1628	5	1	不時	不明	不明	備前	河骨	不明	高麗	筑前
	5	1628	5	9	朝	墨跡春屋宗園	不明	備前	不明	在中庵（後飾）	岡山茶碗	膳所
	5	1628	5	17	朝	不明（菓子の茶会の為無しか）	不明	古銅獅子頭耳付	不明	島物ささ耳	不明	肥後
	5	1628	6	5	晩	定家草枕色紙	不明	古銅瓜象耳	かんぞう・赤むくげ	春慶尻膨	三島茶碗	肥前
	5	1628	6	14	朝	不明（菓子の茶会の為無しか）	不明	金掛	かんぞう・赤むくげ	春慶瓢箪	三島茶碗	備前
	5	1628	6	14	晩	驢馬の絵	不明	象耳・中蕪	かんぞう・かんぴ	文琳	三島茶碗	備前
	5	1628	6	16	朝	不明	不明	金掛	おもだか	瀬戸大海	不明	砂張
	5	1628	6	18	晩	不明	不明	掛	蘭	瀬戸大海	赤絵染付	金
	5	1628	9	8	朝	定家の文（さくらちるの文か）	不明	六角獅子耳	蘭	筑前焼耳付	台天目→はだか	染付
	5	1628	9	11	朝	一休の小色紙	不明	六角獅子耳	山茶花	筑前焼	八島茶碗	染付
	5	1628	9	14	朝	定家草枕色紙	不明	六角獅子耳	菊・蘭	薩摩焼(甫十瓢箪)、大瀬戸	膳所焼→八島	染付
	5	1628	9	14	晩	不明	不明	六角獅子耳	菊・蘭	花梨の中次	八島茶碗	染付
	5	1628	9	16	朝	定家草枕の歌	不明	中蕪	白玉椿・赤椿	筑前焼	膳所焼	染付
	5	1628	9	17	朝	定家草枕歌	不明	中蕪・金	菊・山茶花	筑前焼	今膳所焼	染付
	5	1628	9	19	朝	一休の小色紙（秋は猶の歌）	不明	中蕪	杜若・椿・菊	瀬戸、古瀬戸	岡山茶碗	染付
	5	1628	9	20	朝	国師（大燈国師か）	不明	金瓜なり	椿・山茶花	島物	膳所焼	染付
	5	1628	9	26	朝	定家初雪の歌	不明	金四角大	赤椿・水草	黒檀の中次	膳所焼	染付
	5	1628	9	28	晩	定家初雪の歌	不明	四角大	菊・浜菊	黒檀の中次	膳所焼はだか	染付
	5	1628	10	2	朝	定家草枕の歌	不明	四角大	菊	小瀬戸（手水後）	江戸高麗(ととや)	染付
	5	1628	10	4	晩	墨跡間極法雲、東硼道洵両筆	不明	獅子耳	咲分の菊・小椿	道休肩衝	瀬戸筒茶碗	信楽
	5	1628	10	9	晩	驢馬の絵	新釜	獅子耳	菊・椿	瀬戸	不明	信楽
	5	1628	12	7	朝	石渓心月の墨跡か（月石渓とある）	不明	六角獅子耳	不明	相坂（中立後）	瀬戸	島物
	7	1630	1	1	不明	国師（春屋宗園）一行物	不明	耳付	木瓜	梓弓（島物耳付）	後藤高麗	島物
	7	1630	1	6	朝	石渓心月の墨跡か（月石渓とある）	不明	耳付	木瓜	小瀬戸	利休ととや	島物
	7	1630	9	4	朝	墨跡無準	不明	龍耳	不明	丹波生野	利休ととや	島物
	7	1630	9	21	夕	墨跡無準	不明	金四角	不明	丹波生野	瀬戸	島物

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
寛永	7	1630	9	22	晩	牧渓雁の絵(春屋・沢庵・江月の三筆)	不明	不明	不明	丹波生野	瀬戸	備前・姥口
	7	1630	10	2	朝	墨跡無準	不明	不明	不明	生野（中立後）	高麗	備前・姥口
	7	1630	10	27	朝	墨跡仏光（無学祖元）	不明	丸鋲	不明	高畠（中立後）	大坂高麗	備前・姥口
	7	1630	11	3	朝	驢馬の絵	不明	大丸龍耳	不明	在中庵（中立後）	大坂高麗	備前
	7	1630	11	26	晩	墨跡仏光（無学祖元）	不明	備前・立鼓	不明	相坂	ととや	備前・鞠形
	7	1630	11	28	朝	石渓心月の墨跡か（月石渓とある）	不明	備前・立鼓	不明	相坂	ととや	備前・鞠形
	8	1631	2	25	朝	墨跡蘭渓道隆	不明	金筒	不明	瀬戸	高麗	備前
	8	1631	4	28	朝	驢馬の絵	不明	金筒	不明	相坂	島物高麗	備前
	8	1631	9	21	夕	不明	不明	不明	不明	生野	不明	不明
	8	1631	10	2	朝	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	8	1631	10	27	朝	不明	不明	不明	不明	畠山（中立後）	不明	不明
	9	1632	9	3	朝	一休	不明	なし	不明	在中庵（中立後）	瀬戸	瀬戸
	10	1633	5	23	朝	養叟	不明	丸龍耳	不明	古瀬戸尻膨	丹波焼	丹波
	10	1633	5	26	朝	国師（春屋宗園）一行物	不明	青磁・竹の子	不明	夏山	高麗（忘水か？）	南蛮物
	10	1633	5	30	朝	養叟	不明	金筒	不明	春慶瓢箪	染付	高取
	10	1633	6	1	朝	養叟	不明	（仏具屋）古銅六角	不明	小瀬戸（中立後）	染付	備前
	10	1633	6	17	朝	墨跡大覚禅師	不明	獅子耳	不明	小川	染付	南蛮物
	10	1633	6	17	不明	養叟	不明	信楽・立鼓	不明	小瀬戸（手水後）	染付	備前
	10	1633	7	13	朝	日観葡萄の絵	不明	四方	不明	振鼓	高麗	信楽
	10	1633	7	16	不明	養叟	不明	四方	不明	小肩衝	染付	高取
	13	1636	5	21	不明	定家さくらちるの文（将軍御茶屋）	不明	金四方	葵・白姫百合	鶴首	油滴天目	唐金
	13	1636	5	21	不明	月石渓（遠州御茶屋）	不明	金四方	葵・白姫百合	在中庵	膳所	焼物瓢箪
	14	1637	1	8	朝	清拙	不明	竹・いそのかみ	梅・椿	振鼓	染付	信楽・六角
	14	1637	1	16	朝	驢馬	不明	青磁・竹の子	梅	飛鳥川（中立後）	三角高麗	信楽・六角
	14	1637	1	21	朝	万年松	不明	金・細口	梅	春慶瓢箪	荒木高麗	信楽・六角
	14	1637	2	2	朝	北磵	不明	金・細口	椿・金盞花	さむしろ	ととや	信楽・六角
	14	1637	2	12	朝	石渓心月の墨跡か（月石渓とある）	不明	金・立鼓	辛夷・椿	小瀬戸	異風	信楽・六角
	14	1637	2	13	朝	牧渓雁の絵	不明	金掛（古銅掛）	柳・桃・椿	畠山（中立後）	染付	信楽・六角
	14	1637	10	24	朝	春屋宗園墨跡	不明	菱雲耳古銅	不明	釣舟	後藤高麗	島物
	14	1637	12	2	夜	定家初雪の歌	不明	不明	不明	伊予簾	後藤高麗	古備前
	14	1637	12	13	朝	拝領の清拙・平心	不明	菱雲耳古銅	不明	尻膨	後藤高麗	古備前
	15	1638	1	8	不時	国師（春屋宗園）一行物	不明	蝶耳付	不明	尻膨	瀬戸	備前
	15	1638	1	14	朝不時	国師（春屋宗園）一行物	不明	青磁・竹の子	不明	面壁	後藤	備前
	15	1638	3	29	朝	国師横物	不明	菱雲耳古銅	不明	尻膨	高麗	備前

	15	1638	12	29	朝	清拙	姥口	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（手水後）	利休ととや	備前
	15	1638	12	30	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	1	晩	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	3	晩	国師横物	不明	金筒	水仙	大瀬戸（中立後）	瀬戸（伯庵か）	備前
	16	1639	1	4	晩	清拙	不明	不明	不明	在中庵（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	1	5	朝	清拙	不明	不明	不明	在中庵（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	1	7	晩	清拙	不明	金筒	水仙	面壁	瀬戸	備前
	16	1639	1	9	朝	一休一行物	不明	青磁・竹の子	水仙	面壁	不明	備前
	16	1639	1	12	晩	清拙	不明	青磁・竹の子	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	13	朝	清拙	不明	青磁・竹の子	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	16	朝	清拙	不明	青磁・竹の子	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	20	晩	驢馬の絵	不明	青磁・竹の子	水仙	面壁（中立後）	ひずみ高麗	備前
	16	1639	1	21	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	ととや	膳所
	16	1639	1	23	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	1	26	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	相坂	ととや	備前
	16	1639	1	29	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	梅・福寿草	相坂	ととや	備前
	16	1639	1	30	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	梅・福寿草	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	2	3	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	2	4	朝	驢馬の絵	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜・福寿草	相坂（中立後）	利休ととや	備前
	16	1639	2	5	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	梅・木瓜	在中庵（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	2	7	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	梅・木瓜	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	2	8	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜・椿	相坂（中立後）	いふう高麗	備前
	16	1639	2	10	朝	清拙	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜・福寿草	在中庵（中立後）	長崎高麗	備前
	16	1639	2	12	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜・椿	在中庵（中立後）	長崎高麗	備前
	16	1639	2	13	朝	墨跡蘭渓道隆	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜・福寿草	在中庵（中立後）	長崎高麗	膳所
	16	1639	2	14	朝	驢馬	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙・木瓜	相坂（中立後）	長崎高麗	備前
	16	1639	2	15	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	椿	在中庵（中立後）	ひずみ高麗	備前
	16	1639	2	16	朝	驢馬	不明	古銅龍耳付あまつら	水仙	在中庵（中立後）	瀬戸筒	備前
	16	1639	2	19	朝	驢馬	不明	古銅龍耳付あまつら	紅梅	在中庵（中立後）	長崎高麗	備前
	16	1639	2	21	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	紅梅	在中庵（中立後）	ととや	備前
	16	1639	2	25	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	紅梅・椿	在中庵（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	3	2	朝	南浦紹明の墨跡	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜	在中庵	ととや	備前
	16	1639	3	2	晩	円鑑国師筆細字	不明	古銅龍耳付あまつら	木瓜	大野（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	3	5	朝	驢馬	不明	古銅龍耳付あまつら	椿・辛夷	在中庵（中立後）	瀬戸	備前
	16	1639	11	13	朝	墨跡間極法雲、東硼道洵両筆	不明	瓢箪掛	水仙・山茶花・梅	在中庵（中立後）	瀬戸	筑前（高取）

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
寛永	16	1639	11	14	不明	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	瓢簞	水仙	飛鳥川（中立後）	瀬戸	筑前
	16	1639	11	16	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	瓢簞	水仙・梅	青貝（中立後）	瀬戸	筑前
	16	1639	11	18	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	瓢簞	水仙	飛鳥川	瀬戸	筑前
	16	1639	11	21	朝	定家の歌	不明	瓢簞	水仙	相坂	ととや	筑前
	16	1639	閏11	14	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	鶴首	水仙	飛鳥川（中立後）	瀬戸	信楽六角
	16	1639	閏11	16	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	瓢簞	水仙・桔梗(菊とも？)	飛鳥川（中立後）	瀬戸	信楽
	16	1639	閏11	21	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	金・細口	梅	飛鳥川（中立後）	瀬戸	信楽
	16	1639	閏11	22	朝	円鑑国師筆細字	不明	瓢簞	梅・水仙	面壁（中立後）	長崎高麗	信楽
	16	1639	12	7	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	瓢簞	梅・水仙	飛鳥川	染付	信楽
	16	1639	12	14	朝	牧渓の朝楊、北礀の賛	不明	唐銅	水仙	飛鳥川	染付	六角信楽
	16	1639	12	15	朝	墨跡徹翁義亨大文字	不明	唐銅瓢簞	水仙	飛鳥川	染付	六角信楽
	16	1639	12	16	朝	定家筆相坂の歌	不明	金丸細口	梅	相坂	染付	六角信楽
	16	1639	12	17	朝	定家卿色紙	不明	金細口	梅	瀬戸肩衝	染付	六角信楽
	17	1640	5	22	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	口広	象耳	蓮	飛鳥川（中立後）	雲堂手染付	六角信楽
	17	1640	5	27	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	象耳	蓮	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	5	28	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	金細口	かんぞう	飛鳥川（中立後）	染付	六角
	17	1640	5	29	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	細口	かんぞう	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	6	1	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	細口	黒藤（紫藤か？）	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	6	5	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	象耳	蓮	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	6	6	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	象耳	蓮	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	6	10	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	象耳	蓮	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	7	2	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	細口	朝顔	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	7	5	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	鹿耳（古銅鹿耳）	蓮	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	7	20	朝	驢馬	不明	古銅龍耳付あまつら	沢桔梗	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	7	26	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	細口	河骨	飛鳥川（中立後）	雲堂手染付	六角信楽
	17	1640	7	27	朝	驢馬	不明	鼓胴	河骨	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	7	28	朝	驢馬	不明	古銅獅子耳付	河骨	飛鳥川（中立後）	大坂高麗	六角信楽
	17	1640	8	4	(朝)	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	青磁・蕪なし	河骨	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	8	7	朝	驢馬	不明	青磁・蕪なし	蘭	飛鳥川	染付	六角信楽
	17	1640	8	8	朝	墨跡間極法雲、東礀道洵両筆	不明	喜斎古銅	不明	飛鳥川（中立後）	染付	六角信楽
	17	1640	8	13	朝	清拙（平心）	不明	青磁・竹の子	沢桔梗・河骨	飛鳥川（中立後）	たちばな	六角信楽
	17	1640	10	17	朝	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	17	1640	10	18	朝	無準	姥口	旅衣（枕？）	水仙	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	10	19	朝	北礀	不明	竹筒	水仙・梅	飛鳥川	呉器手	筑前

	17	1640	10	20	朝	北磵	不明	旅衣	水仙・梅	飛鳥川	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	2	不明	墨跡間極法雲、東磵道洵両筆	姥口	旅衣青磁	水仙	飛鳥川（中立後）	高麗	高取
	17	1640	11	4	朝	春浦宗熙墨跡	不明	象耳	水仙・梅	在中庵	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	7	朝	円鑑国師一行物	不明	尺八写	水仙・梅	飛鳥川、春山蛙声(中立後)	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	8	朝	円鑑国師一行物	不明	尺八写	水仙・梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	9	朝	驢馬	不明	尺八写	水仙・梅	小瀬戸（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	12	晩	驢馬	不明	尺八写	水仙	飛鳥川	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	13	朝	円鑑国師一行物	不明	古銅細口	梅	飛鳥川（中立後）	不明	高取
	17	1640	11	15	朝	春浦宗熙墨跡	不明	象耳	水仙	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	23	朝	墨跡間極法雲、東磵道洵両筆	不明	深山木	水仙	平肩衝	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	26	晩	墨跡間極法雲、東磵道洵両筆	不明	深山木	水仙	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	11	28	晩	墨跡間極法雲、東磵道洵両筆	不明	深山木	水仙	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	2	朝	北磵	不明	深山木	水仙・梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	6	朝	北磵	不明	細口	梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	7	昼	定家筆相坂の色紙	不明	青磁・竹の子	水仙・梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	14	晩	なし（夜会のため）	不明	深山木	梅	瀬戸	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	16	夜	円鑑国師	不明	なし	なし	不明→鮟鱇（中立後）	高麗	瀬戸
	17	1640	12	17	晩	定家草枕色紙	不明	深山木	梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	18	朝	驢馬	不明	金細口	梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	17	1640	12	19	朝	無準	不明	竹・深山木	梅	飛鳥川（中立後）	高麗ゆがみ	高取
	18	1641	1	5	朝	定家大井川行幸の歌	不明	竹・深山木	梅	瀬戸肩衝（中立後）	橘高麗	高取
	18	1641	1	10	朝	墨跡仏光（無学祖元）	姥口	銅細口（図あり）	白梅一枝・花三輪	在中庵	高麗	高取
	18	1641	1	19	朝	定家大井川行幸の歌	不明	青磁・竹の子	水仙・梅	夏山	高麗ゆがみ	高取
	18	1641	1	22	朝	定家あはぬよの歌	不明	象耳	水仙	相坂	ととや	高取
	18	1641	3	1	朝	定家さくらちるの文	不明	獅子耳	黄梅・椿	不明	不明	高取
	18	1641	3	2	朝	清拙	不明	竹・いそのかみ	梅・椿	雲堂手	染付	六角信楽
	18	1641	3	3	晩	円鑑国師一行物	不明	金細口	紅梅	春慶瓢箪	高麗割高台	六角信楽
	18	1641	3	4	朝	北磵	不明	二重切竹・女郎花・筒	椿・木瓜	さむしろ	ととや	六角信楽
	18	1641	4	9	朝	三筆の絵賛	不明	籠	不明	春山蛙声（中立後）	大坂高麗	高取
	18	1641	4	11	朝	国師横物	不明	深山木	水仙	春山蛙声（中立後）	大坂高麗	不明
	18	1641	12	11	朝	国師横物	不明	青磁・竹の子	水仙	瀬戸肩衝（中立後）	高麗	瀬戸火口
	18	1641	12	12	朝	墨跡仏光	不明	金四方	不明	飛鳥川（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸
	18	1641	12	14	朝	円鑑国師	不明	古銅四方物	不明	瀬戸肩衝	染付	染付
	18	1641	12	14	昼	驢馬	不明	深山木	梅	瀬戸肩衝	染付	高取
	18	1641	12	19	朝	墨跡仏光	不明	金四方	不明	在中庵（中立後）	高麗	瀬戸

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
寛永	18	1641	12	25	晩	清拙（浄心、平心か？）	不明	青磁・蕪なし	不明	在中庵	不明	瀬戸
	19	1642	1	8	朝	日観葡萄の絵	不明	鼓胴	不明	釣舟（中立後）	不明	瀬戸
	19	1642	1	9	不明	日観葡萄の絵	不明	金鼓胴	不明	釣舟（中立後）	白高麗	瀬戸
	19	1642	1	21	朝	円鑑国師	不明	二重切筒	不明	春慶瓢箪	高麗	瀬戸
	19	1642	1	26	夕	虚堂弟子両筆	不明	金四方	不明	在中庵（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸
	19	1642	2	8	朝	円鑑国師　大文字	不明	女郎花・筒	不明	在中庵（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸
	19	1642	2	22	晩	月石渓　横物	不明	深山木	不明	古瀬戸（中立後）	染付	大瀬戸
	19	1642	3	6	晩	円鑑国師	不明	銅象耳	不明	飛鳥川（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸
	19	1642	3	29	晩	南浦紹明の墨跡	不明	銅象耳	不明	瀬戸（比丘貞か）	高麗ひずみ	瀬戸
	19	1642	4	6	朝	国師	不明	釣舟・砂張	不明	高取茶入	不明	高取
	19	1642	4	13	晩	定家草枕色紙	不明	金四方	牡丹・椿	小瀬戸	高麗	高取
	19	1642	4	18	朝	大明国師　江月和尚加筆	不明	竹一重切	牡丹・山吹	玉柏	高麗ひずみ	高取
	19	1642	4	26	朝	大明国師　江月和尚加筆（柏樹）	不明	銅釣舟	藤・椿	高取	高麗	高取
	19	1642	8	22	朝	無準の掛物（中立後）	不明	竹一重切	不明	飛鳥川（中立後）	瀬戸	高取
	19	1642	閏9	15	朝	春浦宗熙	不明	金の瓶	不明	在中庵（中立後）	瀬戸	高取
	20	1643	3	13	朝	一休和尚一行物	姥口唐金	金の鹿耳	不明	飛鳥川	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	3	13	晩	一休和尚一行物	不明	古銅	不明	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	3	14	晩	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	3	16	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	3	27	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	3	29	朝	春浦宗熙	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	長崎高麗	瀬戸
	20	1643	4	1	晩	両筆梁楷　驢馬、国師賛	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	長崎高麗	瀬戸
	20	1643	4	4	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	7	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	可中（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	8	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	飛鳥川（中立後）	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	4	9	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	在中庵（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	12	朝	一休和尚一行物	不明	鼓胴	不明	玉柏（中立後）	高麗	瀬戸
	20	1643	4	18	朝	一休和尚一行物	不明	不明	不明	瀬戸肩衝（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	22	夜	一休和尚一行物	不明	銅鹿耳	不明	飛鳥川	井戸	瀬戸
	20	1643	4	23	夜	両筆梁楷　驢馬、国師賛	不明	なし	なし	瀬戸肩衝（中立後）	不明	瀬戸黄傾
	20	1643	4	25	朝	一休和尚一行物	不明	銅管耳	不明	飛鳥川（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	26	朝	月石渓　横物	不明	銅管耳	不明	瀬戸肩衝（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	4	29	朝	一休和尚一行物	不明	銅管耳	不明	瀬戸肩衝	井戸	島物
	20	1643	5	23	朝	大明国師　江月和尚加筆	不明	銅管耳	不明	瀬戸肩衝（中立後）	瀬戸	島物

	20	1643	5	26	朝	日観葡萄の絵　季潭宗潭の賛	不明	青磁・竹の子	不明	玉柏（中立後）	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	5	27	朝	日観葡萄の絵　季潭宗潭の賛	不明	銅管耳	不明	春慶瓢箪（中立後）	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	5	30	朝	日観葡萄の絵　季潭宗潭の賛	不明	銅管耳	不明	肩衝（中立後）	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	6	3	朝	大明国師　江月和尚加筆	不明	銅管耳	不明	肩衝（中立後）	井戸	瀬戸
	20	1643	7	27	朝	一休和尚一行物	不明	銅鋲	不明	肩衝（中立後）	高麗	瀬戸
	20	1643	8	8	朝	両筆梁楷　驢馬、国師賛	不明	銅丸	不明	飛鳥川	雲堂手染付	瀬戸
	20	1643	8	26	朝	一休和尚一行物	不明	銅丸	不明	肩衝（中立後）	高麗	瀬戸
	20	1643	9	3	朝	一休和尚一行物	不明	なし	不明	肩衝（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	11	9	朝	虚堂	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物・角	井戸	瀬戸耳付
	20	1643	11	11	晩	虚堂	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物・角	不明	瀬戸耳付
	20	1643	11	12	朝	虚堂	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物・角	橘高麗	瀬戸耳付
	20	1643	11	16	朝	虚堂	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物・角	橘高麗	瀬戸耳付
	20	1643	11	17	昼	円鑑国師	不明	丸鋲	水仙	島物・角	高麗ひずみ	瀬戸耳付
	20	1643	12	2	朝	虚堂	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	12	10	朝	虚堂	不明	青磁・竹の子	水仙	在中庵（中立後）	江戸井戸	瀬戸耳付
	20	1643	12	14	晩	円鑑国師	不明	古銅丸鋲・知斎	水仙	島物（中立後）	瀬戸	瀬戸耳付
	20	1643	12	18	晩	虚堂	不明	鋲	水仙	在中庵（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	12	21	朝	一休和尚一行物	不明	丸銅	水仙	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸塗蓋
	20	1643	12	23	朝	円鑑国師	不明	瓶・勘平	水仙	大津（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	12	23	晩	円鑑国師	不明	瓶・勘平	水仙	大津（中立後）	瀬戸	瀬戸
	20	1643	12	26	朝	円鑑国師	不明	瓶口	水仙	大津（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸耳付
	21	1644	1	1	晩	定家大井川行幸の歌	不明	不明	不明	口広	五器手ひずみ	瀬戸星合
	21	1644	1	3	晩	定家大井川行幸の歌	不明	青磁・竹の子	梅	大津	長崎高麗	瀬戸星合
	21	1644	1	5	晩	定家大井川行幸の歌	不明	瓶口	水仙	大津	橘高麗	瀬戸星合
	21	1644	1	6	晩	虚堂	不明	瓶口・勘平	ふくつく・水仙	大津（中立後）	瀬戸	瀬戸星合
	21	1644	1	23	朝	円鑑国師	不明	竹一重切筒・雪折	ふくつく・梅	大津	不明	瀬戸星合
	21	1644	2	4	晩	虚堂	不明	青磁・蕪なし	梅・白玉	瀬戸宗貞（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸星合
	21	1644	2	5	朝	虚堂	不明	瓶口	梅・白玉	大津（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸星合
正保	2	1645	10	11	朝	春屋宗園横物（四喝）	瓢三角	金管耳	水仙	凡（中立後）	瀬戸弥兵衛	高取
	2	1645	10	12	朝	春屋宗園横物（四喝）	瓢三角	金六角	水仙	凡	瀬戸弥兵衛	瀬戸ひずみ
	2	1645	10	13	朝	春屋宗園横物（四喝）	不明	丸	水仙	凡	瀬戸弥兵衛	瀬戸ひずみ
	2	1645	10	19	朝	芦雁　賛三筆	不明	丸	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	高取
	2	1645	10	20	朝	虚堂	不明	丸・雉子紋有・無耳	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	10	21	朝	虚堂	海老耳	丸花瓶口	水仙・金盞花	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	10	23	朝	虚堂	達磨	丸・古銅・蝶耳	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ

元号	年	西暦	月	日	時刻	掛物	釜	花入	花	茶入	茶碗	水指
正保	2	1645	11	1	朝	芦雁　賛三筆	不明	丸	水仙・金盞花	凡（中立後）	江戸井戸	高取
	2	1645	11	8	朝	墨跡徹翁義亨横物	不明	丸金	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	11	20	晩	虚堂	不明	丸金・おい喰耳	梅	凡	瀬戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	11	25	朝	春屋宗園横物	不明	金六角	梅・椿	野田（中立後）	瀬戸	高取
	2	1645	12	2	昼	虚堂	輪口	不明	不明	野田	高麗白手	高取
	2	1645	12	7	朝	虚堂	不明	管耳	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	8	朝	虚堂	不明	深山木	水仙	凡（中立後）	五器手亀の甲	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	8	昼	円鑑国師一行物（万年松？）	（輪口）	青磁・蕪なし	水仙	野田	瀬戸塩	高取
	2	1645	12	12	朝	墨跡間極法雲、東磵道洵両筆	不明	管耳	水仙	凡（中立後）	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	14	朝	羅窓の雁の絵	不明	管耳	水仙	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	18	朝	虚堂	不明	瓶口・勘平	水仙	不明	瀬戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	21	朝	虚堂	不明	丸・大口	水仙	不明	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	2	1645	12	21	不明	虚堂	不明	六角	水仙	不明	江戸井戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	1	27	朝	虚堂	不明	管耳	梅	小川（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	1	28	夜	一休和尚一行物	不明	不明	不明	小川（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	2	4	朝	春屋国師横物	不明	六角	梅	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	2	11	朝	春屋国師一行物	輪口	丸（金・雉子紋有）	梅・（日野）椿	口広（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	2	23	朝	虚堂	不明	石火矢口・久保	しゃが	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	3	7	朝	一休和尚一行物	不明	石火矢口・久保	牡丹	野田	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	3	25	朝	羅窓の雁の絵	不明	大口	百合・芥子	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	7	朝	虚堂	不明	石火矢口・久保	白杜若・芥子	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	15	昼	春屋国師一行物	不明	大口	河骨	凡	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	17	朝	虚堂	不明	大口	河骨	飛鳥川	瀬戸久保	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	23	朝	虚堂	不明	石火矢口	白杜若・河骨	飛鳥川（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	26	朝	松花堂昭乗筆驢馬の絵（賛三筆）	輪口	石火矢口・久保	河骨	口広（中立後）	雲堂手染付口紅	瀬戸ひずみ
	3	1646	4	28	昼	定家さくらちるの文	不明	石火矢口	河骨	野田（中立後）	瀬戸久保	瀬戸ひずみ
	3	1646	5	8	朝	一休和尚一行物	輪口	石火矢口	杜若	野田	瀬戸	瀬戸ひずみ
	3	1646	5	28	朝	利休の文	小輪口	金大口	不明	畠山	雲堂手染付口紅	高取
	3	1646	6	4	朝	一休和尚一行物	不明	大口	蓮	野田（中立後）	瀬戸	高取
	3	1646	6	7	昼	春屋国師一行物	不明	大口	蓮	野田（中立後）	瀬戸	高取
	3	1646	6	8	朝	春浦宗熙墨跡	不明	大口	蓮	春慶鮟鱇（中立後）	瀬戸	高取
	3	1646	6	11	朝	一休和尚一行物	不明	大口	蓮	野田（中立後）	瀬戸	高取
	3	1646	6	19	朝	墨跡徹翁義亨（虎林）	不明	大口	蓮	唐耳付（南都屋道顕茶入）	雲堂手染付	瀬戸ひずみ
	3	1646	6	20	朝	墨跡徹翁義亨	不明	花瓶口	蓮	口広（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ

3	1646	7	2	朝	墨跡徹翁義亨	不明	大口	蓮	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	4	晩	墨跡徹翁義亨	不明	大口	蓮	野田	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	5	朝	墨跡徹翁義亨	不明	大口	（白）蓮	凡（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	6	晩	虚堂	不明	大口	（白）蓮	野田	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	13	朝	利休の文	姥口新	花瓶口	蓮	唐耳付（南都屋道顕茶入）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	16	朝	春屋国師墨跡（中立後）	不明	深山木	櫓	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	19	朝	墨跡徹翁義亨	不明	石火矢口	千重の蓮	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	22	朝	驢馬、国師賛	不明	大口	蓮	胴高（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	29	朝	虚堂	不明	大口	沢桔梗	野田（中立後）	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	7	30	昼	国師細字の物	不明	石火矢口	沢桔梗	野田	瀬戸	瀬戸ひずみ
3	1646	8	2	晩	江月横字	四方釜	竹二重	なし	瀬戸るい座	瀬戸か	信楽
3	1646	8	16	朝	羅恣の帷の絵（中立後）	不明	深山木	櫓	口広（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸ひずみ
3	1646	8	20	朝	春屋国師賛物	不明	石火矢口	杜若	飛鳥川（中立後）	高麗ひずみ	瀬戸はけ火口
3	1646	8	21	朝	春屋国師賛物	不明	石火矢口	杜若	小川（中立後）	高麗ひずみ助進	瀬戸はけ火口
3	1646	12	22	朝	春屋墨跡	水受様有	胡銅	杜若	瀬戸（手水後）	島高麗	不明
4	1647	1	22	不明	春屋文字	達磨	大平・枯竹の大竹	水仙・花二輪	瀬戸	島高麗	不明

りの遅桜あらはれ見ゆるふたつ三つ四つ」という歌によるからであるという。つまり「夏山の緑に混じってちらほら見える遅桜」という「稀少なもの」に見立てられての命銘であるのがその理由であるとされている。真偽の程はともかく、氏はここで「銘が茶会のテーマに関わっている」という前提で論じていることに注意しなければならない。氏の立場は、銘の重要性を積極的に評価し、そこに意味を見出そうとするものである。しかし、その前に遠州の時代に果たして銘が茶会の重要なテーマを決める役割を果たしていたのかといった疑問がどうしても残るのである。そこで以下歌銘がつけられた茶会について銘から茶会の主題に関する何らかの意味を見出すことが可能か否かを検討する。

まず、一番使用頻度が高かった「飛鳥川」についてであるが、これは「昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」という『古今和歌集』冬部に収載された春道列樹の歌から命銘された瀬戸金華山窯茶入である。『茶道事典』によると「伏見においてこれを再見した時、昔見たより古色を帯びていたことと、過ぎた年月を思い合せ」、遠州が命銘したという（三八頁、小田栄一氏執筆担当）。「飛鳥川」の初出は寛永十四年一月十六日朝の会であるが、この会には末次平蔵政直と五十嵐宗林が参会している。ここには、銘の季節は読み取れない。なぜなら本歌は冬の歌である。あえてそこに意

味を見出そうとすれば、「飛鳥川」という歌ことばにもう少し重点を置いた解釈が必要となってくる。「飛鳥川」は和歌によく使われる歌枕である。有名な歌の一つに『古今和歌集』雑部にあるよみ人しらずの歌「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」がある。あるいは、『古今和歌集』恋部にあるよみ人しらずの歌「飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ」といった歌もある。このように「飛鳥川」という言葉は、絶えず変化する淵瀬の有様から人の世の中の移ろいやすさを託す歌枕になったのである。つまり、「飛鳥川」という銘を聞けば必然的に「世の中の変りやすさ」を想起することになる。遠州がもし銘を茶会のテクストを示すツールとして用いたならばこの点に注目すべきであると思われる。絶えず変転する世の中、つまりそれは「無常」の精神を表すものであると同時に、茶道でよく使用される「一期一会」の精神にも通じるものがあるのである。ちなみに遠州の辞世は「昨日といひ今日と暮してなすこともなき身の夢のさむるあけぼの」であって、「飛鳥川」の本歌と一、二句が全く同じである。遠州がこの歌を気に入っており、それを本歌とした「飛鳥川」を好んで用いたのはやはり、戦国時代を生き抜き、世の移り変りの激しさを見て世の無常を感じていたからに違いない。

では、他の歌銘についてはどうであろう。以後上記した順にそれを見ていこう。

まずは「釣舟」。これは『古今和歌集』羇旅部にある小野篁の歌「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよあまの釣舟」を本歌とする古瀬戸の茶入である。『茶道事典』は、遠州が藤堂家の八十島勘兵衛から求め、「わたの原……」の歌から命銘したとしている（九五四頁、小田栄一氏執筆担当）。しかし、もし「釣舟」を歌ことばとして見た場合はどうであろうか。『新古今和歌集』恋部よみ人しらずの歌「さしてゆくかたはみなとのうらかたみうらみてかへるあまの釣舟」や、同集秋部の藤原家隆の歌「秋の夜の月や雄島のあまの原あけ方近き沖の釣舟」などがすぐに想起される。つまり、「釣舟」は不安定であるのでそれを自らの感情に託して歌に詠まれる傾向がある。ここでもテーマは「無常」である。

次に「相坂」。これも『古今和歌集』雑部にある「相坂の嵐の風は寒けれどゆくへしらねば侘びつつぞぬる」を本歌とする古瀬戸茶入である。「相坂」はその言葉が「逢ふ」に通じることから「逢ふ」に掛けて詠まれることが多い。「相坂」は『小倉百人一首』でもおなじみの清少納言の歌「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に相坂の関はゆるさじ」や蟬丸の歌「これやこの行くもかへるもわかれては知るも知らぬも相坂の関」など「相坂の関」という形で歌に詠まれることが多い。これは言うまでもなく、平安遷都後相坂が都から東国への直接の出入り口となったことによる。ここでテーマを求めようと思えば、それは「関」ということかもしれない。茶席では

しばしば「関」の一字の掛物が掛けられる事がある。これは禅の公案によるものであるが、関は通らなければ意味がないが、かといってただ通るだけではこれも意味がない。関は悟りに至る重要な関門なのである。あるいはなかなか逢えない関があることを訴えたものか。だが、客組などからは後者のような解釈はしにくいので、「相坂」という銘に意味があるなら、前者のような禅的な解釈が適当かと思われる。

「夏山」について。「夏山」は上述したように、「夏山に青葉交りの遅桜あらはれ見ゆるふたつ三つ四つ」を本歌とした瀬戸茶入である。「夏山」という言葉はどのように歌に詠まれるのであろうか。久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、平成十一年五月)によると、それには二つのパターンがあるという。一つは『拾遺和歌集』夏部凡河内躬恒の「行末はまだ遠けれど夏山の木の下かげぞたちうかりける」という歌に代表されるような「納涼」を主題とするもの。もう一つは『後拾遺和歌集』恋部藤原長能の「汲みて知る人もあらなん夏山の木の下水は草がくれつつ」という歌に代表されるような「秘めた恋」の比喩に使われる場合である。「夏山」の茶入が使用されたのは二回あり、一つは寛永十年五月二十六日、もう一つは寛永十八年一月十九日のことである。初めの茶会は納涼の意味でも通りそうであるが、二回目は不可能である。一回目の茶会に銘が機能しているならば宮嶋氏の解釈でよいと思う。ただ二回目の茶会になると氏のいう「季節感」や「稀少性」はその道具組からは感じ取れない。この会は生憎参会者が不明なため客組からの推測もできない。それ故「秘めた恋」とまではいかなくとも「秘めた思い」といった主題があり、それに該当するような客が参会したのかもしれないが、これは記録がないためその真相はわからない。

次に「伊予簾」について。これは、『詞花和歌集』恋部の恵慶法師の歌「逢ふ事はまばらに編める伊予簾いよいよ我を侘びさするかな」を本歌とした古瀬戸尻膨茶入である。「伊予簾」を詠んだ歌は少なく、この歌が最も有名なものである。後は『新撰和歌六帖』や『夫木和歌集』に載る葉室光俊(真観)の「年をへて世にすすけたる伊予簾かけさげられて身をば捨ててき」が少し知られる程度である。いずれの歌もまばらな簾が侘びた感興をさそうものである。恵慶法師の歌の方は逢うことがまばらに編んだ簾のように稀で、それが私を一層つらくさせることだ、といった内容の歌である。この茶入を用いた茶会は寛永十四年十二月二日のことであるが、江月和尚を正客にし、瀧本坊そして志水久古の三人が客であった。これらの人物は遠州の茶会の常連であるから人を乞う意味で用いた可能性は低い。むしろ、このような茶入は稀にしか目にする事ができないし、一度見たらそれが恋しくなって一層見たくなるものですよ、といった意味を遠州はこの茶入で示したのかもしれない。

「玉柏」について。これは「難波江の藻にうづもるる玉柏あらはれ

てだに人をこひばや」という『千載和歌集』恋部源俊頼の歌を本歌とするものである。『千載和歌集』恋部の巻頭歌であり、初恋の心を詠んだ歌である。「玉柏」とは柏の美称で美しい柏という意味である。「玉柏」を植物の「柏」という意味で使った歌としては、例えば『金葉和歌集』夏部源経信の「玉柏庭も葉広になりにけりこやゆふしでて神まつるころ」から『千載和歌集』冬部源国信「み山辺の時雨れてわたるかずごとにかごとがましき玉柏かな」など、四季を通じて詠まれる。だからあまり四季に関係ないかと思われる。しかし、『新日本古典文学大系』（岩波書店）では、玉柏は「石」のことであるとする（『千載和歌集』平成五年四月、一九八頁脚注）。これは『和歌色葉』や『色葉和難集』、『八雲御抄』などをその根拠としている。いずれにせよ歌の解釈から意味づけを行うと、埋もれていたこのようなすばらしい茶器を秘めずにもっと出したいものだよ、といった意味が込められているものと考えられる。

最後に「可中」。これは、『古今和歌集』雑部在原行平の歌「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ」を本歌とする古瀬戸茶入である。雄山閣編『図解茶道具事典』（雄山閣出版、平成八年一月）によると、この茶入には「糸切上に木葉上の鶉斑の釉溜があり、これを木葉の病葉に見立てた名であるが、小堀遠州が病葉の字ではおもしろくないとして」上記の歌によって「可中の字に改めたといわれる」という（四九九頁）。この茶器を使用した意図はほとんど想像が付かない。あえて言うならば歌の解釈から、このようなわびた茶入もありますよといった意味か。

以上、遠州の茶会において銘が茶会のテーマを提示するツールであると仮定して、その意味を探ってきた。彼が本当に銘を効果的なツールとして使用したかどうかはもう少し慎重な議論が必要と思われる。しかし、全くその可能性がないとはいいきれないものがあることは確かである。だから、宮嶋氏の論も完全に否定することはできない。但し、私が関心をもっている恋歌から命銘された茶器についていうと、その使用例が少ないこともあってあまりはっきりしたことは言えない。今後遠州の茶会記だけでなく他の茶会記でも調査を行い、解明を試みたいと考えている。

おわりに

以上述べてきたことをもう一度まとめておこう。

一では、①茶道における掛物に恋歌を用いてはならないという考えは、現在まで続いている事、②それは大名系の茶書には一切見られず、千家流の茶書にのみ見られる禁止事項である事、などが明らかになった。

二では、①恋歌が掛物に掛けられた茶会が実際にある事、②しかしそれは茶書に書かれた範囲を逸脱するものではなく、それぞれ使用された意味の説明が可能な事、などがわかった。

三では、銘に関する考察を行ったが、①銘に恋歌が用いられるものが少なからずあること、②銘の約半数は小堀遠州によって命銘されており、彼は『古今和歌集』『新古今和歌集』『伊勢物語』などを中心に銘をつけている事、③彼が銘の本歌とした歌には大和、山城、近江など彼の生涯の中で関係の深い土地の歌枕が多く含まれている事、④銘が茶会のテーマを提示するツールとなっている可能性が遠州の茶会にもある事、などを指摘した。

以上の考察の結果、特に第一章と第二章から茶道を図1のような概念図として示すことができる。

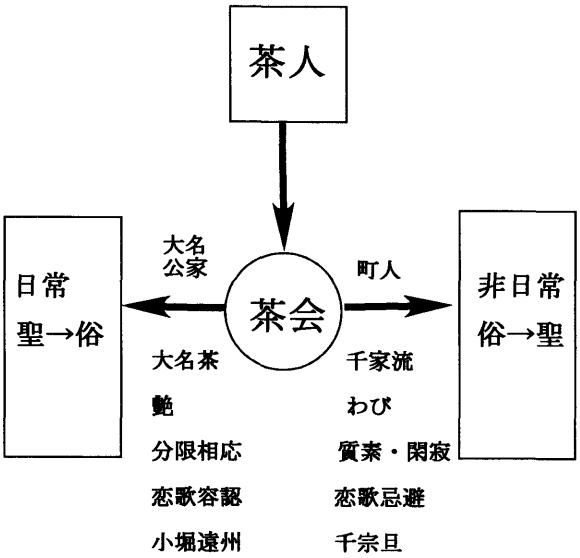

図1　茶道の概念図

つまり、町人を主な門人とする千家流と、大名家で行われたいわゆる大名茶では、茶会の役割が全く逆のベクトルを持っていたのではないかと考えられるのである。すなわち、大名茶においては、武士（儒教的倫理観を持った者）から一人の人間へと解放される場であり、聖から俗へと移行する場がすなわち茶会であった。逆に千家流の茶では、俗人から聖人へと変る場が茶会であったのではないか。

では、それらを適当な概念に置き換えるとどのような言葉で表現すればよいのだろう。この作業は容易なことではないが、今大名茶に対して仮に二つの概念を考えてみた。一つは「分限相応」の茶である。大名は大名らしい茶を行わなければならないという考え方である。幕末の話ではあるが、高橋義雄が『近世道具移動史』（慶文堂書店、昭和四年十二月）に次のようなエピソードを記している。金座の誉田源左衛門は当時幕末金銀の吹替えで一日百両の収益があったと噂されるほどの人物であった。彼は一生に一つ名物茶入を所持したいと願っていたそうであるが、「当時名物茶器が悉く諸大名に占有せられて民間に移動しなかつた」事、そして「名物は五位以上の身分でなくては使用すべき者でない」という考え方があったことから、「何やら軽き名物茶入を手にいるゝに過ぎなかつた」という（一二〜一四頁）。つまり、大名は名物道具をもって茶を行うことが分限相応であり、反対に町人達はいくら金があっても名物を用い

ることは難しかったのである。勿論町人達にも分限相応の意識はあったろうが、武家の方がより意識的ではなかったかと思われるのである。

もう一つ、恋歌の世界を排除せず、時には活用したところから大名茶を「艶」と捉えることはできないであろうか。これは何も私だけの考え方ではない。小堀宗実氏は『茶の湯の不思議』（生活人新書、NHK出版、平成十五年六月）において、「綺麗さび」と評されることの多い遠州の茶について次のように述べている。

> 利休が削りに削ったわび・さびの茶に、「艶」を与えたのが遠州の「綺麗さび」だったと思います。その「艶」とは、客観性、バランス、調和と言い換えることができるでしょう。（二一二頁）

勿論ここには恋歌のことなど語られてはいないけれども、小堀氏が評した「艶」という言葉がいかにも的を射た表現であるように私には思えるのである。なぜなら、『古今和歌集』以来日本の和歌の柱は四季と恋であった。それは日本文化の骨格であると言っても過言ではない。時代によりその一方だけが強調される場合もあるが、両者は必ず並存してきた。利休が目指した「わび茶」はともすればそれらの要素を茶道から排除しかねなかった。事実これまで見てきたように、恋は宗旦以後の千家流では排除されてきた。遠州はそれではバランスが悪いと考えたのではなかろうか。それが意図的であったかなかったかはわからないが、結果的に大名茶によって恋は茶道からかろうじて排除されずに今に到ったのである。この「艶」の要素が遠州以後の大名茶のもう一つの重要な概念となっていたのではないだろうか。

ところで本論稿では、便宜上公家を大名茶と同じとしたが、それは『槐記』において予楽院近衛家熙がことあるごとに千家の茶（すなわち世間において利休の茶と称するもの）を批判しているからである。例えば、享保十四年十一月の条には次のような利休批判がなされている。

> 世間ニ何事ニモセヨ、スル程ノ事ヲ利休々々ト云ヘドモ、利休ヨリ後ニ出来タル事モ多シ、（中略）庭ヲ敷松葉シタルコトハ、織部ヨリ始レリト云、客ヲ口切ニ呼タル朝ノ寒気甚シキニ、土地氷リテ、霜柱ノ立タルヲ、見苦シトテ、松葉ヲ敷タルト云、
>
> （『古典全集』第五巻、三一五頁）

この他にも『槐記』にはいくつかの利休批判と、当世世間で行われている茶に対する批判がなされている。したがって実質的に千家とは目指す方向性が違うことははっきりしている。したがって本論

稿では一応大名茶と同様に扱っておく。

それに対し、千家流は大名茶と反対の方向を目指した。それは「わび」という言葉で表現できることは、先学や歴代の千家流家元が強調していることからも明らかであろう。そしてそれは質素・閑寂をモットーとする茶である。

先にのべたように、「わび茶」は、歌の世界とりわけ恋歌の世界を排除した。それは千家の茶を学ぼうとする多くの人々の要望からなったものかもしれない。西川如見『町人嚢』(享保五年頃の成立)の巻四には茶道が「兎角奇麗風流の心を用る物なれば、貴人高位の楽しみにして、町人・百姓の翫ぶべき道にはあらず」と町人が茶道をするべきではないと述べた後、「尤詫茶湯やらんにて、竹の筒、瓢簞のわれにてこがしを呑ても、其心閑静清浄ならば、是をまことの茶人とはいへりといふ人もあれ共」と「詫茶」で「其心閑静清浄」ならば誠の茶人という人もあった、という記載が見える。[28] すなわち、町人階級に茶道を教える場合、少なくとも表向きには「閑静清浄」な茶である必要があったのである。

今でも私達一般の者は、茶会に行くと何かしら清らかな心になったような気持ちにならないだろうか。例えば教会へミサに出かけたり、神社に参詣するが如く。江戸時代の町人もそれを望んでいたのではないか。人間には聖なるものを壊したくない、あるいは俗化してほしくないという願望がある。またそれを何らかの形ではっきりと明文化して欲しいという欲求もあるだろう。そういった人々の要望が彼らを恋歌排除の方向に向かわせた可能性も大いにあると思う。[29]

ところで、本論稿でも見てきたように、恋歌は効果的に使えば非常に有効な武器になる。つまり、茶会をより印象深く特別なものにする事が可能なのだ。反対に下手に使えば毒となる。茶会がいやしく、嫌味なものになる。よほどの巧者でないと使用するのは危険かもしれない。だから恋歌を初めから排除するのも一つの安全策ではある。とはいえ、恋歌に有効性がある限りはもっと恋歌の意義を見直してもよいのではないか、というのが私の意見である。日本の文化といえば四季感の豊かさだけが取り上げられ、論じられることが多いが、それと共に長い恋の歴史があることを忘れてはならない。その両者をうまく配合してこそ真の意味で日本文化を継承しているといえるのではないだろうか。

最後に反省を述べて本論稿を終えたいと思う。それは千家流の茶道において恋歌が何故好まれなかったのかについて本論稿では今ひとつ深く考察する事ができなかったことである。ただしこれは、歌道をはじめとする諸芸道で恋歌がどのように扱われてきたか、その事例を多くして考察することで何らかの知見が得られるものと思われる。

一例を挙げておくと、かつて書において恋歌が禁止される場合があった。それは、扇面に和歌を書く際に見られるものである。例え

ば、藤原教長の口伝を海住山正三位長房が記録した『筆法才葉集』（早川純三郎『日本書画苑』第一、国書刊行会、大正三年十月）には、次のような記述がある。

一　扇ニ詩歌書様ノ事、扇ニ物ヲカクニ、絵アラバ絵ノ意ヲ可書也、又主ノ扇ヲ給テ恋、別ノ詞ヲ書ク事ナカレ、祝言ナル事ヲ極テ薄ク可書ナリ、（八三頁）

また、同様の記述が『麒麟抄』にも見える。[30] ここで言う「主ノ扇」とは天皇の扇であると思われる。なぜなら同様の記述が『夜鶴庭訓抄』（平瀬雨邨他著『精萃図説書法論』第九巻、浩文社、平成三年七月）にもあってそこには「君の御扇には、祝の詩歌を書くべし」とあるからである。なぜ天皇の扇に恋や別離の歌を書いてはいけないかは、今ははっきりとした理由が見つからない。今後の検討課題としておきたい。

他の事例としては、日本舞踊の扇についての決まりがある。日本舞踊は大きく分けると①祝儀もの、②本行もの、③狂言もの、④変化（へんげ）もの、⑤道行もの、の五種類にわけられるが、このなかで道行ものには扇は使用されないという。[31] 道行とは言うまでもなく、芝居で相愛の男女が旅をする場面を指す。つまり、恋と別れを表現している。扇は祝言や、あるいは俗世からの離脱をするときに用いられる。また、諸説あるが初夢に見て縁起の良いものに「一富士、二鷹、三茄子」ということがよく言われるが、四は扇である。このことからも扇は縁起の良いものとされてきた事が容易に理解できるであろう。だが、恋と別れは目出たくない。恐らくそういった理由から「道行もの」に扇を用いないものと推察される。

茶の掛物も元は仏画から発展してきたということを考えると、そこに恋や別れを入れることは憚られたのかもしれない。そう思って表1を眺めてみると離別の歌が使用された茶会はたった一回しかない。それは『槐記』の享保十三年四月二十九日の茶会である。この会には『古今和歌集巻八所載の凡河内躬恒の歌「かへる山なにかは（『古今和歌集』では「ぞ」―筆者注）ありてあるかひは来てもとまらぬ名にこそ有けれ」が使用された。これはその詞書から越の国へ行った人が年を経て帰ってきたものの、また越の国に行ってしまうという時に詠んだ歌である。「かへる山」という名があるのにどうして又行ってしまうのか、という恨み言を言っている歌である。この掛物が何故かけられたかはわからないが、『槐記』には、この歌を色紙に書いたのはかの百人一首の参議雅経であるという旨の記述が見えるから歌の意味よりも筆者の徳を重んじた結果であるかと思われる。

それに加え、恋歌の特徴としてよく知られているように恋の喜びを歌ったものが非常に少ないということがある。特に『古今和歌

集』以降の恋歌には皆無といってよいほどである。つまり、恋は最終的に成就しないのが通例である。当然ながらそのような境遇を嘆く歌が多くなってくる。ただ、恋の初期の段階、あるいは恋が冷めていない状態では逢いたいという気持ちや待ちわびる気持ちの歌が少なからず見られるのもたしかである。そういった限られた表現をしているものだけしか、茶の掛物にできなかった。例えば「こぬ人を……」などはその適当な例といえよう。以上をまとめると日本の恋歌に成就の歌が少ないこと（つまり縁起がよくない）、そして限られた表現を伴ったものしか掛物として効果を発揮できないことも茶道において恋歌が避けられた一つの原因かもしれない。今後解明しなければならない重要な課題である。

この反省を今後の課題として本論稿を終えることにする。

注

（1）例えば、野生庵梅園「茶道と和歌」（「茶と花」宝雲舎、第二巻九号、昭和八年九月から第三巻第三号まで七回にわたって掲載）、同氏「茶道と和歌」（『茶道』全集巻の十三特殊研究篇、創元社、昭和十二年四月）、生形貴重『茶心の背景―和歌と仏道』（河原書店、平成八年五月）、井上宗雄「和歌と茶の湯」（千宗室監修『茶道学大系』第九巻、淡交社、平成十三年二月）などがある。

（2）これと同じ内容のものが、同じく江岑宗左によって書かれた『逢源斎書』（千宗左監修・千宗員編『江岑宗左茶書』主婦の友社、平成十年十月）にある。それは、次のようなものである。

一、恋の歌は掛候事、休は不被成候、定家も三幅在之、
○こぬ人をまつほの浦の夕なミニやくやもしほの身もこかれッゝ
○八重もくらしけれるやとのさひしきに人こそ見へね秋はきにけり
○わたのはらふりさけ見れはかすかなる三笠の山ニ出し月かも（三七頁）

表記の違い以外で、両者の違いを何点か挙げると次のようになる。①歌の順番が違う（『江岑夏書』は、わたのはら→八重もくら→こぬ人をの順）②〈こぬ人を〉の歌の三句目が「夕なミニ」になっている（『江岑夏書』は「夕なきに」）③〈わたのはら〉の歌の二句目が「ふりさけ見れは」、五句目が「出し月かも」になっている（『江岑夏書』では二句目「ふりさき見れは」、五句目「雪ハふりつゝ」）。『逢源斎書』の「解題」（一八頁）によると、『江岑夏書』と『逢源斎書』は草稿本と清書本の関係にある可能性が非常に高いという。また、成立はその関係が成り立つとすれば寛文三年八月十七日以降、江岑が没する寛文十二年までであるという。恋歌である〈こぬ人を〉の歌を最初に持ってきたのは意味があるかもしれない。意味があるとすれば、それは本章で述べる紀州徳川家との関係からであろう。

(3) 彼の著作には『風流生活』(第一書房、昭和七年一月)や『風流百話』(創元社、昭和八年三月)といったものがある。さらに、彼の絶筆が「風流一生涯」という文字であったことなどを考え合わせると、いかに「風流」に生きるかが、彼の生涯の中心的な命題であったことが推察できるであろう。

(4) この『喫茶敲門瓦子』は、その後『近代茶道への軌跡—裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』(茶道資料館、平成十四年三月)に全文が翻刻されている(二四七〜二七四頁)。

(5) 千宗旦が以後の千家流茶道に大きな影響を及ぼしたことは次の一例をもっても明らかである。遠州流十三世家元である小堀宗実氏はその著『茶の湯の不思議』(生活人新書、NHK出版、平成十五年六月)において、袱紗を付ける位置について興味深い見解を述べている。武家の流派(遠州流、石州流など)では袱紗を右腰につけるが、千家流の流れを汲む流派では左腰につけ、点前を行う。この点については、武家の流派は刀を左にさすので、刀をさす方には袱紗をしない、といった説明が一般的によく用いられる。しかし、小堀氏は『槐記』にある「宗旦ハ生付キ左ニテアリシ故ニ……」という一文から、宗旦が「左利きであったから袱紗を左につけたのであり、宗旦から広がった流儀は左腰に袱紗をつけているというわけなのです」としている(八六〜八七頁)。恋歌を禁止する習いも宗旦から派生した流派に多く見られることから、この点についても宗旦の影響が強いと考えられる。

(6) 末宗廣『茶書の研究』(『末宗廣著作集』I、思文閣出版、昭和五十六年一月、五七七頁)。この批評は、『茶道月報』二二五号(茶道月報社、昭和四年九月)に掲載されたものである。

(7) 現在翻刻されている大名系(例えば遠州流や石州流など)の茶書をすべて調べたが、恋歌を禁止するような記述は見られない。ただ、近世も半ば以降になると千家の流れを汲む茶人たちが大名の茶頭として指導を行うことがあるので、すべての大名が恋歌を禁止したりするような考えをもたなかったとは現在のところ言い切れない。

(8) 表1は主に年代順、茶会記単位で配列した。また、茶会記の名称は、既に通用しているものである場合はそれに従ったが、それ以外は煩雑さを避けるため名称を新たにつけた(『小堀遠州茶会記』など)。そして、掛物、道具はデータをできるだけ等価にするため、本席(濃茶)における道具を採り上げた。つまり、寄付や待合、書院、鎖の間などの掛物や道具類はここでは対象外とした。

底本は、それぞれ以下の通りである。

・『今井宗久茶湯書抜』:湯川制監修『今井宗久茶湯書抜』(渡辺書店、昭和四十九年十一月)

・『宗達他会記』『宗達自会記』『宗及他会記』『宗及自会記』『久政茶会記』『宗湛日記』『久好茶会記』『久重茶会記』:『茶道古典全集』第五巻〜第十巻(淡交新社)

・『有楽亭茶湯日記』:東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九(東京大学出版会、昭和三十三年一月)

・『金森宗和茶会記』:谷晃校訂『金森宗和茶書』思文閣出版、平成九年八月)

・『小堀遠州茶会記』:小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』(主婦の友社、平成八年九月)

・『江岑宗左茶会記』：千宗左監修・千宗員編『江岑宗左茶書』（主婦の友社、平成十年十月）
・『後西院御茶之湯記』：茶道資料館編『茶の湯と掛物Ⅲ―宸翰』（茶道総合資料館、昭和五十八年十月）
・『藤村庸軒茶会記』：樋口功・清水喜久子編『庸軒の茶　茶書茶会記』（河原書店、平成十年五月）
・『伊達綱村茶会記』：酒井巌編『伊達綱村茶会記』（中央公論事業出版、昭和四十三年九月）
・『槐記』：千宗室編纂『茶道古典全集』第五巻（淡交新社、昭和三十三年九月）
・『茶器名物図彙』：草間直方『茶器名物図彙』（文彩社、昭和五十一年十月）
・『酒井宗雅茶会記』：粟田添星『酒井宗雅茶会記』（村松書館、昭和五十年五月）
・『不昧公茶会記抄』：加藤義一郎編『不昧公茶会記抄』（昭和二十年二月）
・『鐘奇斎日々雑記』：原田伴彦編集代表『日本都市生活史料集成』一（学習研究社、昭和五十二年七月）
・『井伊直弼茶会記』：『茶の湯文化学』第三号（茶の湯文化学会、平成八年三月、八一～一八三頁）
・『古今茶湯集』：山本寛他編『古今茶湯集』（慶文堂書店、大正六年九月）、この書は日付順に配列されているが、それを年代順に改めた。また、明治以降の茶会記録は本論稿では割愛した。

(9) 宮嶋幸子氏は「茶会における季節感の誕生」（『美学・芸術学』第十八号、同志社大学文学部美学・芸術研究所、平成十五年三月）において、茶道具の銘に注目し茶道における季節感の誕生を検討された。その結果、銘が表す季節感と実際の季節が一致するのは、やはり小堀遠州の時代からであるという。本論稿と宮嶋氏の論稿は具体的に茶会記を利用し、それを解析して季節感の成立時期を実証的に検討したものである。したがって、この時期に掛物や銘によって季節感を茶にとりいれようとしたと見てまず間違いのないものと思われる。

(10) 『玩貨名物記』（『古典全集』巻十二所収）には、当時存在した小倉色紙とその所持者が記載されている。それによると、当時存在した小倉色紙は二八枚、その内、恋歌は一五枚であり、その内一四枚は皆大名が所持している。残りの一枚は柿本人麿の「あしびきの……」色紙であるが、これは貴族である近衛信尋が所持している。一方恋歌でないものを見てみると、在原行平の「立ちわかれ……」色紙が本願寺所蔵である他は、武家か豪商といわれるものばかりであり、当時からごく限られた者しか所持できない高価なものであったことが容易に想像できる。

(11) 歌徳説話というのは、歌を上手くよむことによって利益がもたらされるといった一連の説話群をいう。これらを取り上げて論じたものには、上岡勇司「紀貫之と歌の徳」（北海道教育大学語学文学会『語学文学』二五号、昭和六十二年三月）や、同氏による「勅撰和歌集に現われたる歌徳説話―その様相と傾向を探る―」（説話と説話文学の会編『説話論集』第三集、清文堂出版、平成五年五月）、大谷俊太「歌徳説話の位相―雨乞をめぐって」（京都大学国文学会

『国語国文』第五十七巻第五号、昭和六十三年五月）、小川豊生「（歌徳）と（徳政）―『十訓抄』をめぐって」（日本文学協会『日本文学』第四十五巻第二号、平成八年二月）などがある。

(12) 小堀宗慶「小堀遠州の茶会における心遣い」（林屋晴三監修『「江戸時代の茶の湯」展―織部・遠州・宗和・宗旦とその流れ―』日本経済新聞社、平成三年十月所収）

(13) 『日本随筆大成』第三期第十二巻、吉川弘文館、四五三頁

(14) 小松茂美『小松茂美著作集』第二十四巻には、「小倉百人一首」の項があり、色紙の来歴に関する考証、所蔵者の変遷などが記載されている。昭和初期の落札価格に関する記事は、同書六一一～六一三頁にある。

(15) 一で見たように、彼は『喫茶敲門瓦子』の中で「恋歌ハ不好」といっているのであるから、この歌が恋歌であるという認識をしていたならば、掛物として使用しなかったと推測できる。ちなみに、『喫茶敲門瓦子』の成立はこの茶会が行われた年から四年後である。

(16) 利休二百五十回忌に関しては、千宗左、千宗室、千宗守監修『利休大事典』（淡交社、平成元年十月）に「利休の年忌」という項があり、その中で解説されている他に、筒井紘一氏が「玄々斎千宗室と『茶道の源意』」（武家史談会編『武家茶道の系譜』べりかん社、昭和五十八年四月、二六九～三二二頁）に詳しい。

(17) 例えば『蔵笥百首』（元文二年刊）や『難波津百首』（文化十二年刊）では、その序文において「婦女子の教育の為」に百首を選んだといった趣旨のことが述べられているが、そこには恋歌が入っている。これが、明治以降になると同じような趣旨で作られたものでも、西村茂樹編『新撰百人一首』（中外堂、明治十六年九月）や蔦廼舎主人撰『修正小倉百首』（女学雑誌社、明治二十六年九月）などでは、恋歌は完全に排除される。拙稿「恋歌の消滅―『百人一首』の近代的特徴について」『日本研究』第二十七集（国際日本文化研究センター、平成十五年三月、二一五～二三七頁）参照。

(18) 一で述べた『江岑夏書』の引用記事を指す。ここでは、「あまのはら……」「やへむぐら……」「こぬ人を……」の三首は特別扱いされている。

(19) 茶道資料館編『茶の湯の名器―由来と銘』（昭和六十三年十月）には、筒井紘一「茶器―銘とその由来―」、八木意知男「歌銘の世界―茶歌道交渉史の一齣―」、赤沼多佳「茶道具の由来と銘―室町・桃山時代の様相―」、島村芳宏「江戸時代における銘の展開―茶入・茶碗・花入・茶杓を中心に―」、「座談会　茶の湯の名器―由来と銘―」、「茶会記に見る有銘茶器一覧」の諸論文が掲載されている。この図録は、この時行われた展覧会の為の図録であるが、その価値はそれだけにとどまらず、銘に関する研究の現状を知る上でも貴重な資料となっている。

(20) 氏はこれを『久政茶会記』や『分類草人木』などの記述に従い、『詞花和歌集』春部や『百人一首』にある伊勢大輔の歌「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな」から採られたものだとされている。

(21) 筒井氏論文七六頁

(22) 前注同論文七九頁

(23) 八木氏論文八四頁

(24) 前注同論文九九頁
(25) 前注同論文一〇六頁
(26) 前注同論文一一〇頁
(27) 底本として小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』(主婦の友社、平成八年九月)を使用した。表4は茶会の客組、表5は道具組を示した。ただし、遠州の茶会記の特徴として、釜の記載が少なく、茶杓の記載は一切無い。釜がどのようなものであるかがはっきりとわかるのは、表にした三三三回の茶会記中わずかに二二回である。また、通常道具組というと茶杓も記載するのであるが、上記のような理由から表5では茶杓の項を省いた。
(28) 中村幸彦校注『近世町人思想』(『日本思想体系』五九、岩波書店、昭和五十年十一月、一三五頁)
(29) 西山松之助氏がいうように、実質的には「千家の茶は、茶そのものの高度なる、わびとかすきに徹して、高い精神の自由境にあそぶ遊芸というよりは、道具や茶席、あるいは料理などに興じ、七事の遊びなどを催して、今日のいわゆるレクリエーションの目的を果したので、それは広く盛んに町人の間に迎えられることになった」(『家元の研究』『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、平成二年八月第二刷、三七九頁)かもしれない。しかし、千家の建前としてはやはりわびやすきといった高い精神性をかかげておく必要があったのではないか。そしてそれは主な享受者である町人階級も望んでいたことかもしれない。
(30) 『麒麟抄』は早川純三郎『日本書画苑』第一(国書刊行会、大正三年十月)や塙保己一編『続群書類従』第三十一輯下・雑部(続群書類従完成会、大正十五年十二月)に翻刻されているが、両者は同書異本である。扇面に恋歌を書くことについての記述は前者では巻五に記述されているのに対し、後者では巻八にその記述がある。その部分の記述において両者に違いは見られない。ただし、『筆法才葉集』とは祝言の歌の部分が「可成畳目折目ニ不書」と異なっている。
(31) 吉野裕子『扇:性と古代信仰』(人文書院、昭和五十九年四月、四五頁に当時(昭和四十一年十二月中旬)日本舞踏協会会長をつとめていた田中良氏の話として紹介されている。